第一部　太田荘域における石造遺物の実態

第一章　太田荘の石造遺物

――種別ごとの解説――

波田一夫
蔵橋純海夫

(一)　多層塔

荘内における層塔は、残欠を含めて現在八基発見されている。この外荘外のものとして宇津戸の照善寺境内に層塔の残欠（笠）がある。

これらの層塔の中で最も古いものと推定されるものは、世羅町大字田打若永の層塔残欠であろう。石質も他の層塔と異なり、凝灰岩製のもので、凝灰岩のものは他の種類の石塔には見られない。近辺では三原市沼田東町本市の川崎家の層塔残欠と共通している（『三原市の石造物』三頁）。造立の時代は鎌倉時代前期を下らないと思われる。

次に代表的なものは世羅町大字堀越の万福寺跡にある七重の塔で応安三年（一三七〇）の紀年銘を有する高さ四メートルを超える大型のものである。年号銘を有するので、他の無銘の層塔の造立年代を推定する規準となるものである。

また甲山町大字青近の毘沙門堂の脇には五重塔と三重塔の二基の層塔がある。いずれも南北朝時代から室町初期にかけての造立と思われる。この外のものはいずれも残欠で、今高野山に二層、世羅町大字本郷の辻堂に一層、甲山町大字宇津戸の照善寺境内に一層ある。いずれも小型のもので、本来三重塔として造立されたものであろう。

表1 郡内の層塔一覧表

No.	名称	所在地	現高(センチ)	備考
1	万福寺跡七重塔	世羅町大字堀越	四一九	県重文指定・応安三年八月（一三七〇）造立
2	毘沙門堂脇五重塔	甲山町大字青近	三二三	町重文指定・曽我兄弟の墓の伝説あり
3	毘沙門堂脇三重塔	甲山町大字青近	二〇六	町重文指定・曽我兄弟の墓の伝説あり
4	福仙寺跡三重塔	甲山町大字別迫	一〇五	町重文指定・元付近の小丸山にあった
5	福井家墓地三重塔	甲山町大字川尻	八二	相輪・基礎を欠失
6	十日市堂の層塔残欠	世羅町大字本郷	二〇・五	一層のみ（高さ二〇・五センチ、笠幅三一・五センチ）
7	今高野山の層塔残欠	甲山町大字甲山	二〇（一層）	護摩堂脇に一層（高さ二〇センチ、笠幅三二・五センチ）総門の支柱の礎石に一層
8	若永の層塔残欠	世羅町大字田打	一〇五	凝灰岩製・基礎と塔身と一層のみ
9	照善寺の層塔残欠	甲山町大字宇津戸	一四	一層のみ（高さ一四センチ、笠幅三四センチ）

尚、万福寺跡塔・毘沙門堂塔・川尻の福井家墓地塔は、塔身に金剛界四仏の種子を配している。また、奉籠孔のあるものとしては、青近の毘沙門堂脇の五重の塔がある。万福寺跡の七重の塔は内部が未調査のため、奉籠孔の有無は未確認である。

1 若永の層塔残欠

世羅町大字田打

世羅町田打の若永峠近くの蛇伝説の残る溜池の上に、一辺二・五メートルの不整形な方形基壇があり、その上に凝灰岩製の基礎・塔

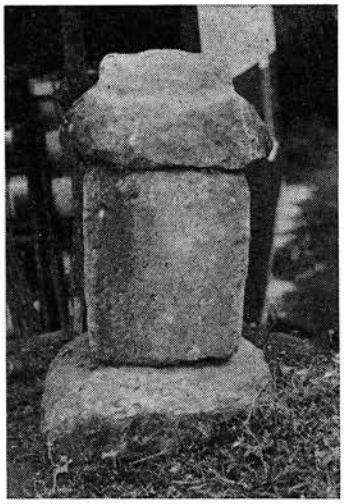

図2 若永の層塔残欠

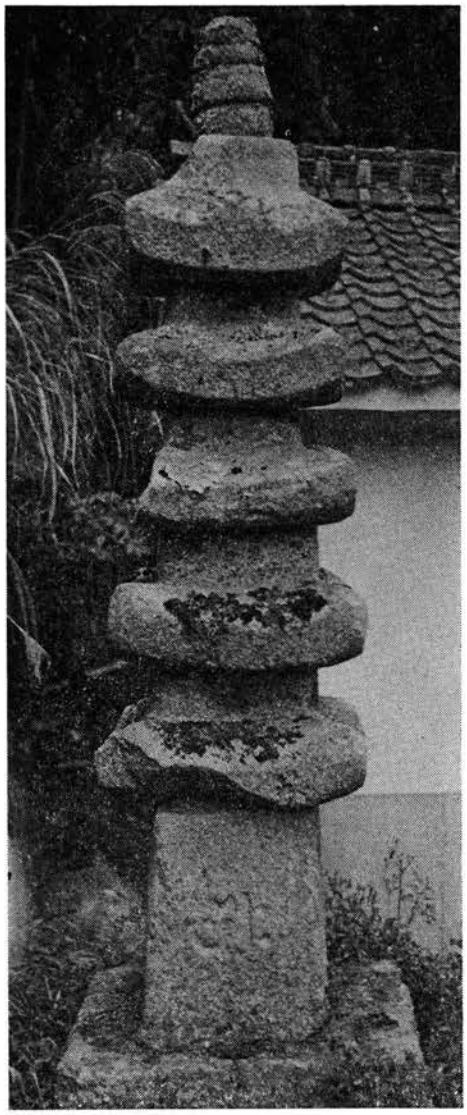

図6　青目寺の五重塔（府中市本山町）

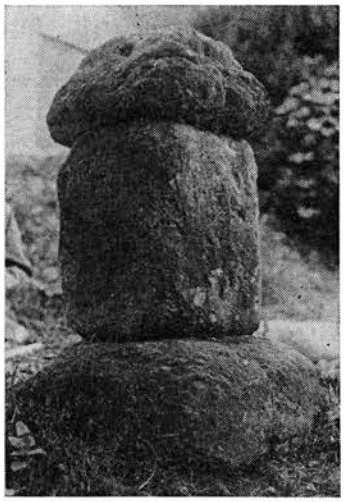

図3　同

図4　同

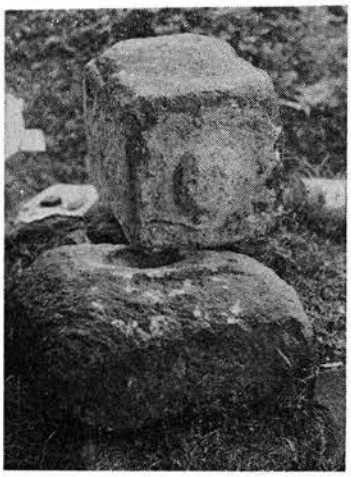

図5　同

図7　川崎家の層塔残欠（『三原市の石造物』より）

身・笠一層分の層塔残欠がある。

現高一〇五センチ、基礎は高さ二五センチ、幅六〇センチで、高さが低い。高さ二一センチのところから、緩かな傾斜を描いている。基礎の中央部に径一七センチの枘穴があり、穴は深さ一〇センチのところから外側に湾屈し、内部が広く中空になっている。

塔身は、高さ五〇・五センチ、幅三九～四〇センチで、上端より下端の方が、一センチ狭い。或は上下が逆になっているかも知れないが、刻字が風化しているので定かでない。上部及び下部にそれぞ

れ径一六センチ、高さ四センチの枘を造り出している。

塔身の幅に対する高さの比率は一・二五で縦長であり、古式の形式を伝えている。

笠は、高さ二五センチで風化が進み、測定がやや困難な点があるが、軒幅約四九～五〇センチ、軸部は上端三二センチ、下端三四センチ、高さ一〇センチである。上部に径一六～一七センチの枘が僅かに造り出され、笠の下部には、塔身の枘を受け入れる穴があいている。

凝灰岩製の層塔は、荘内では他に例がなく、近辺でも類似の塔としては、三原市沼田東町本市の川崎家の層塔残欠及び、同幸崎町渡瀬の柳迫の層塔残欠等があるのみで、珍らしいものである（『三原市の石造物』三六頁）。造立年代は鎌倉前期から中期にかけてのものと推定される。

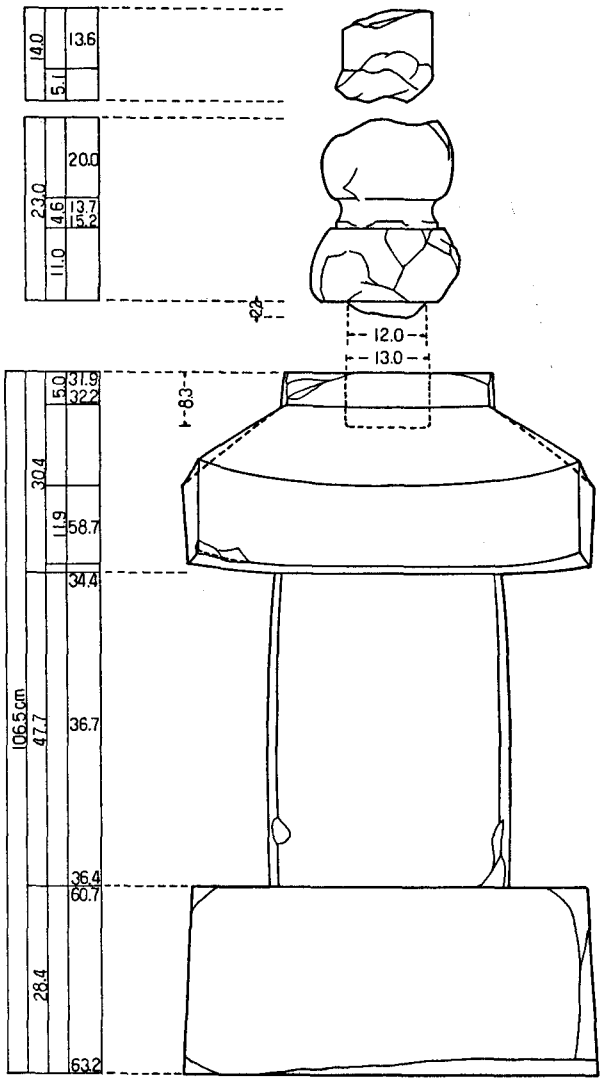

図8　柳迫の層塔残欠実測図（同）

2 万福寺跡の七重塔

世羅町大字堀越

世羅町堀越に天満宮があり、本殿の左側山道を二〇〇メートルばかり登った所に、花崗岩製の七重の層塔が建っている。高さ現高四一九センチで、相輪の請花宝珠を欠失する他は完存している。

基壇は二段で構築されており、下段は一辺一六〇センチ、高さ二七センチ以上、上段は一辺一三四センチ、高さ一五センチの切り石素面である。

基礎は高さ五八センチ、幅は上端八六センチ、下端八七・五セン

図9　万福寺跡の七重塔（全景）

チ、側面は四面切り放しの素面である。銘文は正面いっぱいに七行合計四三文字を陰刻している。

右石塔造立之
志意趣者
為四恩法界
無遮平等
大工藤原行□（頭カ）
應安第三庚戌
八月時正廿七日大願主敬白

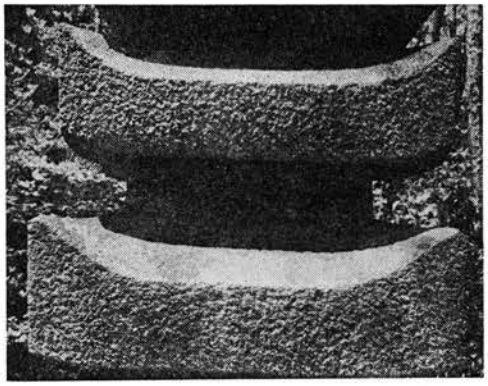

図10　同（層部）

図11　同（基礎・銘文）

塔身は高さ五〇・五センチ、幅は上端五八センチ、下端五八・四センチで、四面には金剛界四仏の種子を薬研彫りで刻している。月輪はない。

笠は各層軸部造り付け式で、第一層は高さ三九センチ、軒幅は下端で七八センチ、軒の厚さ中央で一六センチ、軸部の高さ一〇・五センチ、軸部の幅は下端で五〇センチである。第二層は高さ三三センチ、軒幅は下端七三・五センチ、軒の厚さ中央一四センチ、軸部の高さ九・二センチ、軸幅は下端四五・七センチである。第三層は高さ三三センチ、軒幅は下端七一・八センチ、軒の厚さ一三センチ、軸部の高さ九センチ、軸部の幅は下端で四四・五センチである。第四層は高さ三三・七センチ、軒幅は下端七〇・五センチ、軒中央

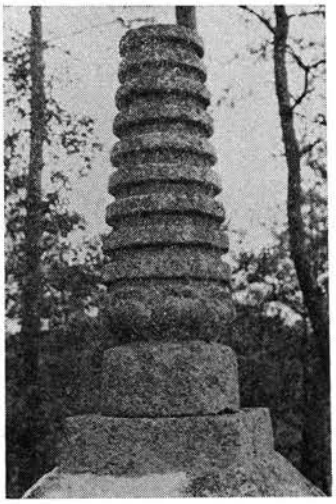

図12　同（相輪）

の厚さ一二・五センチ、軸部の高さ九センチである。第五層は高さ三三・七センチ、軒幅は下端六六・八センチ、軒中央の厚さ一三センチ、軸部の高さ八・五センチ、第六層は高さ三〇センチ、軒幅六五センチ、軸部の高さ七・五センチ、軸部幅下端四三・五センチ、第七層は高さ四二・三センチ、軒幅六四センチ、露盤の幅は二八・五センチである。

伏鉢は高さ一一センチ、幅二八・五センチ、下の請花は高さ九センチで、相輪は上に行くに従ってかなりすぼまり、各輪はていねいに刻出してある。九輪の上部宝珠・請花の部分を欠失している点は惜しまれるが、堂々たる層塔で、広島県重要文化財に指定されている。

3 毘沙門堂脇の五重塔

甲山町大字青近毘沙門堂脇

青近の毘沙門堂の脇に二基の層塔が、宝篋印塔や五輪塔と共に並立している。図一三は五重の層塔で花崗岩製、現高二二三センチで、相輪の第五輪より上部を欠失している。

基礎は四面切り放しの素面で、高さ三三センチ、幅は上端五五・五センチ、下端五六センチである。塔身は高さ・幅とも三四・二センチの立方体で、四面に月輪なしで、金剛界四仏の種子を大きく薬研彫りしている。

図13 毘沙門堂脇の五重塔

笠は各層軸部造り付け式で、第一層は軒幅四九・八センチ、厚さは中央で一〇・五センチ、左右の隅で一二センチ、軸部の高さは一一センチである。第二層は軒幅四三・四センチ、厚さ中央九センチ、隅一二センチ、軸部の高さ九・五センチ、第三層は軒幅四〇センチ、厚さ中央八・五センチ、隅一一センチ、軸部の高さ九センチ、第四層は軒幅三七センチ、厚さ中央八センチ、隅九センチ、軸部の高さ八センチ、第五層は軒幅三六センチ、厚さ中央七センチ、隅九センチ、露盤は幅一八センチ、高さ四・七センチ、相輪は現高三六センチで、九輪の五輪より上部を欠失している。伏鉢は高さ九センチ、径は一六・五センチ、請花は高さ五・五センチである。

塔身の上部から笠の第一層部の下端にかけて径一三・五センチ、深さ一七・五センチの奉籠孔があるが、遺物は残っていない。基礎

部は半ば斜面の土中に埋もれているので調査ができていない。このため銘文等は不明であるが、形式から見て南北朝時代の造立と思われる。

図一四は三重の層塔で花崗岩製、現高二〇六センチで、相輪の第九輪より上部を欠失している。

基壇の一部と見られる長さ八六・五センチ、高さ二二センチの切り石があり、この上に高さ三五センチ、幅五二センチ、四面切り放しの素面の基礎がある。

塔身は高さ三〇センチ、幅三一・五センチで、四面に月輪なしの金剛界四仏の種子があり、種子の左右に刻銘の跡がある。

笠は各層軸部造り付け式で、第一層は高さ二七センチ、軒幅四五センチ、厚さ中央九センチ、隅一二センチ、第二層は、高さ二四・五センチ、軒幅四〇センチ、厚さ中央八センチ、隅一二センチ、第三層は高さ二二・五センチ、軒幅三六・五センチ、厚さ中央七センチ、隅は欠損していて不明である。

相輪部は現高三九・五センチで、第九輪より上部を欠失している。

図14　毘沙門堂脇の三重塔

図15　毘沙門堂脇の石塔

伏鉢は下部の直径一〇センチ、高さ九センチ、請花は高さ五センチである。九輪は上すぼみに各輪をていねいに刻み出してある。この層塔の建立時代は、前記の五重塔とあまり隔たることのない時期と思われる。

本塔の脇には三基の宝篋印塔と五～六基分の五輪塔の残欠があり、更に地つづきの一〇〇メートルほど北方の山中に「タカノコウ」と呼ばれている地域には、一〇基ばかりの五輪塔が散在している。

これらの古石塔は、伝説では曽我兄弟の墓と伝えているが、恐らく青近公文級の者が発願主となって建立したものであろう。毘沙門堂の奥、一〇〇メートルばかりの地域を古城跡とも伝えているが、本塔のある地点の西側一〇〇メートルばかりにも城跡を思わせる台地があり、この付近に公文級の屋敷が存在したのではないかと推定される。

4　福井家墓地の三重塔残欠

甲山町大字川尻

甲山町川尻の福井家墓地脇に、五輪塔の残欠と共に並立する。高さ八二センチ、花崗岩製で基礎及び相輪部を欠失している。

塔身は高さ二三センチ、幅二四・三センチで、四面に月輪なしで金剛界四仏の種子を薬研彫りしている。

図16　福井家墓地の層塔

図17　福井家墓地脇の五輪塔

笠は各層軸部造り付け式で、第一層は軒幅三六・五センチ、厚さ中央七センチ、高さ二〇・五センチ、軸部は上端幅二〇・五センチ、高さ三・三センチ、第二層は軒幅三四・七センチ、厚さ中央七センチ、高さ一九・七センチ、第三層は軒幅三二センチ、厚さ中央七・五センチ、高さ二〇・五センチで、露盤は上端幅一七・〇センチで、相輪を支える径八・七センチ、深さ六センチの枘穴がある。

本塔の脇には五輪塔の残欠がある。いずれも石質良好で風化が少なく、各輪に種子を陰刻しているものが多い。これらの五輪塔は南北朝期から室町中期にかけての造立と推定され、層塔も同じ時期の造立と思われる。

5　福仙寺跡の三重塔

甲山町大字別迫福仙寺跡墓地

甲山町別迫の播磨と呼ばれる地域の福仙(千)寺跡に本塔がある。元は近くの堂山と呼ばれていた小段丘の上に、他の結晶石灰岩製の宝篋印塔一基（経塚）や五輪塔と共に並立していたものであるが、近年の耕地整理によって、この段丘がけずり取られたために、現在地へ移転したものである。

高さ一〇五センチ、花崗岩製で三重の層塔であるが、相輪部を欠失している。

基礎は四面切り放しの素面で、高さ二七センチ、幅三六・五センチである。塔身は高さ二〇センチ、幅二〇・五センチで、四面に梵字なく、上下に枘を造り出している。

笠は各層軸部造り付け式で、第一層は軒幅二八・五センチ、軸部幅一六・五センチ、高さ四・二センチ、第二層の軒幅二九・五センチ、軸部幅一七センチ、高さ三・七センチ、第三層は軒幅二八センチ、露盤は幅一五・三センチ、高さ三・五センチで、中央部に相輪を支える径七・二センチ、深さ五・五センチの枘穴がある。

第二層の笠の傾斜は、他の層のものより傾斜が緩やかで、石質も異なっているので、他のものか後補かも知れない。

播磨の地は、建久元年（一一九〇）六月の僧鑁阿置文の中で村々別作田として「幡广二木」として記載されており、当時既に開拓が

図18　福仙寺跡の三重塔

進んでいたことを物語っている。現在、層塔のある福仙寺跡付近は、播磨の地の中心地であり、播磨赤羽根の宝篋印塔（六図八）と共に当時を語る石造物として貴重である。尚、福仙寺跡の石塔群（宝篋印塔一基・五輪塔多数・宝塔の相輪一）は一括して甲山町の重要文化財に指定されている。

6 その他の層塔残欠

甲山町大字甲山今高野山に、笠幅三二・五センチ、高さ二〇センチの笠が一層、護摩堂脇の古石塔群の中に混じっている。これに付随すると思われる笠が一層、総門の補助支柱の支え石に使われている。残欠から推定すると、甲山町別迫播磨の三重層塔程度の層塔が安楽院跡付近に建立されていたものと思われる。安楽院本堂の回り縁の支柱の根石には、五輪塔の火輪がたくさん使われており、或は、この中に層塔が混じっているかも知れない。

世羅町大字本郷の自動車教習所横の辻堂（十日市堂）脇に、笠が一層古石塔の中に混じっている。笠幅三一・五センチ、厚さ中央六センチ、高さ二〇・五センチの花崗岩製である。軸部の上端の幅一五・五センチ、下端の幅一六センチ、高さ四・五センチである。

甲山町大字宇津戸の照善寺の裏庭に花崗岩製の笠一層が五輪塔の残欠と共につみ重ねられている。笠幅三四センチ、厚さ中央部五センチ、高さ一四センチである。大きさからみて小型の三重層塔のものと思われる。

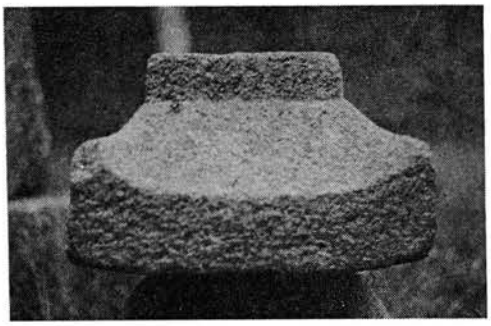

図19 今高野山の層塔残欠

図20 十日市堂の層塔残欠

(二) 宝塔

荘内における宝塔は、世羅町大字重永慈徳院墓地の塔一基と、甲山町大字別迫播磨の福仙寺跡の宝塔残欠（相輪部）のみである。近辺のものとしては、世羅町と境を接する御調郡久井町下津の末政御墓の椿の宝塔（塔身を欠く）がある。これらの宝塔はいずれも花崗岩製のもので、形式から見て鎌倉末期から南北朝期の造立と推定される。

1　慈徳院墓地の宝塔　　世羅町大字重永

慈徳院墓地の奥まった場所に建ち、相輪の伏鉢と九輪の一部を欠失するほかは各部を完備している。花崗岩製で、現高九〇センチ。基礎は高さ二〇センチ、側面は四面とも切り放しの素面で、幅は三一・五センチである。

塔身は高さ三一センチ、軸部と首部より成り、軸部は高さ二八・五センチ、径は下端二七センチ、中央部付近で二九センチ、側面は素面である。首部は高さ三センチ、径は上端で一五・五センチである。塔身の正面に、高さ一五センチ、幅一七センチに阿弥陀如来と思われる坐像を刻出している。

笠は高さ一九センチ、軒の厚さは中央で五・五センチで美しい軒反りを示している。屋根の流れはゆるやかな傾斜で、露盤は高さ二センチ、径一一・五センチを刻出しており、中央に径六・五センチ、深さ四センチ強の相輪受けの枘穴があいている。相輪は、伏鉢

図21　慈徳院墓地の宝塔

図22　同（塔身部）

部分と、第七輪以上を折損している。

本塔は、広島県府中市本山町の日吉神社境内にある、「正和四年乙卯五月八日　勧進沙門玄真」の銘を持つ宝塔に類似した形式を持っている。

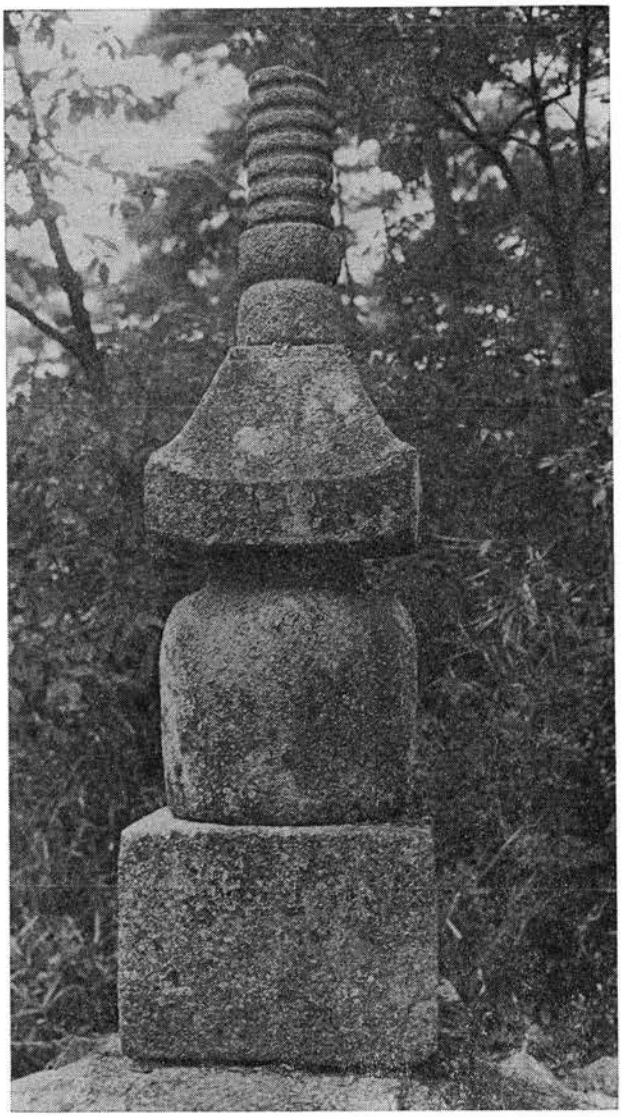

図23　日吉神社の宝塔（府中市本山町）

2　福仙寺墓地の宝塔残欠

甲山町大字別迫

別迫播磨の福仙寺墓地の宝篋印塔脇に、宝塔の相輪部が建ててある。花崗岩製で高さ全高六一センチである。伏鉢は高さ一〇センチ、径二一センチで、下の請花は高さ五センチ、幅一八センチであ

図25　安福寺の宝塔（広島県甲奴郡上下町矢野）

図24　福仙寺墓地の宝塔残欠

る。九輪は浅い線刻で表している。上の請花は高さ六センチ、幅一七・三センチである。宝珠は高さ一六センチ、幅一五・六センチである。

本相輪は、甲奴郡上下町矢野の安福寺にある、南北朝時代の宝塔と酷似している。相輪の大きさから見てかなり大型の宝塔であったものと思われる。

(三) 宝篋印塔

荘内における宝篋印塔は、太田方・桑原方を合わせて数百基を数える。石質は大部分が花崗岩で、鎌倉時代から室町時代末期にかけて広く造立されている。これについて室町中期頃から末期にかけて結晶石灰岩製（こごめ石）の造立が一部で見られる。凝灰岩製のものは塔身一基と層塔一基を見るだけである。

大きさは、大型のものは笠幅五二センチから六二センチにかけてのもので、基礎に反花のあるもの七例、二段式のもの四例であり、総高がおおむね二〇〇センチを超えるものである。これらの石塔の所在地は、一覧表の通りである（No.1～8）。

大型の石塔は石質が良好で数百年を経過した今日でも風化が進んでいない。これらの石材は備後各地の古い時期の石塔とほぼ共通しており、太田荘内で産出したものとは考えられない。恐らく尾道を経てはるばる荘内まで運びこまれたものと考えられる。これらの石塔は、切り石で二段から三段の基壇が設けられ、更にその上に全体を整形した繰り型つきの基壇を置いたものが多く、塔身には金剛界四仏を種子で刻出したものが通例である。造立の目的については銘文が磨滅しており、また考古学的な発掘調査がなされていないため定かでない。ただ世羅町堀越万福寺跡の正平年号の塔（No.2）には、基礎の格狭間両端に「奉書写阿弥陀経、正平十二年十一月、大願主僧契阿弥陀佛」とあり、阿弥陀経を書写して納置したものと思われる。また、甲山町赤屋の明覚寺跡墓地の宝篋印塔の下から、高さ三〇センチの亀山式の壺が発見されており、骨蔵器であったものかもしれない（甲山町歴史民俗資料館蔵）。

大型の宝篋印塔は残欠を含めて、これまでに一一基発見されているが、いずれもが寺跡と推定される場所にあり、当時の支配階級が願主となって菩提寺に造立したものであろう。ちなみに県内に於ける同時期有銘の宝篋印塔の銘文を見ると、三原市沼田東町米山寺塔には、「大工念心　元応元年己未十一月日　一結衆敬白」とあり、尾道市東久保町浄土寺の塔には、「右造立志者　沙弥行円同□　尼明阿弥陀仏　沙弥道金同尼　覚法已上四人為　逆修也兼各　為光孝□□　追善也敬白　貞和四年戊子　十月一日大願主□各敬白」とある。芦品郡新市町上安井の塔には、「延文元年丙申　十一月日　願主□阿弥」とあり、庄原市本町宝蔵寺の塔には、「右願主沙　弥並量敬白　造立志者妙救　霊界有情三□　八難当証大菩　提心所願妙塔」、延文四己亥　南呂下旬日」とある。尾道市西藤町万福寺の塔には、「右志趣者　法界有情也　貞治三年甲辰　仲春十三日　大願主貞阿大工　行信」とあり、芦品郡新市町厚山の塔には、「奉造立石塔

右志者相当　□宗禅定門　七周忌之辰　康暦二年　庚申七月二十五日」とある。高田郡甲田町上甲立男山八幡神社の塔には、「逆修願衆八十八人　応永五年十月十日」とあり、裏面に二三名の衆徒の記載がある（是光吉基「芸備地方における中世石造物の研究――とくに有紀年銘石造物について――」『瀬戸内海地域の宗教と文化』）。

次に最も数の多い中型のものは、笠幅四〇センチ前後から三三センチ前後のもので、南北朝から室町中期にかけてのものと推定される。室町前期から末期にかけてのものは、笠幅二五・五センチから二八センチ前後と小型化している。また室町中期から後期にかけて結晶石灰岩製のものが造立されており、笠幅は花崗岩質の同時期のものとほぼ一致している。そして室町末期から江戸初期にかけてのものと推定されるものは笠幅一六センチから一八センチ程度の小型のものが多い。

これら中型の花崗岩製の宝篋印塔は、荘内の名主級の中でも有力者の造立したものと推定されるが、造塔の性格は刻銘がほとんど見られないために不明な点も多い。将来、考古学的発掘調査によって地下の埋納状況が分かり、供養塔であるか墓塔であるかなど種々の問題が明らかになることを期待したい。

ほかに特徴あるものとしては、南北朝初期の造立と推定される宇津戸の京蔵山塔の基礎の上部に長方形の奉籠孔のある例がある。また室町後期の造立と推定される甲山町赤屋の文裁寺墓地塔の基礎には、「𑖀（タラーク）大成　宗功」の陰刻が見られる。年号銘のないのが惜しまれるが、珍らしい銘文のタイプである。

宝篋印塔の基礎は二段式のものと反花を刻出したものとがあるが、南北朝期から室町初期にかけての造塔は二段式のものが多く、室町中期以降、末期にかけては、反花の形式化されたものが多い。石質は古い時代のものは大型の塔と同様に良好で、風化が比較的進まず、室町後期から末期にかけてのものは、石質が不良で風化が進んでいる。これから、南北朝期から室町初期・中期にかけては、県内外から良質の石を求めたことが考えられ、室町後期に至っては近在に産出する花崗岩で間に合わせたと考えられるのである。

石工については刻銘の例がないので定かではないが、世羅町堀越万福寺跡の応安三年の七重塔には、「大工藤原行□（願カ）」と陰刻してある。

他に県内の石塔で大工名のわかるものには、芦品郡新市町吉備津神社の三重層塔に、「大工尾道□□□□□（元亀三年）」とあり、尾道浄土寺の弘安元年の宝塔には、「大工刑部安光」とある。そして三原市沼田東町米山寺の元応元年の宝篋印塔には、「大工念心」とあり、尾道市西藤町万福寺の貞治三年宝篋印塔には、「大工行信」の刻銘が見られる。当時石塔を造る専門の大工が荘内にも居たことは、例えば桑原方に散在する宝篋印塔に、同一規格のものがあるこ

表2 郡内の主要な宝篋印塔（花崗岩製）一覧表

No.	名称	所在地	現高（センチ）	笠幅（センチ）	基礎の形式	備考
1	光明寺跡塔	世羅町大字京丸	二九六	六三・五	二段	堀越の万福寺跡に近い。完存。京丸地頭に関連の塔か。鎌倉時代末～南北朝初期。
2	万福寺跡塔	世羅町大字堀越	一八〇	五五・八	反花	相輪欠失。正平十二年の造立。基壇にも反花あり。
3	万福寺跡池の端塔	世羅町大字堀越	一八二	五六	二段	相輪の一部欠失。塔身は月輪内に梵字。南北朝時代。
4	明覚寺跡墓地右塔	甲山町大字赤屋	二四四	五一・六	反花	完存。万福寺跡正平年号塔の格狭間に似る。南北朝時代。
5	明覚寺跡墓地左塔	甲山町大字赤屋	二四三	五四・五	反花	完存。右塔よりやや時代が下る。
6	下津十二坊跡塔	甲山町大字伊尾	二二三	五四	反花	相輪の一部欠失。桑原方地頭に関連の塔か。南北朝～室町初期。
7	神岡山塔	世羅町大字重永	一四六	五七	反花	塔身を欠失。基壇の一部及び塔身が慈徳院墓地にある。四面格狭間の脇に銘文の跡。室町初期。
8	善法寺参道脇塔	世羅町大字賀茂	二〇四	五七	二段	宝珠の一部を欠損。室町時代。笠は上八段あり。
9	宇山鐘つき堂平塔	世羅町大字寺町	九五	四五・六	二段	相輪を欠失。寺町公文に関係するものか。
10	青水小吹気塔	世羅町大字青水	二〇二	四〇	反花	基壇あり。宝珠を欠損。南北朝時代。
11	井折普光寺塔	世羅町大字井折	一三四	三七・五外	反花二段	十基ばかりあり。No.48も関連。室町時代。
12	福智院境内の残欠	甲山町大字甲山	四三	—	反花	基礎（幅五三センチ）を手水鉢に転用。南北朝末～室町初期。
13	上谷大原家墓地の残欠	甲山町大字東上原	八三	—	—	相輪のみで大型に属する。
14	今高野山胡神社脇の残欠	甲山町大字甲山	二九	三八	—	笠のみで上七段。鎌倉時代。他に一基、室町初期。
15	照善寺境内の残欠	甲山町大字宇津戸	二六	—	反花	基礎（幅四一センチ）四面格狭間脇に銘文あり。南北朝時代。
16	福仙寺跡塔	甲山町大字別迫	一四二	三四	二段	相輪の六輪以上を欠失。室町時代。三面格狭間。
17	円満寺墓地塔	甲山町大字青近	六五	三二	二段	相輪欠失。青近タカノコウより移転。三面格狭間。
18	金剛丸塔	甲山町大字西上原	八八	三二	二段	岡の曽根の金剛丸（小林家）基地にあり。塔身欠失。南北朝時代。
19	播磨赤羽根塔	甲山町大字別迫	一〇〇	三二・五	二段	基壇あり、相輪の七輪以上欠失。三面格狭間。室町初期。
20	砂田の山近塔	甲山町大字宇津戸	九三	三四・五	反花	相輪の五輪以上欠失。三面格狭間。南北朝時代。銘あり。

21	矢熊水が迫塔	甲山町大字宇津戸	八六	三二・五	反花	相輪の四輪以上欠失。室町時代。
22	積善寺墓地塔	甲山町大字宇津戸	—	—	二段	相輪は別物。室町時代。
23	長田篠村塔	世羅西町大字長田	一一七	三一・五	二段	完存。但し基壇なし。三面格狭間。室町時代。
24	宇山観音堂裏山塔	世羅町大字寺町	七四	三四	二段	径三メートルの盛土あり。三面格狭間。梵字一字。
25	高山塔	甲奴町大字宇賀	一三六	三六・〇	二段	相輪の一部を欠失。三面格狭間。室町時代。
26	善法寺境内塔	世羅町大字賀茂	七一	三四・五	二段	相輪欠失。南北朝時代。
27	観音寺跡墓地塔	世羅町大字津口	一一八	三二	反花	完存。他に一基相輪の七輪以上欠失(二段式)。室町時代。
28	薬師堂塔	甲山町大字川尻	一一七	三一	反花	完存。川尻の地頭湯谷氏の造立になるものか。
29	毘沙門堂脇塔	甲山町大字青近	八四外	三二	二段	相輪の一部欠失。他に残欠あり。層塔二基もある。
30	歓喜寺跡塔	世羅西町大字黒川	一二二	三二	反花	四基。相輪の一部欠失。南北朝〜室町。
31	潮音寺伝赤川氏塔	世羅西町大字小国		三七・五外	反花	四基。室町時代。
32	白雲寺跡塔	世羅西町大字山中福田	一二〇	三三	二段	完存。室町初期。
33	十王堂塔	世羅西町大字山中福田	六六・五	三一・五	二段	相輪欠失。
34	羽賀山塔	世羅町大字京丸	六二	三二・〇	二段	相輪欠失。
35	田幸の石塔	世羅町大字徳市	九一・五	三二・五	二段	相輪の一部欠失。盛土あり。南北朝時代。塔身に月輪中梵字あり。
36	潮楽寺跡塔	世羅町大字安田	一三〇	三二・五	反花	相輪の一部欠失。塔身に月輪に梵字。文安四年の銘有り。
37	善昌庵墓地塔	世羅町大字安田			反花	三基花崗岩で相輪の一部欠失。石灰岩製一基。室町時代。
38	ヤンサコ堂塔	世羅町大字井折	七五	三一	二段	相輪の大部分欠失。室町時代。
39	万年寺跡塔	甲山町大字川尻	一二九	三〇・五	反花	完存。塔身に「天文十六、九月五日、春岳宗榮、和智[illegible]信」の陰刻。
40	文栽寺墓地塔	甲山町大字赤屋	一一〇	三八外	反花	完存。数基あり。一基に「平大成宗功」の陰刻あり。室町後期。
41	鳳林寺伝湯浅氏塔	甲山町大字伊尾	一二五外	二八〜三〇	反花	五基。尾首城主湯浅氏の墓という。室町後期。
42	福地坊跡墓地塔	世羅町大字徳市			反花	六基。尾首城の家老福永氏に関係か。室町末期。
43	カナン堂脇塔	世羅町大字安田	一三二	四一	反花	宝殊部欠。盛土上に有り切石基壇有り。南北朝〜室町。

No.	名称	所在地	現高(センチ)	笠幅(センチ)	基礎の形式	備考
44	山口宅前庭残欠	世羅町大字東神崎	—	—	二段	三面格狭間。形式南北朝を下らず。
45	石塔曽根の宝篋印塔	世羅西町大字山中福田	一〇九	三一・五	二段	大御堂(近江堂)の別当坊カンカン和尚の墓と伝う。室町時代。
46	金福寺跡塔	世羅町大字黒渕	六四	三〇・五	二段	地頭の墓地と比定され外に五輪塔五〇基ほど。
47	長田の中迫の塔	世羅西町大字長田	八八	三一・五	二段	塔身を欠く。他は完全。
48	普光寺裏開山塔	世羅町大字井折	一一二	四一	二段	相輪の二輪以上を欠。正平十三年の銘有り。
49	永安寺跡塔	世羅町大字中原				五輪塔五〇基ばかりの中に二基分の宝篋印塔が含まれている。
50	栗光堂塔	世羅町大字安田	一八〇	三一	二段	
51	近久家墓地塔	世羅町大字京丸	三九・五	二八	二段	相輪・塔身を欠く。南北朝。
52	梶谷宅上堂脇塔	世羅町大字寺町				
53	岡ノ堂塔	世羅町大字田打	一一六		二段	永寿寺谷の西の岡上。石積み壇上にあり。完形。
54	丸谷宅上の塔	世羅町大字田打	四八	三三	二段	永寿寺谷の東山麓。笠部と塔身のみ。鎌倉〜南北朝。
55	殿様墓の下層部	世羅町大字重永	—	—	反花	石灰岩質宝篋印塔の基部に花崗岩の基礎を使っている。南北朝の形式を認める。
56	北之坊の宝篋印塔残欠	御調町大字下山田	五三	三五・二	二段	宇津戸から移転したもので基礎に奉籠孔あり。鎌倉末〜南北朝。
57	今高野山福智院裏の残欠	甲山町大字甲山	—	—	—	反花式の基礎を手水鉢に転用。
58	徳万墓地の宝篋印塔	甲山町大字東上原	—	二八・五	—	笠のみ(上六段・下一段)
59	大坪の宝篋印塔	世羅西町大字小国	一三四	四二	二段	塔身を欠失。四面格狭間。室町中期。
60	福田の黒杭氏墓地脇の残欠	世羅西町大字山中福田	六五	三一	反花	塔身及相輪の一部欠失。基礎に銘の痕跡あり。室町時代。
61	松ケ峠松尾修理大夫の塔	世羅町大字青水	九五	三一	二段	傍に「松尾修理大夫久我通秋坵」の石柱あり。室町後期。
62	今高野山観音堂前の塔	甲山町大字甲山	四〇〇	一二〇	反花	近世(元文三年)三重の基壇の高さを加えると五メートルを超える大型。

となど石塔の実測の結果からある程度推定される。恐らく初期の造塔は尾道周辺の石工の手になるものと思われ、整形したものを荘内に運び入れたか、或いは石材を荘内まで運びこみ、現地で造塔の工事をしたものと思われる。一方、室町中・後期以降の造塔はすべて郡内の石工の手になるものと思われる。宝篋印塔の製造にたずさわった石工は荘内の多くの層塔や五輪塔・石仏等の製造にもたずさわっていたものと思われるが、造塔に係る資料がないため定かではない。いずれにしても荘内の石塔造立は鎌倉中期頃から徐々に始まり、南北朝期から室町中期にかけて流行したようである。この需要に伴って尾道辺りで修業した石工が荘内のどこかで製造にたずさわったものと思われる。

尚、瀬戸内海式（越智式）と呼ばれる基礎の上に中台をのせた形式のものは、太田荘付近には見られない。

次に花崗岩製の塔について各部の時代的な特徴を見てみると、次の点があげられる。

基壇はもともとすべての宝篋印塔に設けられていたか、どうか、基壇の残っているものが少なく判然としない。特に切り石づくりの長石の基壇は、後世他に転用されたものも多いと思われる。中でも小型の塔に付随したものは使用に手ごろであったためか、ほとんど残っていない。

基壇のうち、基礎のすぐ下にくる繰り型の基壇に反花を刻出したものは、当時高級品であったと思われる。三原市米山寺の小早川氏歴代の宝篋印塔には、ほとんどのものに反花が刻出されている（『三原市の石造物』二）。荘内においては、堀越の万福寺塔（No.2）及び普光寺塔（No.11）に見られるのみである。

大型のもので南北朝期前後に造立されたものは、下二段を切り石で築き、上に繰り型のものを置いた例（No.1・5・6）が標準であったと思われる。

中型のもので当時の姿を保っていると思われるものは、世羅町青水の小吹気塔（No.10）が切り石二段を用いており、甲山町別迫の福仙寺跡塔（No.16）は、川原石で盛った塚の上に切り石二段で築いている。この外古式で小型のものでは、金剛丸塔（No.18）やカナン堂脇塔（No.43）、観音寺跡墓地塔（No.27）に、幅五〇センチばかりの方形の一枚石もしくは二枚の切り石でもって一段の基壇が築かれており、こういった形が当時の一般的な築造方法ではなかったかと思われる。

基礎は二段式のものと反花式のものとにわかれるが、いずれも側面に格狭間を設けている。このうち四面に格狭間を設けたもの（No.2・7・11・15・60）は少なく、南北朝期から室町中期頃にかけては、三面に格狭間を設けたものが殆んどである。銘文は正面の格狭

間の両脇に刻んだものが多い。室町末期になると格狭間が前面だけに設けられ、中の紋様も浅く形式的なものになってくる。

格狭間の紋様は鎌倉末期から南北朝期にかけてのものは、中央の花頭形が左右にほぼ水平に開き、左右二個の茨は端寄りに造られ、側面がふくらみをもっている。時代が下るにしたがって、花頭形も中心にせばまる。

なお、基礎格狭間の額部の側面の幅は古式のものほど上下の幅と近く、時代が下るにつれて上下の幅より側面の幅の方が広くなる傾向がある。

塔身は古式のものは、高さに比較してわずか横幅が広いものが多く、室町末期には高さと横幅はほぼ同じとなる。種子は古式のものは塔身いっぱいに大きく深く陰刻されているが、時代の経過につれて小さく浅く彫られる傾向がある。なお、塔身の正面の種子の両脇に銘文が彫られている例（No.39・41・48）がある。

笠は下二段上六段のものが最も多く（花崗岩製）、中には下二段上七段のもの（No.1）、下二段上八段のもの（No.8）もあり、また下一段上六段のもの（No.59）、下二段上五段のもの（No.36・40・30）、下二段上四段のもの（No.30・40）もある。段数の少ないものは石灰岩製のものと同じく室町末期のものである。

隅飾は二弧を輪郭で刻出するものがほとんどであり、三弧のものは荘内では見られない。また古式のものと思われる今高野山胡神社脇のものには弧は見られない。隅飾りに月輪を入れたものも稀で、わずかに万福寺跡正平十二年銘の塔（No.2）と、光明寺跡の塔（No.1）などに見られる。前者は蓮華座の上に月輪を刻出しており、後者は隅飾りの一つにだけ月輪を刻出している。隅飾りの傾斜は太田荘においても室町末期になると外反が著しくなる。

相輪は九輪をていねいに刻出したもの（No.1・4・5など）と、九輪部を浅く界線で刻出したもの（No.30・41など）とがあり、ていねいに刻出している方が時代も古い。なお南北朝期から室町初期にかけての相輪の請花は、下の請花を複弁に、上の請花を単弁に刻出しており、小花は添えてない。

花崗岩製の宝篋印塔は江戸初期頃消滅し、代って小型の石灰岩製のものが造られたようである。この中で例外として、今高野山の観音堂前に巨大な近世宝篋印塔（No.62）が造立されている。

1　今高野山胡神社脇の宝篋印塔残欠

甲山町大字甲山

胡神社の脇に三基の宝篋印塔の残欠と五輪塔が集めてあり、本塔はその中の一基で笠部だけである。

高さ二九センチ、笠幅三七・七センチ、笠中央部の厚さ六・五セ

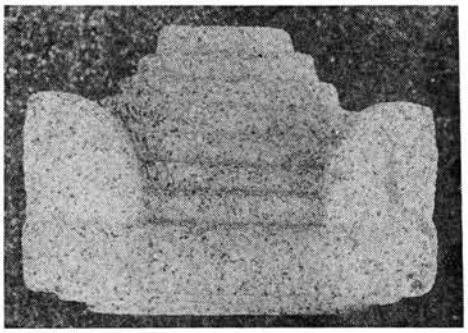

図26　今高野山胡神社脇の宝篋印塔（鎌倉期）

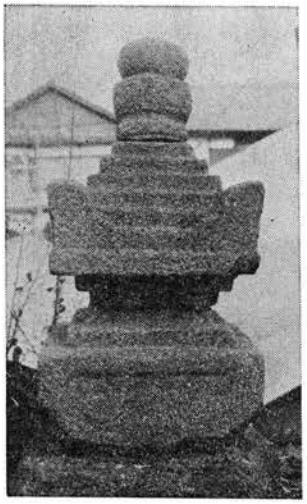

図27　同（室町初期）

ンチの花崗岩製である。形式は下二段・上七段と上部の段数が一段多く、下部の二段は上が高さ一センチ、下が高さ一・三センチと非常に低く、底部に枘穴はない。下端の幅は二七・七センチである。上端は幅一三センチで、中央に径八・五センチ、深さ六・五センチの枘穴がある。

隅飾は下端幅一〇・五センチ、高さ一一・五センチで輪郭はない。隅飾が一弧で直立している点や段数の多い点、下端のつくりから、本塔は荘内で最も古い鎌倉中期頃の造立と推定される。

図二七の宝篋印塔は胡神社脇にある他の一基で、塔身及び相輪の大部分を欠失している。

現高六八・五センチで基礎の高さ二四センチ、幅三六センチ、花崗岩製で三方に格狭間がある。笠は高さ二六センチ、下二段上六段の定形式で、笠幅三三・三センチ、笠中央の厚さ三・五センチである。隅飾は二弧で輪郭を巻いている。相輪は第九輪以上が残存し、高さ一八・五センチある。造立の時期は室町初期と思われる。

2　光明寺跡の宝篋印塔

世羅町大字京丸

京丸の光明寺跡の一画に立派な基壇を備えた本塔がある。基壇からの高さ二九六センチの花崗岩製である。

図28 光明寺跡の宝篋印塔（全景）

図31　光明寺跡の宝篋印塔（拓影）

図29　同（笠部）

図30　同（基礎部）

基壇は下三段に、高さ各二二センチの切り石を口字状に組んでおり、下段の一辺一八八センチ、中段の一辺一五〇センチ、上段の一辺は一二六センチある。この上に高さ二二センチの整形した繰り形のある基壇があり、側面は高さ一〇・五センチ、一辺九五・三センチである。

基礎は高さ四四・五センチ、上に二段を造り付け、その上端は一辺四三・五センチ、側面は高さ三四・五センチ、幅は上下端とも六八・二センチである。三面に輪郭付格狭間があり、背面は切り放しの素面である。輪郭の幅は上六・四センチ、下七・五センチ、左右は各八センチで郭内に花頭形を長さ二六センチ、左右各二個の茨を内側から五・五センチ、三・七センチ幅で刻出し、側線がふくらみをもっている。

塔身は高さ三二センチ、幅三五・三センチで四面に種子ボローン（一字金輪）を一九・五センチの幅でめぐらせている。

笠は高さ五三・五センチ、段形は下二段上六段の定形式で、各一辺は下端四一センチ、上端二八センチである。軒（中央）は厚さ六・五センチ、幅は六三・五センチ、隅飾は高さ二〇・五センチ、下の幅一七・五センチ、二弧で輪郭を巻き、心もち外傾している。なお、隅飾の一つにだけ蓮華座と径八センチの月輪が刻出されている。

相輪は高さ八八センチで、伏鉢は高さ一一センチ、径は二一センチ、下の請花は高さ七センチで複弁八葉を刻出している。九輪は各輪形を克明に刻出している。上の請花は高さ七センチで素弁八葉を刻出し、宝珠は高さ一三センチ、径は最大幅一八センチである。

本塔は堀越の万福寺跡に近接した地域にあり、正平銘の宝篋印塔と比較して隅飾の外傾が少ないこと、格狭間等から見て鎌倉時代末期から南北朝初期にかけての造立と推定され、京丸地頭に関連するものではないかと思われる。

図32　万福寺跡の宝篋印塔（正平十二年銘）

3　万福寺跡の宝篋印塔

世羅町大字堀越

堀越の万福寺跡には、応安三年（一三七〇）の七重塔をはじめ、大型の宝篋印塔・板碑・五輪塔などの古石塔が散在している。

宝篋印塔は、谷奥に近い池の端に一基と、池の東の山林内に石積みの土壇を築いた上に一基と、東の山上に一基と、計三基がある。

図三二～三六は、このうち正平年号のある塔で、現高一八〇・五センチ、花崗岩製である。

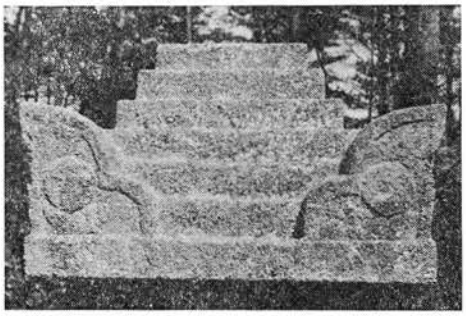

図33　同（笠部）

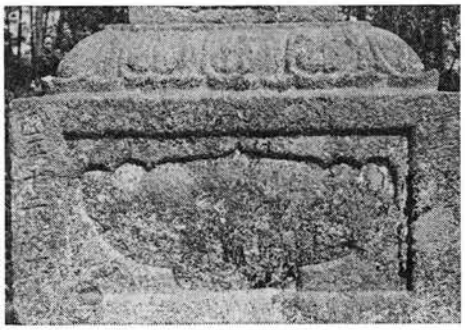

図34　同（基礎部）

図35　万福寺跡の宝篋印塔と二石五輪塔

基壇は下二段が切り石造りで、上段は反花式である。下段の高さ二三・三センチ、一辺一七三センチ、中段は高さ一六・五センチ、一辺一二七センチ、上段は高さ一八・八センチで、上に複弁三葉と弁間に間弁を入れ隅も複弁の反花を刻出しており、その上端は一辺六六センチで、側面は高さ八・五センチ、幅九〇・八センチである。

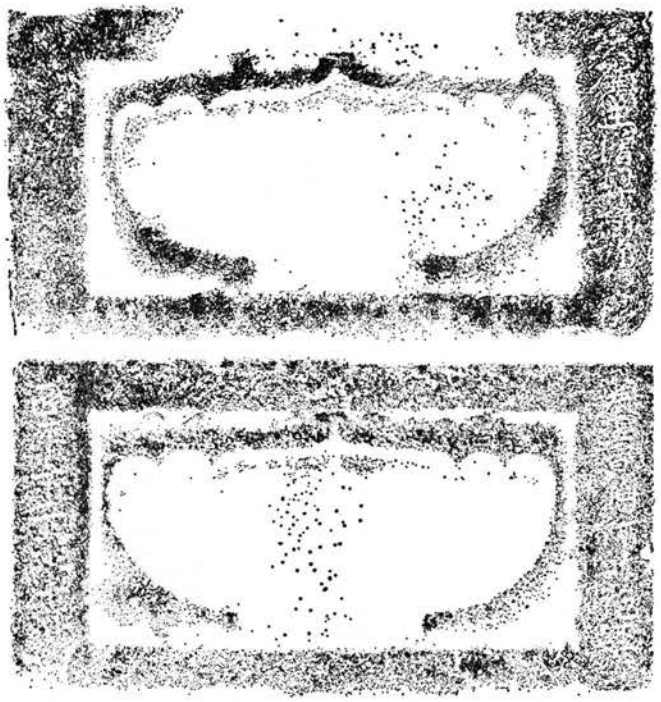

図36　万福寺跡の宝篋印塔（細部拓影）

基礎は高さ四三・二センチ、上に複弁三葉と各弁間に界線を入れ隅も複弁の反花を刻出しており、その上端は一辺三九・七センチである。側面は高さ三一・三センチ、幅は上下端とも六一・三センチで、四面に輪郭を巻き格狭間を入れている。

格狭間は中央の花頭形二三・五センチ、左右各二個の茨を内側か

ら四・五センチ、四・七センチで刻出し、側線がふくらみをもっている。銘文は西面と北面の左右の輪郭内に陰刻される。

（西面）　　（北面）

奉書写阿弥陀経　　□□□□□

正平十二年十一月　　大願主僧契阿弥陀佛

塔身は高さ三一・八センチ、幅は上下端とも三二・四センチで、四面に蓮華座を刻出し、その上に径二二センチの月輪を描き、内に金剛界四仏の種子を薬研彫りしている。蓮華座は高さ九・八センチ、幅二三センチ、中央の大弁の左右に二弁ずつを配し、大弁と隣りの弁に隣接するところに小花を入れている。

笠は高さ四七センチ、段形は下二段上六段の定形式で、各一辺は下端三五・八センチ、上端二四センチ、軒は厚さ五・六センチ、幅五五・八センチである。隅飾りは、高さ一八・二センチ、下端の幅一七・三センチで、二段の輪郭を巻き、軒端より〇・五センチ入ったところから一・六センチ外傾している。輪郭内には蓮華座上に、径八センチの月輪を刻出している。

相輪は欠失していたために、現在別の小型のものをのせている。尚、塔の南北に、南無阿弥陀佛を面いっぱいに陰刻した二石五輪塔が建てられている（図三五参照）。

図三七は池の端にある塔で、切り石造りの基壇の上に、繰り形の基壇を置き、基礎は上二段式で、側面は四面とも輪郭付の格狭間入で、格狭間はかなり張り出している。輪郭の左右に、銘文の痕跡がある。塔身は四面に月輪を刻み、一字金輪の種子ボローンを配している。笠は定形式で、上に六輪より上部を欠失した相輪がのっている。

図37　万福寺跡の宝篋印塔（種子ボローン）

4　普光寺開山の宝篋印塔

世羅町大字井折

井折の普光寺の裏山にある開山塔で、幅三・五メートル、高さ〇

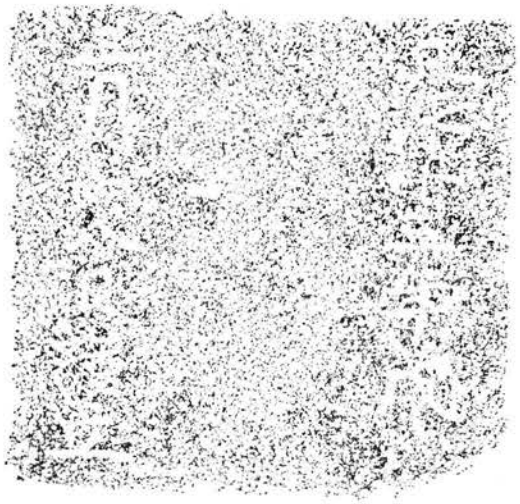

図39　同（塔身部拓影）

図38　普光寺開山の宝篋印塔

・六メートルの方形石積があり、この上に一辺一二五センチ、高さ推定一七センチの長方形の切り石の基壇の一部が残っている。

現高一一二センチで相輪の二輪以上を欠損している。基礎は二段式で高さ三七・五センチ、側面は高さ二三センチ、幅四六・七センチで三面に輪郭付格狭間を設けている。

塔身は高さ二三センチ、幅二四センチで正面の右脇に「開山□明□師」、左脇に「鏡菴和尚之塔」とあり、反対側の塔身右脇に「正平十三年戊戌」、左脇に「三月廿八日□建立」と陰刻されている。梵字は見あたらない。

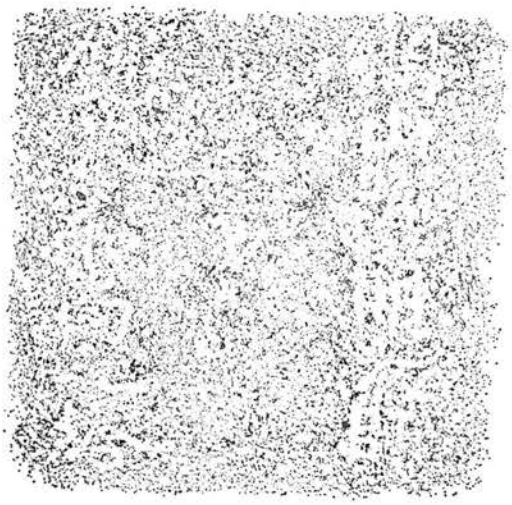

図40　同（同）

笠は高さ三七・五センチ、笠幅四一センチ、笠の厚さ四センチ、隅飾は高さ一四・五センチ、幅一二センチで、二弧で輪郭を刻出している。段形は下二段上六段の定形式である。上端の幅一六・五センチで、中央部に径八・五センチ、深さ七センチの枘穴がある。

相輪は残欠で高さ一九・五センチ、二輪以上を欠損している。伏鉢は高さ六・五センチ、径一五センチ、請花は高さ五・五センチ、径一三・五センチである。

5 普光寺の宝篋印塔群

世羅町大字井折

普光寺は太田平野を一望できる小高い谷奥にある。伝えによると宝徳元年（一四四九）六月、毛利清兵衛義勝が常持仏を以って本尊とし、鏡庵道明を請して開祖として創立、その後回禄に合うなどして盛衰を重ね、現在に至った仏通寺派の禅宗寺院である。

寺の周囲には残欠を含めて十基以上の宝篋印塔が確認され壮観である。これらは境内西脇に一基、裏山に一基、他は寺の西側の墓地にある。寺院墓地には江戸期の無縫塔の外、五輪塔、宝篋印塔、石仏などが並べられているが、いつの時期かに転倒散在していたものを適当に並べなおしたものと思われ、組み合せの正しくないものがある。このうち宝篋印塔六基は完形に近いもので、他はいずれも残

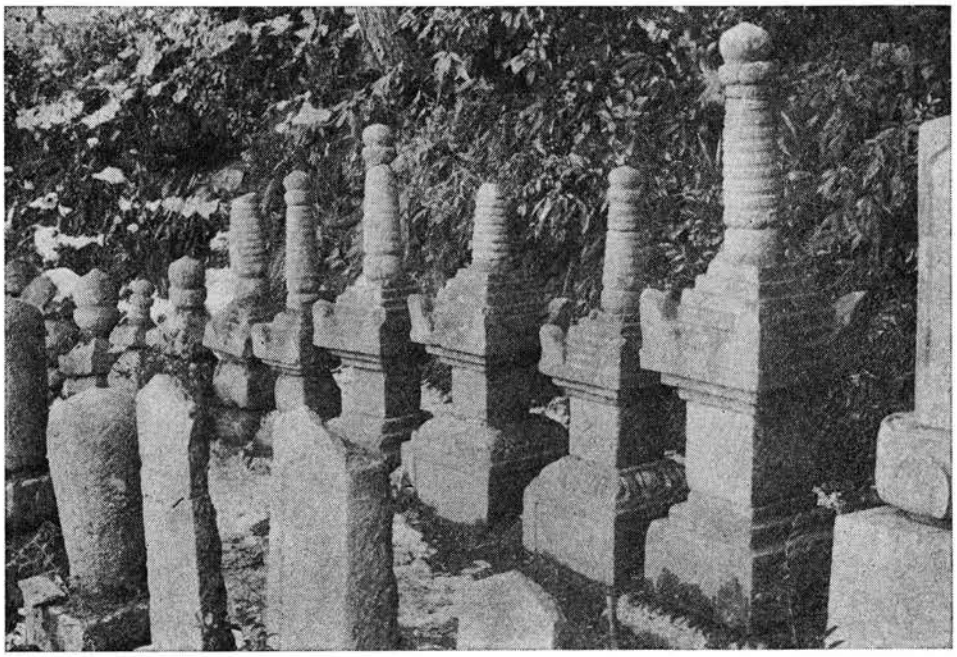

図41 普光寺墓地の宝篋印塔群

欠で五輪塔の地輪などに転用されている。

境内の塔は全高一三四センチの反花のある花崗岩製のもので、基礎の高さ二二・五センチ、幅三七・五センチで四面に格狭間がある。塔身は高さ二二・五センチ、幅二二センチである。笠は上六段下二段の定形式で、笠幅三八センチ、笠中央の厚さ四センチで、隅飾は高さ一二・五センチで二弧を刻出している。相輪は高さ五二センチで各輪をていねいに刻んでいる。

寺院墓地にあるこれらの古石塔は、無縫塔の一部を除いて無銘で、誰の墓か不明である。宝篋印塔は各部の形式から見て室町時代の造立と思われる。

なお在銘の無縫塔は元和四年（一六一八）から現代にかけてのもので、

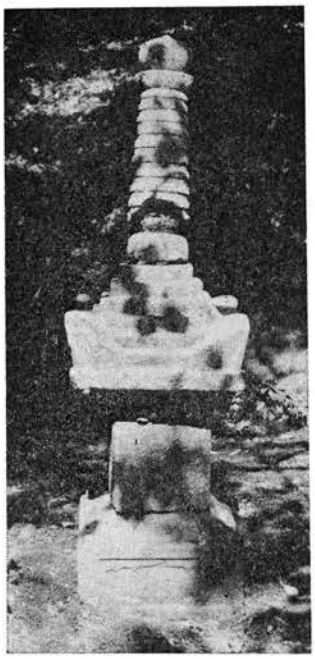

図42　普光寺境内西にある宝篋印塔

①禅宜首座　戊午三月廿二日（元和四年にあたる）
②佛通第一座　天室周光禅師　当寺再興　五月一日
③佛通第一座修善四世圜劦岳加　延宝二甲寅九月五日
④香琳箱禅師　癸丑七月十二日
⑤一山道止　享和三癸亥天四月二十二日
⑥前當山聖仙昌禅師　安政二年乙卯十二月十日
⑦前當山厚道淳禅師　明治二己巳十月二十八日
⑧谷神大和尚　文政五壬午十月廿日
⑨中典愚渓大和尚　昭和二八・六・二四
⑩琢叟鑑西堂　明治二五年三月十八日

などの銘が認められる。

6　明覚寺跡墓地の宝篋印塔

甲山町大字赤屋

赤屋の延木谷の明覚寺跡の墓地に、大型の二基の宝篋印塔が、五輪塔群とともに並立する。二基の宝篋印塔は、虎及び少将の墓との伝承がある。

図四四・四五は、向って右に位置する石塔で、全高二四四センチの花崗岩製である。基壇は、切り石造りの二重基壇の上に、前後二石から成る繰り形の基壇を置いている。下段は切り石を口字状に組

図43 明覚寺跡の宝篋印塔・五輪塔

図45 同（基礎部）

図44 明覚寺跡の宝篋印塔（向って右塔）

み、高さ二〇センチ、一辺一五二センチ、中段は下段と同じく切り石を口字状に組み、高さ一五センチ、一辺一二一・五センチある。上段は高さ二一センチで、下端の一辺は九一・五センチである。

基礎は高さ三九・五センチ、上に複弁一葉を中央部に刻出し、隅も複弁の反花を側面より一・二センチ入り込み、中央部と隅との間にも弁を刻出している。側面から反花の上端までの高さは一〇センチで、側面は高さ二九・五センチ、幅は上下端とも五五・六センチで、三面は各輪郭を巻き格狭間を入れているが、背面は切り放しの素面である。輪郭は深さ一センチで、高さ二〇センチ、幅四一・八センチの中に、上端の花頭形を一九・五センチ、左右の二個の茨を四・三センチ幅で刻出し側線はふっくらと輪郭をとっており、内部の面はややふくらんでいる。

塔身は高さ二七センチ、幅は上下とも二八・六センチで、四面とも素面である。塔身の中央部に、金剛界の種子を四面に陰刻している。

笠は高さ三八センチで、段形は下二段上六段の定形式で、各一辺は下端三三・二センチ、上端二二・五センチ、軒は厚さ五センチ、幅五一・六センチで、隅飾は高さ一六・五センチ、下の幅一五センチで軒端よりわずか入って外傾し、二弧で輪郭を巻いているが、内部はすべて素面である。

相輪は高さ七四・五センチ、伏鉢は高さ一〇・五センチ、径は下端一八・五センチ、下の請花は高さ七センチで単弁八葉を刻出している。九輪は各輪形を克明に造っており、上の請花は高さ七センチで弁八葉を刻出し、宝珠は高さ一二センチ、径は最大一六センチである。

本塔は、堀越万福寺跡の正平十二年塔（図三二～三六）と格狭間その他が似ており、南北朝期の造立と思われる。

図四六、四七、四八は、向って左に位置する石塔で、全高二四三センチの花崗岩製である。基壇は右の塔と同じく切り石造りの二重基壇の上に、二石からなる繰り形の基壇を置いている。

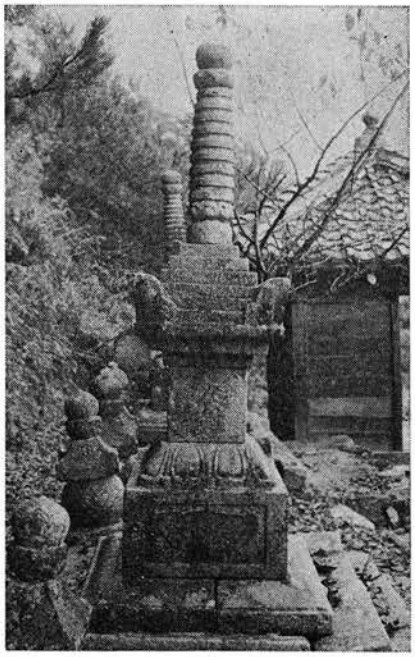

図46　明覚寺跡の宝篋印塔（向って左塔）

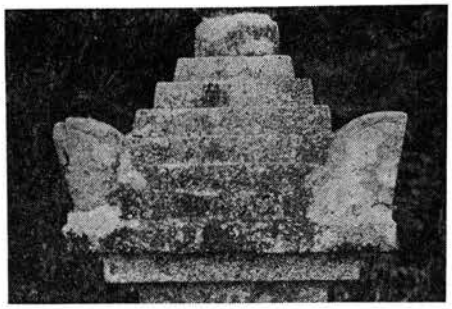

図47　同（笠部）

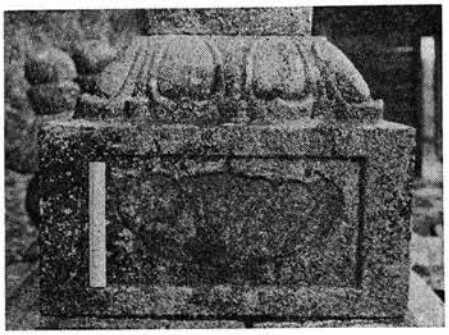

図48　同（基礎部）

基壇は高さ四四センチで、中央に複弁二葉を配し、隅にも複弁を刻出し、各弁と弁との間に界線を刻出している。側面は高さ三〇センチ、幅は上下端とも六〇センチである。格狭間は右の塔と比べて彫りがやや浅く、中央部のふくらみも少ない。上端の花頭形は一六センチと短かく、左右の茨も各五センチとなっている。

塔身は高さ二八センチ、幅二九・五センチで、四面に金剛界の種子を陰刻している。

笠は高さ四五センチで段形は定形式、各一辺は下端三三・四センチ、上端二一・五センチ、軒は厚さ四・八センチ、幅は五四・五センチで、隅飾は高さ一七センチで軒端よりわずかに入ってやや外傾している。相輪部は高さ八〇センチで、上下の請花及び各輪をていねいに刻出している。

本塔は右の塔と比較して、基礎の反花が高いこと、格狭間の形などから、右の塔よりやや時代が下り、南北朝末期から室町初期にかけての造立と思われる。基礎の側面の両脇に刻銘の痕跡が見られるが、文字は判然としない。

7　下津屋十二坊跡の宝篋印塔

甲山町大字伊尾

伊尾の下津屋に仁王像を祭る門があり、門の左右につづく一帯に民家が建ち並んでいるが、これらの民家には「ほんどぼう」「東覚坊」などの坊名が屋号となっており、この辺り一帯を十二坊跡と呼んでいる。

高野山文書によると、「下津屋に地頭氏寺あり」と記載されており、十二坊という遺名は、当時、桑原方の地頭であった橘氏及び、橘氏追放後に入った地頭三善氏の菩提寺があった所と思われる。下津屋一帯の民家の脇や裏山などに、鎌倉時代から室町時代にかけての五輪塔の残欠が多数散在しており、このことを物語っている。

本塔は仁王門の上の山に他の古石塔とともにあり、高さ二二三・五センチで、相輪部の第九輪より上を欠失している外は完存し、荘

図50　同（基礎部）

図49　下津屋十二坊跡の宝篋印塔

内における大型の宝篋印塔として貴重である。

下の基壇には切り石が一段ロノ字状に使われており、高さ二一センチ、一辺一二四センチあり、上の基壇は、前後二石から成る繰り形の基壇を置いている。高さ二二・五センチ、側面は高さ九センチ、一辺九一センチである。

基礎は高さ四〇センチ、上に複弁一葉を中央部に刻出し、隅も複弁の反花を刻出、中央部と隅との間にも反花を刻出している。反花の高さ一一・四センチで、側面は高さ二八・六センチ、幅は上下端とも五七センチある。三面に各輪郭を巻き格狭間を入れているが、背面は切り放しの素面である。格狭間は万福寺跡の正平年号の塔に似ている。

塔身は高さ三五センチ、幅三六センチ、切り放しの素面で四面に種字が見られない。笠は高さ四六センチで、段形は下二段上六段で、各一辺は下端三六センチ、上端二二・六センチである。軒は厚さ六・五センチで、幅は五四センチある。隅飾りはやや外傾しており、二弧で輪郭を巻いている。

相輪は現高五八・七センチであるが、元は七五センチばかりあったと推定される。伏鉢は高さ一〇・五センチ、下の径一八・五センチで、請花は高さ六・五センチで八葉の反花を刻出している。

本塔は明覚寺跡墓地の右側の塔（図四四参照）と似かよった形式をも

図52 同（室町中期）

図51 十二坊跡，小型の宝篋印塔（室町末期）

ち、同時代（正平頃）の建立と思われる。いずれにしても、伊尾地区は太田荘桑原方の中心地として桑原の地名も残されており、本塔は伊尾地区を代表する大型の宝篋印塔であり、桑原方地頭に係る宝篋印塔と推定しても異論はないであろう。尚、塔身上部の枘の脇に、長さ八センチ、幅三・七センチ、深さ三センチの奉籠孔が設けられている。

本塔の脇には、南北朝期の五輪塔（高さ一二〇センチ）、室町中期から後期にかけての小型の宝篋印塔などがある。

8 小吹気の宝篋印塔

世羅町大字青水

青水の小吹気の道路脇の裏山にあり、高さ二〇二センチで花崗岩製である。

基壇は切り石で二段に築かれており、下段は高さ一八センチ、一辺一一〇センチ、上段は高さ一九センチ、一辺七四センチで口の字形に積んである。基礎は高さ三二センチで上に複弁一葉を中央部に刻出し、隅も複弁一葉を刻出し、複弁と複弁の間に小花を刻んでいる。上端は一辺二三・五センチ、側面は高さ二一・五センチ、幅四三センチで、四面格狭間入りである。

塔身は高さ二一センチ、幅二三・五センチで、四方に大きく金剛

界の種子を陰刻している。笠は高さ三四センチ、段形は下二段上六段の定形式で、各一辺は下端二五・五センチ、上端一六・七センチ、軒は厚さ四・二センチ、幅は四〇・三センチである。

相輪は高さ五三センチで、伏鉢は高さ七・五センチ、径一六・七センチ、下の請花は高さ六センチ、径一六・五センチで、九輪は各輪をきちんと刻出している。上の請花は高さ一三センチ、径一三センチで、宝珠は欠失している。造立の時期は南北朝期の後半頃と思われる。なお同所には石仏一および室町初期頃の五輪塔が数基斜面に集められている。

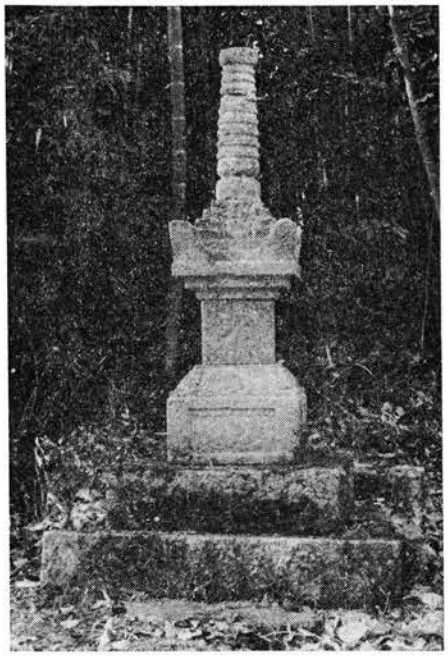

図53　小吹気の宝篋印塔

9　砂田山近奥の宝篋印塔

甲山町大字宇津戸

宇津戸の山近奥の内海家の田の脇の自然石の上に置かれているが、元は近くの山林中にあったものだと言われている。

相輪の一部を欠くが、現高九三センチの花崗岩製で、基礎は反花式で高さ二五センチ、幅三九・五センチで、三方に格狭間がある。

塔身は高さ一九・五センチ、幅二一センチで、四方に金剛界四仏の種子を陰刻している。

笠は高さ二八・五センチ、幅三八センチで、下二段上六段の定形式である。隅飾は高さ一一センチ、下端の幅一〇センチで、二弧を

図54　砂田，山近奥の宝篋印塔

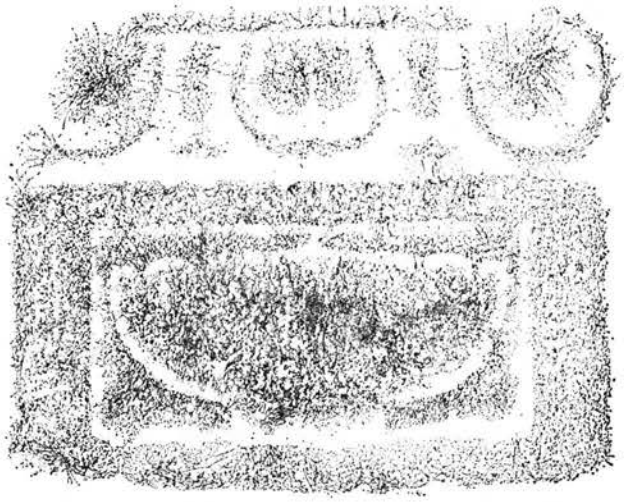

図55 同（基礎部拓影）

輪郭で刻出している。

基礎の正面、格狭間の両側に年月日が陰刻してあるが、風化により年号銘はよく読めない。強いて読めば、「康暦元年十月廿二日」と読めるかも知れない。形式からみて造立は、南北朝初期頃のものと思われる。

10 北之坊の宝篋印塔

御調町大字下山田

本塔は、もと宇津戸の京蔵山の中世墓地にあったものを、二〇年前ぐらいに現在地に移したものである。現在は北之坊の脇の無縁墓に他の宝篋印塔などとともに並べられている。

相輪及び塔身を欠失しているが、格狭間も古く、基礎の上端に縦四センチ、横一三センチ、深さ四センチの長方形の奉籠孔を設けてあるもので、太田荘近辺では珍しいものである。

造立は鎌倉時代末期から、南北朝初期にかけてのものと思われる。

図56 北之坊の宝篋印塔（御調町下山田）

11　金剛丸の宝篋印塔

甲山町大字西上原

西上原の金剛丸谷、岡の曽根と呼ぶ墓地に花崗岩製の宝篋印塔一基と五輪塔の残欠(地輪三、水輪四、空風輪一)、石仏三体がある。

宝篋印塔は塔身を欠失し、現在結晶石灰岩製の宝篋印塔の基礎が置かれている。基壇は高さ一八センチ、幅五四センチの方形の一枚石でできている。

基礎は二段式で高さ二六センチ、幅三六・五センチで、三方に格狭間がある。笠は高さ二五センチ、下二段上六段の定形式で隅飾は二弧の輪郭付でやや外傾している。

相輪は折損部分をセメントで補強してある。格狭間の上の花頭形は長く開き、左右各二個の茨は端に寄せて造り、側線はふっくらとしていることから南北朝期の造立と思われる。

図59　金剛丸の宝篋印塔

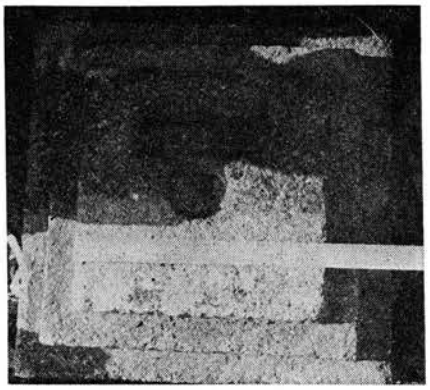

図57　同（基礎部上面）

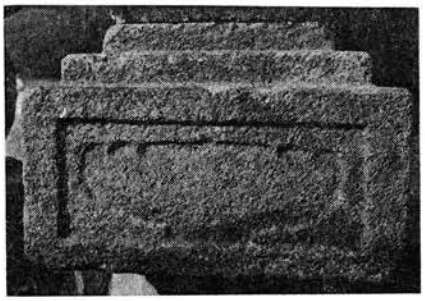

図58　同（基礎部正面）

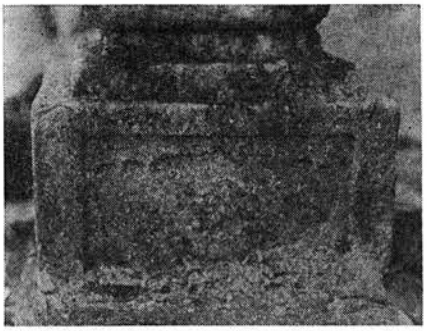

図60　同（基礎部）

図61 同所の石仏

傍にある石仏三体は四〇センチばかりの小型のもので室町時代のものと思われる。「金剛丸」の名は、高野山文書の「上原村公文供給米徴符」（建保六年三月十一日付『広島県史』所収）に記載されており、これらの古石塔は当時の名主級の造塔を推定するのに参考になる。

図62 金剛丸の向い側にある石塔

なお、同墓地の下には屋号「金剛丸」の屋敷跡もあり、屋敷の向いの台地上には結晶石灰岩製の宝篋印塔の笠二基が、五輪塔の残欠と共にある。時代は室町後期から末期にかけてのものである。

12　安田かなん堂脇の宝篋印塔

世羅町大字安田

安田の有光商店の横を少し入った丘の上に観音堂があり、土地の人はかなん堂と呼んでいる。本塔は径三メートル、高さ一・五メートルの盛土の上に立っている。現高一三二センチの花崗岩製である。

もとは基壇があったらしく、塔の脇に長さ八二・五センチ、高さ一六センチの切り石が残っている。この上に繰り形の基壇（高さ一四・五センチ、幅五八センチ）がある。

基礎は高さ二九センチ、幅三九・五センチで、上部に反花を刻出

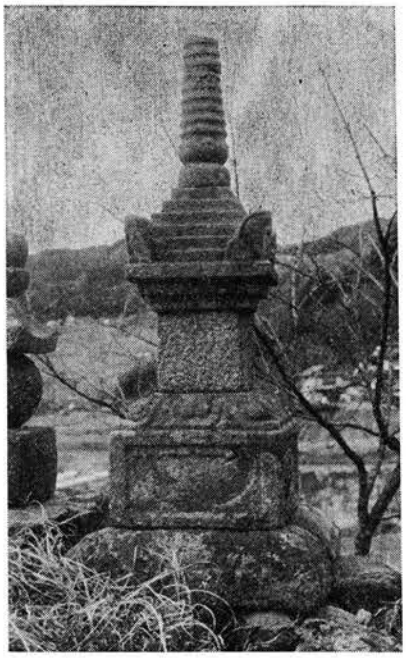

図63　安田かなん堂脇の宝篋印塔

している。側面の高さ二一・五センチで、三面に格狭間を設けている。反花は中央及び隅に複弁を刻出、複弁と複弁の間に弁花を刻出している。

塔身は高さ一九センチ、幅二〇センチで種子等は見られない。

笠は下二段上六段の定型のもので、高さ二九・五センチ、笠幅三三センチ、笠中央部の厚さ三・三センチである。隅飾は高さ一一センチ、下端の幅一〇センチで、二弧を輪郭で刻出している。下端の幅二三・五センチ、上端の幅一四センチである。

相輪は現高四〇センチで第九輪以上を欠失している。伏鉢は高さ六センチ、径一二センチ、請花は高さ五・五センチ、径一一・五センチある。

笠と基礎を比べてみると、基礎にくらべて、笠や塔身が小さく、別のものを合わせたようである。

造立の時代は、基礎が南北朝の初め頃のものと思われ、塔身から上は室町時代のものと思われる。

13　高山の宝篋印塔

甲奴町大字宇賀

高山の多聞天堂脇に径一〇メートル、高さ一・五メートルの盛土があり、この上に花崗岩製の宝篋印塔と結晶石灰岩製の宝篋印塔が

図64 高山の宝篋印塔

一基ずつ建っている。また少し離れてもう一箇所盛土状の土壇があり、この上に花崗岩製の五輪塔が六基、他に石灰岩製の五輪塔残欠が数基ある。

花崗岩製のものは高さ一三六センチで、相輪の中間部を欠損している。基壇は切り石の長石で築かれ、幅一一五センチ、高さ一七センチであるが、現在一部がくずれている。

図65 同（花崗岩製）

基礎は高さ二八センチ、幅三八・五センチ、上端二六センチの二段式で三方に格狭間がある。塔身は高さ二二センチ、幅二二・七センチで僅か横に長い。四方に金剛界四仏が種子で陰刻されている。

笠は高さ三一・五センチ、笠幅三六センチ、笠の厚さ四・五センチ下二段上六段の定形式である。隅飾は高さ一三センチ、下端の幅一一センチで、縁は二弧とし輪郭付である。

相輪は五輪以上を欠失するが、上の請花及び宝珠は残っている。伏鉢は高さ七センチ、径一三・五センチ、下の請花は高さ四センチ、径一三センチで各輪はていねいに刻出している。上の請花は高さ五・三センチ、径一二・五センチで、弁を刻出している。尚、下

の請花は複弁を刻出している。宝珠は高さ七・五センチ、径一一センチである。

本塔は宇賀地区で最も整ったものである。造立の時代は格狭間の上端の花頭形がやや狭く、梵字や隅飾等から判断して室町時代の初期から中期頃にかけてのものと思われる。

次に石灰岩製の宝篋印塔は現高八六センチで、相輪部を欠失している。基壇は同質の繰り型のもので高さ一四センチ、幅四四センチ上端の幅三四センチである。基礎は二段式で高さ二七センチ、幅二八・五センチ、側面は高さ二〇センチで四面は切り放しの素面である。

塔身は高さ二〇センチ、幅一七・八センチとやや縦長で、四面に金剛界四仏の種子を陰刻している。笠は上端部がかなり風化しているが高さ二五センチ、下二段上四段と段数が少なく、甲山町大字青近の行者が原塔と段数は同じである。

造立の時代は、隅飾りの外傾が大きい点から室町中〜末期の造立と思われる。

図66　同（石灰岩製）

14　神岡山の宝篋印塔

世羅町大字重永

重永の神岡山の径二〇メートルの古墳時代の円墳上にあったもので、現在は数十メートル下方の山林中に移転してある。現高一三八五センチの花崗岩製で、塔身及び相輪の第九輪より上部を欠失している。

図67　神岡山の宝篋印塔

基礎は反花式で、高さ四二センチ、側面の高さ三一センチ、幅六一センチで四方に格狭間がある。各面の中央部に複弁の反花を三個並べて刻出し、隅にも複弁を刻出しており、隅の反花の両端には小花を刻出している。

笠は下二段上六段の定形式で、高さ四三センチ、笠幅五七・三センチ、笠中央部の厚さ六・二センチである。下端の幅三五センチ、上端の幅は二三センチある。隅飾は高さ一八・五センチ、下端の幅一七センチで、二弧で輪郭を刻出しており、各面に五弁からなる蓮華座の上に径七・五センチの月輪を設けている。

相輪は現高五三・五センチで、伏鉢の高さ九・五センチ、径一八センチ、下の請花の高さ六センチ、径九センチである（枘は欠失している）。

本塔は、重永小太郎（弓引雅楽郎法師）の墓との伝承がある。造立は各部の形式から見て、南北朝末から室町初期にかけてのものと思われる。

尚、重永の慈徳院墓地には、本塔の基壇の半分と思われる、上部に複弁の反花を刻出した、一辺の長さが上部で六四・二センチ、下部で七五・五センチ、高さ一五センチの基壇があり、また付近の民家の庭先にも基壇の残り部分の四分の一が残存している。

また慈徳院境内の地蔵菩薩の台石には、高さ三一・五センチ、幅三一・六センチの、四面に蓮華座と月輪を刻出してある宝篋印塔の塔身が使われている。この塔身の上部には径九センチの枘があり、神岡山塔の枘穴の径と同じ大きさである。また下部には径八センチ深さ九センチの奉籠孔がある。

神岡山塔が、この付近の最大級の宝篋印塔でありながら、塔身や基壇を欠いていること、慈徳院に残るものと大きさ、特徴が似ていることから考えて、この塔はもと慈徳院にあったものを後世、神岡山に移転したのではないかと考えられる。

15 川尻の薬師堂境内の宝篋印塔

甲山町大字川尻

川尻の薬師堂の境内にあり、小型ではあるが完存している。

幅五六・五センチの切り石の基壇があり、基礎は反花式で三方に格狭間がある。塔身は高さ一六・五センチ、幅一七・六センチで四方に金剛界四仏を種子で陰刻している。

笠は下二段上六段の定形式で、笠幅は三一センチである。相輪は四八センチで、下の請花は複弁八葉、上の請花は単弁八葉を刻出している。

川尻の地区は地頭湯谷氏が明徳の頃支配していたらしく（甲山町伊尾門藤幹夫氏所蔵文書）、薬師堂も元は湯谷氏の菩提寺であったものと思われ、境内

の他の五輪塔残欠とともに湯谷氏の造塔と考えられるものである。

16　今高野山福智院裏庭の宝篋印塔

甲山町大字甲山

福智院の裏庭の片隅にあり、現在手水鉢に転用されているもので高さ四三センチ、幅五三センチあり、荘内では大型に属するものである。石質は花崗岩製で上部に複弁の反花を刻出したもので、四方の側面に図六九のような格狭間が刻出されている。なお、基礎の四角がけずりとられているが、これは後世になって手水鉢に加工した折にけずったものと思われる。また、福智院の向いの安楽院の境内にも五輪塔の地輪を加工して手水鉢に転用したものが見受けられる。

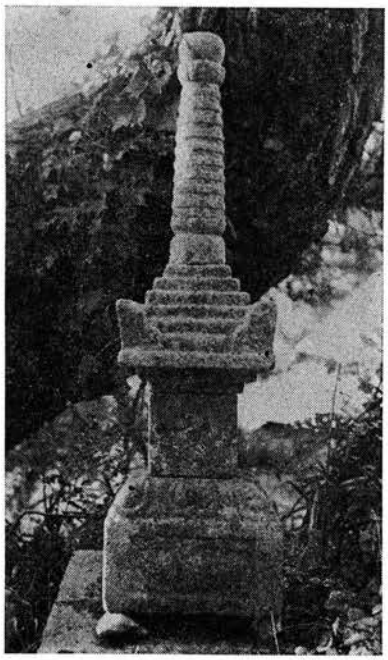

図68　川尻，薬師堂の宝篋印塔

本塔は石質良好で風化が進んでいない。造立の時代は室町時代に入るものと思われる。

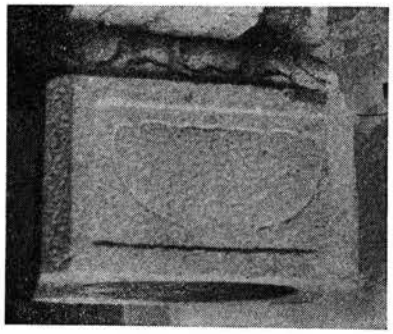

図69　福智院裏庭の宝篋印塔基礎

17　東上原、大原家上の石塔残欠

甲山町大字東上原

東上原上谷の大原家の墓地脇に、図七〇～七二のような古石塔の残欠にまじって高さ八二センチの大型の相輪がある。この相輪は赤屋明覚寺跡墓地の塔（図四三～四八）級の宝篋印塔がこの地に造立されていたことをうかがわせている。

なお、傍には五輪塔の残欠も多数あり、南北朝期の形式を有して

図71 同

図70 東上原，大原家上の石塔残欠

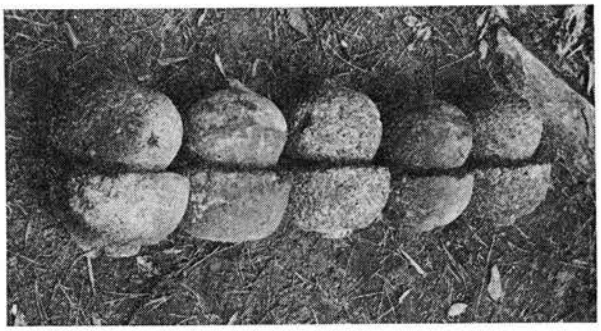

図72 同

いる。側に正宗家の墓地があり、正宗名に係る石塔かも知れない。

18 白雲寺跡の宝篋印塔

世羅西町大字山中福田

山中福田の重森誓三家裏山にあるもので、白雲寺の跡といわれている。全高一二〇センチの花崗岩製で石質も良好で風化が少ない。基礎は二段式で高さ二七センチ、幅三七・五センチ、側面は高さ

一九・五センチで三方に格狭間がある。

塔身は高さ一九センチ、幅二〇・三センチで四面に金剛界四仏を種子で陰刻している。

笠は下二段上六段の定形式で高さ二六センチ、笠幅二三センチ、下端の幅二二センチ、上端の幅一四・五センチである。隅飾は高さ一一センチ、下部の幅一〇・五センチ、二弧で隅飾を巻いている。

相輪は高さ四七センチ、伏鉢は高さ三センチ、径一四・五センチと高さが低い。下の請花は高さ四・五センチ、径一四センチ、上の請花は高さ五センチ、径一二・五センチ、宝珠は高さ八・五センチ、径一一センチある。形式から見て室町初期の造立と思われる。

尚、脇には花崗岩製の五輪塔が八基ばかりあり、石質も良好である。いずれも南北朝から室町時代中期にかけての造立と思われる。

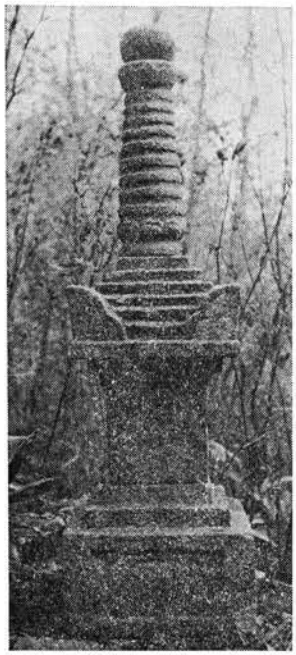

図73　白雲寺跡の宝篋印塔

図74　白雲寺跡の五輪塔

19 歓喜寺跡の宝篋印塔

世羅西町大字黒川

黒川の中山、歓喜寺跡と伝える山林の一画に、図七五のような宝篋印塔や五輪塔・石仏などが数箇所に散在している。

中央部の宝篋印塔は、相輪部の一部を欠失している外は完存している。基壇からの高さは一三八センチである。

基壇は高さ一六センチ、幅五六・七センチで繰り形式のものである。基礎は高さ二六センチ、幅三八・五センチで、上部中央部及び隅部に複弁の反花を刻出している。側面の高さ一八・七センチで三方に格狭間を刻出している。

塔身は高さ一八・五センチ、幅二〇センチで、各面に金剛界四仏を種子で陰刻している。笠は高さ二七・五センチ、笠幅三五センチ、下二段上六段の定形式で下端の幅三二センチ、上端の幅二三センチ、中央部の厚さ三・五センチである。隅飾は高さ一〇センチ、下端の幅九センチで二弧で輪郭を巻いている。

相輪部は第八輪より上部を欠失しているが、各輪をていねいに刻出している。造立の時期は格狭間等から見て南北朝期から室町初期にかけてのものと思われる。

他の小型の宝篋印塔は、笠部の段数が下二段上五段となったもの二基、下二段上六段の定形式のもの一基である。尚、同所から数十メートル下方にも下二段上五段のものが二基ある。これら小型の宝篋印塔は、室町時代の造立と思われる。

図75 歓喜寺跡の宝篋印塔ほか

20　潮音寺の伝赤川氏墓地の宝篋印塔

世羅西町大字小国

小国の潮音寺近くの山林中に、伝赤川氏の墓と伝える古石塔群がある。室町初期から末期にかけての五輪塔が二〇基ばかりあり、これらに混って四基の宝篋印塔残欠がある。

図七七の塔は、現高九七センチの花崗岩製で、相輪の一部を欠損している他は完存している。傍に基壇の一部と思われる長さ五二・五センチ、高さ一七センチの長石がある。

基礎は反花式で高さ二一・五センチ、各面の上端の中央部に複弁の反花を二個並べて刻出している。側面は高さ一六・五センチで三方に格狭間がある。

塔身は高さ一八・三センチ、幅一九センチで四方に金剛界四仏を種子で小さく浅く刻出している。

笠は高さ二四・五センチ、笠幅三〇・七センチ、中央部の厚さ三センチ、下二段上六段の定形式である。隅飾は高さ一〇センチ、幅九・三センチで、二弧を輪郭で巻いている。相輪部は宝珠及び請花の一部を欠損する他は遺存している。造立の時代は室町中期頃と思われる。

図七八の石塔は相輪の第二輪以上を欠失している他は完存している。現高八五センチの花崗岩製で、基壇はない。

基礎は反花式のもので各面の中央部及び端に複弁の反花を刻出しており、三方に格狭間を設けている。

塔身は高さ一八・七センチ、幅一八・五センチとほぼ方形で、四

図76　潮音寺の伝赤川氏墓地の宝篋印塔

図77 潮音寺の宝篋印塔 (1)

図78 同 (2)

面に金剛界四仏を種子で大きく深く薬研彫りしている。

笠は下二段上六段の定形式で高さ二四・七センチ、笠幅二八・七センチ、中央部の厚さ三センチ、下端の幅一八・五センチ、隅飾は高さ九・五センチ、幅七・七センチである。

図79 同 (3)

図80 同 (4)

伏鉢は高さ五・七センチ、径一〇・五センチ、請花は高さ四センチ、径一〇センチである。格狭間の花頭形が水平に開き、茨を端寄りに造っている点や梵字等から、造立は南北朝期から室町初期にかけてと思われ、本墓地内では最も古い形式を有する。

図七九は向って右から三番目の宝篋印塔の残欠で、基礎だけ残っている。高さ三二センチ、幅三六・五センチの二段式で、側面は高さ二五・七センチで四面に格狭間を設けている。

図八〇の宝篋印塔は本墓地で最も大きいものであるが、塔身を欠失しているのが惜まれる。現高一二〇センチの花崗岩製で石質も良好である。

基礎は反花式のもので高さ三一・五センチ、幅四一・五センチ、上端の中央部に複弁の反花を二個並べ、各端にも反花を刻出している。

笠は下二段上六段の定形式で高さ三〇センチ、笠幅三七・五センチ、中央部の厚さ三・四センチ、下端の幅二三・六センチ、上端の幅一五センチである。隅飾は高さ一三・五センチ、幅一〇・七センチで二弧を輪郭で刻出している。

21　観音寺跡の宝篋印塔

世羅町大字津口

津口の小高い丘にある観音寺跡、多治美家の墓地の中に二基の宝篋印塔が、八基ばかりの五輪塔とともにある。

右の塔は基壇からの高さ一三一センチの小型の花崗岩製のもので完存している。基壇は高さ一三センチ、幅五〇センチの一枚石でで

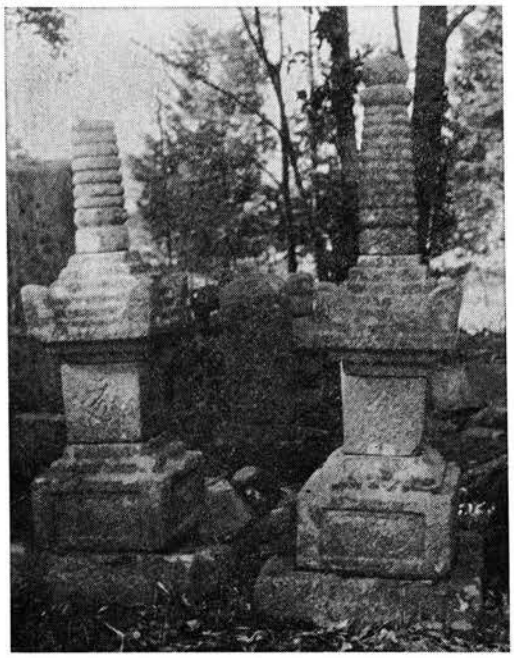

図81　観音寺跡の宝篋印塔

図82　同（右塔）

きており四面切り放しの素面である。

基礎は高さ二五センチで、中央部及び隅に複弁の反花を刻出し、各弁と弁との間に間弁を刻出している。側面は高さ一七センチ、幅一一センチで三方に格狭間を設けている。塔身は高さ一八センチ、幅一八・五センチで、四方に金剛界四仏の種子を陰刻している。

笠は高さ二七・五センチ、下二段上六段の定形である。笠幅三二センチ、中央部の厚さ三センチで、下端の幅二〇センチ、上端の幅一五・五センチである。隅飾は高さ一一センチ、下端の幅一〇センチで輪郭を巻いているが内部はすべて素面である。

相輪は高さ四六センチ、伏鉢は高さ六センチ、径一三・五センチ、下の請花は高さ四センチ、径一三センチで、その上部に九輪を刻出する。上の請花は高さ五センチ、径一二・五センチ、宝珠は高さ八センチ、径一〇・五センチある。造立の時代は室町時代初期と思われる。

左の塔は相輪の第七輪以上を欠失している他は当初の形を残している。現高は基壇からの高さ一一八センチの花崗岩製である。

基壇は高さ一五センチ、幅五三センチ、基礎は高さ二四センチ、幅三三・八センチで二段式三方格狭間である。

塔身は高さ一九センチ、幅二〇センチで四方に金剛界四仏の種子を陰刻している。

笠は高さ二五・三センチ、下二段上六段の定形式である。笠幅三一・五センチ、厚さ三センチ、上端の幅一四センチ、下端の幅二一センチである。隅飾は高さ一〇・五センチ、下端の幅八センチで二弧で輪郭を巻いている。

相輪部は伏鉢の高さ六センチ、下の請花の高さ五センチで、七輪以上を欠失している。

右の塔とほぼ同時代に造立されたと思われるが、同じ所に小型で同時代の基礎の二段式と反花式のものがあるのは珍らしい。なお、この墓地にある五輪塔は室町中期から末期にかけてのものである。

22 長田篠村の宝篋印塔

世羅西町大字長田

長田の篠村谷の山林中に、長径一〇メートル、高さ二メートルばかりの古墳があり、その上に本塔がある。

全高一一九センチの花崗岩製で、相輪の途中が折れている他は完存している。基壇はなく、基礎は二段式で高さ二四センチ、幅三七センチで、側面の高さ一六・五センチ、三方に格狭間が設けられている。

塔身は高さ一七センチ、幅一八センチで四方に胎蔵界四仏の種子を陰刻しているが、小さくて浅い彫りである。

笠は下二段上六段の定形式で、笠幅三一・三センチ、下端の幅二〇・七センチ、上端の幅一三・八センチ、隅飾の高さ一〇・五センチ、幅一〇センチで二弧の輪郭を巻いているが内部は素面である。

相輪部は伏鉢の高さ六・五センチ、径一二センチ、下の請花の高さ四センチ、径一二センチで二重の弁花をめぐらしている。上の請花は高さ四センチ、径一一センチで単弁を刻出している。宝珠は高さ六・五センチ、径九・五センチ、九輪部はていねいに刻出している。

造立の時代は格狭間から見て、室町時代初期から中期にかけてと思われる。

本塔から数十メートル離れた位置に山の神と呼ばれる小祠が四基並立している。古石塔の下方の谷間に本篠村と称する家があって、昔から毎年大晦日の夜、火縄火を携えてこの石塔に参拝する風習が

図83　長田篠村の宝篋印塔

続いており、その家は姓を篠原といい神主の家である。

本塔はこの谷の開拓者の墓と推定され、今日まで祖先の墓として祀られていることは珍しい。

23　善法寺の宝篋印塔

世羅町大字賀茂

賀茂の善法寺は現在無住で荒れ果てているが、往古は相当栄えた寺院と思われ、本尊は木造薬師如来の残欠（現高七〇センチ）で、他に木造阿弥陀如来坐像（像高六四センチ、寄木造り、藤原時代の作）があり、いずれも県重文に指定されている。

古石塔は、本堂前に宝篋印塔の残欠五基分（笠幅三〇センチ、三四センチなど）あり、他に五輪塔や石仏がある。また境内はずれに

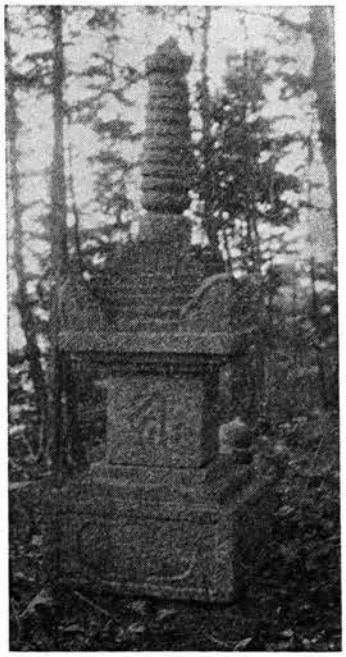

図84　善法寺の宝篋印塔

は古墳状の盛土の上に結晶石灰岩製の宝篋印塔が一基造立されている。

境内から約百メートルばかり下った参道脇にも、多数の古石塔がある。この中には、大型の五輪塔や宝篋印塔の残欠・石仏・一石五輪塔などがある。

図八四の塔は、参道より少し上部の山腹にあるもので、宝珠の一部を欠損する他は完存しており、大型の宝篋印塔として貴重である。全高二〇〇センチの花崗岩製で、基壇は前後二石から成る繰り形のもので一辺八九センチ、高さ一六センチ、側面の高さは八・五センチである。

基礎は高さ四〇センチ、幅五二・八センチの二段式で、三面に格狭間がある。塔身は高さ三二センチ、幅三二・五センチで、各面の中央部に金剛界四仏を種子で大きく薬研彫りしている。

笠は下二段上八段で、上八段と段数の多いのは珍らしい。下端の幅四〇・五センチ、上端の幅二二センチ、笠幅五七センチ、軒中央部の厚さ六センチである。隅飾は高さ一八・五センチ、下端の幅一五・七センチで、二弧の輪郭がある。

相輪は高さ七〇センチ、伏鉢は高さ一〇センチ、幅一八センチ、下の請花は高さ五センチ、幅一八センチ、各輪はていねいに刻出している。上の請花は高さ七センチ、幅一七センチ、宝珠は一部を欠損している。

造立の時代は格狭間の左右の茨が目立って大きく、中央の花頭形が極めて狭いこと、隅飾りの傾斜が大きいことなどから室町時代の中期頃と思われる。尚、造立の主は、中世この地を支配した山内氏関係のものと推定される。

24 播磨の宝篋印塔

甲山町大字別迫

別迫播磨の福仙寺跡に径五メートルばかりの盛土があり、上部に

図85 福仙寺跡の宝篋印塔

川原石を敷いて本塔（図八五）がある。基壇からの高さ一四二センチの花崗岩製である。

基壇は切り石の長石を口の字形に二段に組んでおり、下段は高さ一七センチ、一辺九七センチ、上段は高さ一三センチ、一辺六五・五センチである。

基礎は二段式で高さ二九センチ、上端の幅二五センチ、側面は高さ二二センチ、幅四〇センチ、長方形の輪郭は高さ一五・七センチ、幅二四・五センチ、深さは〇・六センチである。格狭間は中央の花頭形が五センチと極めて短かく、両端の茨は二・五センチで外側の茨は大きく弧を描いて円形に降りており、脚間は高さ二・五センチ、下端の幅六センチである。

笠は高さ二二・六センチ、幅二七・六センチ、隅飾は高さ一二・六センチ、段形は定形式である。

図86　赤羽根の宝篋印塔

塔身は高さ一九センチ、幅二〇センチ、切り放し素面の四面に金剛界の四仏を種子であらわしている。

相輪部は六輪より上部を欠失しており、伏鉢の高さ七・二センチ、径一一・五センチ、請花は高さ三・五センチで、各輪はていねいに刻出してある。

本塔は、『高野山文書』に出てくる「播广二木」の播磨地区の中心に近いところにあり、また付近に古石塔も多数あることから、この辺りの有力な名主の造塔になるものと思われる（一二八頁参照）。

図八六は福仙寺跡から約五〇〇メートルばかり下方の赤羽根道脇の山の斜面にあるもので、川原石で築いた土壇の上に、高さ一四センチ、幅推定五六センチの切り石でつくった基壇の上に相輪の一部を欠く本塔（現高一〇〇センチ）がある。笠幅三二・五センチ、基礎に三方格狭間があり、塔身等に種子・銘文は見られない。時代は室町初期の造立と思われる。

25　万年寺跡の宝篋印塔

甲山町大字川尻

川尻久恵の三川ダムの小島にある県重文指定の一基で、高さ一二九センチの花崗岩製である。

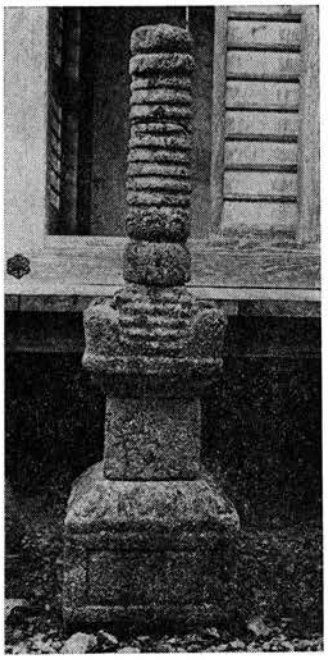

図87 万年寺跡の宝篋印塔

基礎は各面の中央部に複弁の反花があるもので、高さ二九センチ、幅三七・三センチ、三方に格狭間がある。

塔身は高さ一八センチ、幅二〇・七センチで上下に径七・五センチの枘がある。塔身の四面に大きな文字で四文字ずつ次の陰刻がある。

天文十六　九月五日　春岳(カ)宗榮　和智光信

笠は高さ二五センチ、笠幅三〇・五センチ、軒の厚さ三・七センチ、下二段上六段の定形式で、下端の幅二二センチ、上端の幅一四センチである。

相輪部は高さ五七センチ、伏鉢の高さ八・五センチ、幅一五センチ、下の請花は高さ七・五センチ、幅一五センチ、各輪は一輪ずつ刻出している。上の請花は高さ四センチ、幅一四センチ、宝珠は高さ六・五センチ、幅一四センチである。

明徳四年（一三九三）の山名藤公山堺の文書によると、「河尻の

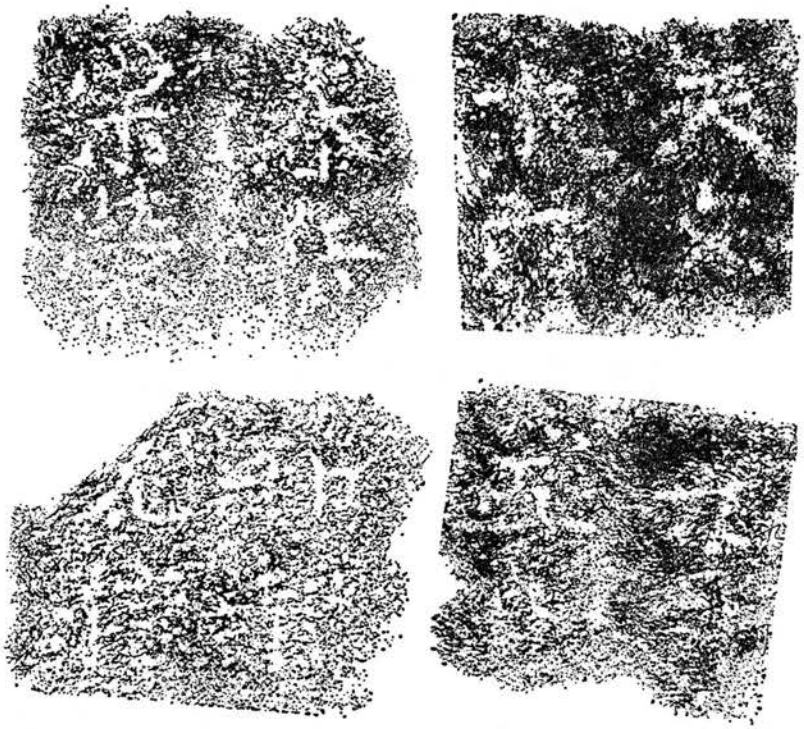

図88 同（塔身部拓影）

地頭湯谷……」（前出、門藤文書『太田庄研究――一九六一年度太田庄実地踏査記録――』早大歴研日本中世史部会編・刊、所収）と記されており、当時湯谷氏（和智）の勢力が川尻の地に及んでいたことがうかがえ、本塔は和智氏に関係する墓塔として貴重である。

26　徳万墓地の宝篋印塔残欠

甲山町大字東上原

東上原上谷に徳万屋敷跡という広い屋敷地がある。石垣は城郭を思わせるように堂々たるものである。屋敷の奥の方へかけて段々畑の跡が残っており、近くの山林中に徳万の墓地がある。

江戸時代の墓石とまじって花崗岩製の宝篋印塔の笠や五輪塔の残欠（地輪四・水輪四・火輪六・空風輪四）及び石灰岩製の五輪塔の残欠（地輪三・水輪四・空風輪四）、その他一石五輪塔が一基ある。

宝篋印塔の笠の高さ二三・五センチ、軒幅二八・五センチ、軒中央部の厚さ四・五センチ、隅飾は高さ一〇センチ、下端の幅九・五センチで二弧を刻出し、ほぼ直立している。段の形式は下一段上六段となっており、下一段のものは現在のところ荘内では本塔だけである。下端の幅二一センチで、中央部に径六センチ、深さ二・五センチの枘穴がある。

「徳万」は、建保六年（一二一九）の「上原村公文代供給米徴符」に「得万　二斗四升」と記録されており、本石塔群は得万名に関係のあるものと思われる。造立の時代は、南北朝期から室町時代にかけてのものと推定される。

図89　東上原，徳万墓地の石塔

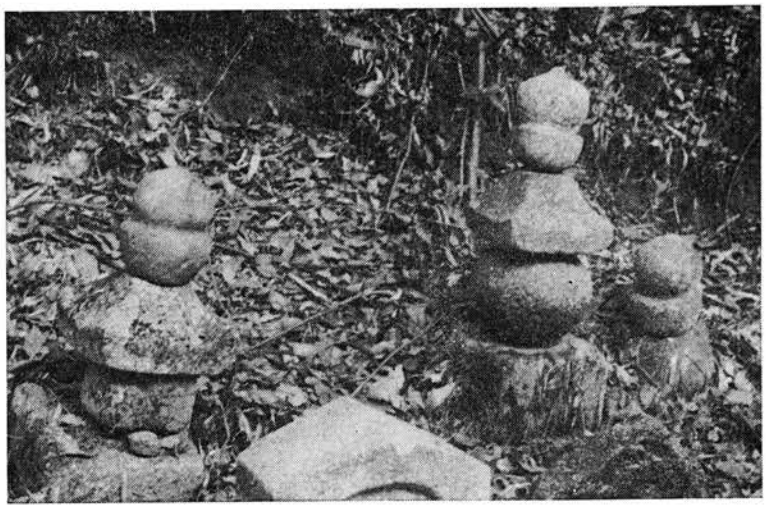

図90 東上原，徳万墓地の石塔

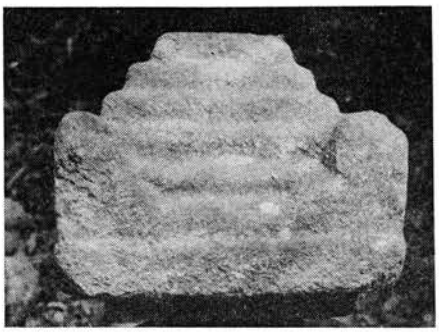

図91 同

27 大坪の宝篋印塔

世羅西町大字小国

小国の大坪の某家墓地脇の、二基の五輪塔の中央に塔身を欠失した宝篋印塔が一基ある。現高一三四センチの花崗岩製である。

基礎は二段式で高さ二九・五センチ、幅四五・七センチ、側面の高さ二〇・五センチで四面に格狭間を刻出している。上端の幅二八・五センチ、二段の高さはそれぞれ四センチある。

笠は下二段上六段の定形式で、高さ三六センチ、笠幅四二センチ、笠中央部の厚さ四・七センチ、下端の幅二七・七センチ、上端

の幅一五・五センチある。隅飾は高さ一五センチ、下端の幅一二センチで、二弧を輪郭で刻出している。

相輪は上の請花の下あたりを折損しているが、その他はよく残っており、高さ六二・五センチ、伏鉢は高さ八センチ、径一四・五センチ、下の請花の高さ五センチ、径一四センチある。上の請花は単弁で高さ五・五センチ、径一三・五センチ、宝珠は高さ九・五センチ、径一二センチある。

図92　大坪の宝篋印塔・五輪塔

本塔は小国の潮音寺の伝赤川氏の塔（図七六～八〇）と形式が似かよっており、造立の時代は室町中期頃と思われる。

28　福田の黒杭氏墓地脇の宝篋印塔残欠

世羅西町大字山中福田

山中福田字福田の栗原家の裏山に、近世近辺の庄屋を務めた黒杭氏の墓地があり、その墓地脇に五輪塔の残欠と共に本塔がある。

花崗岩製で現高六五センチ、塔身及び相輪の一部を欠失している外は風化も進まず完存している。

基礎は反花式で高さ二三・五センチ、幅三四センチ、側面の高さ一七・七センチで三面に格狭間がある。反花は各面の上端中央部及び端に複弁を刻出している。正面の左右に銘字の痕跡がある。

笠は高さ二六センチ、笠幅三一センチである。段形は下二段上六段の定形式で、下端の幅二〇・八センチ、上端の幅一五センチである。隅飾は高さ一一センチ、下端の幅一〇センチで、二弧を輪郭で刻出している。

相輪は現存一四センチで、第七輪以上と宝珠を欠失している。造立の時代は格狭間・隅飾などから見て室町初期から中期にかけての

図93 福田の黒杭氏墓地の石塔群

ものと思われる。尚、同所にある五輪塔の残欠（地輪四、水輪四、火輪七、空風輪一、一石五輪一）は、室町初期から末期にかけてのものである。

29 潮楽寺跡の宝篋印塔

世羅町大字安田

安田の中安田にテランカ（寺丘）と呼ぶ谷があり、そこに潮楽寺と称する小堂が建っている。五輪塔を含む宝篋印塔群は、堂の西奥の山林中にある。

宝篋印塔は、いずれも花崗岩製で、室町初期から中期にかけての造立と推定される。なお五輪塔は花崗岩製の外、結晶石灰岩製の小型のものも混っている。

写真の宝篋印塔は、これらの中の中心となるもので、基壇からの高さ一三八センチ、相輪部上部の請花から上を欠損する外は完存し

図94 同所の宝篋印塔

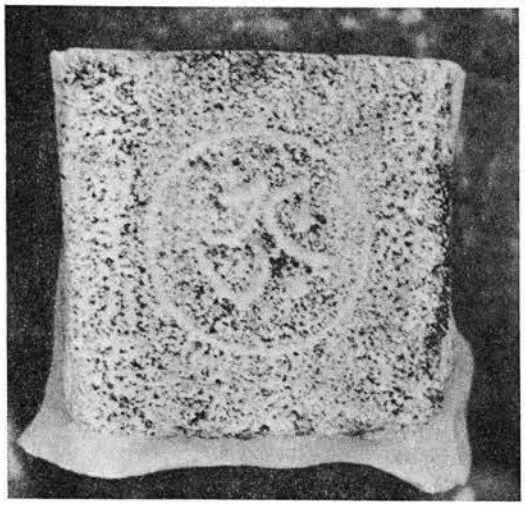

図96　同（塔身部拓影）

図95　潮楽寺の宝篋印塔

ている。

基壇は下段に長さ九〇・五センチ、高さ一三センチの切り石一段を設け、上段には上部の各面に複弁の反花三個を刻出しており、高さ一七・五センチ、側面は高さ一一センチ、幅五三センチの素面である。

基礎は高さ二七センチの反花式で、側面の高さ二〇センチ、幅三七・五センチで三方に格狭間を設けている。上部各面の中央部に複弁の反花一個を刻出し、隅の反花との間に小花を刻出している。側面の格狭間は左右に約八センチ、上部二・五センチ、下部三・五センチを残して、中央に縦二一センチ、横二三・五センチの長方形の枠の中に、中央の花頭形が狭くて萎縮した形の格狭間が刻出されている。

塔身は、高さ一八・三センチ、幅一八・七センチで上下端に円形の枘が設けられている。塔身各面の中央部に、径一〇センチの月輪が陰刻され、中に金剛界四仏の種子を陰刻している。このうち、タラークの左右に、「壽海禅定門」、「文安四年正月十一日」と陰刻されている。

笠は高さ二四・五センチ、笠幅は三三センチ、軒は厚さ三センチで下二段上六段の定形であるが、上段がやゝ低くずんぐりした形になっている。隅飾は高さ一一・五センチ、下の幅一〇・五センチで

二弧を輪郭で巻いているが、下方の輪郭はかなり低くなっている。下端の幅二〇センチ、上端の幅一五センチで中央に径九センチ、深さ五・五センチの枘穴がある。

相輪部は現高三八センチ、中央部で二つに折れており、上の請花及び宝珠を欠失している。伏鉢は高さ六センチ、径一二センチ、請花の高さ三・五センチ、各輪はていねいに刻出されていたようであるが現在風化が進んでいる。

全体的にみて石質がもろく、荘内の鎌倉期から南北朝・室町初期のものに比べて時代の若い割には風化が進んでおり、室町前期末から中期以降は、石材を近在に求めたものと思われる。いずれにしても室町前期末から中期初頭にかけての宝篋印塔の造立形式を知ることのできる貴重な石塔である。

30 善昌庵の宝篋印塔

世羅町大字安田

安田の善昌庵は郷安田にあるが、昔は戸張八幡神社の氏子範囲にあって「山中四郷」と呼んだ荘園時代は戸張に属していたと思われる。

庵は現在小堂を残すのみであるが、谷の高い所に位置し、珍らしい馬頭観音を本尊としている。前方の尾根には横穴式石室を有する古墳上や周辺に古石塔が散在しており、朝日夕日の長者伝説も伝わっている。

図97 善昌庵跡墓地の石塔群

善昌庵墓地には宝篋印塔が四基あり、内一基は石灰岩製である。

この他五輪塔の残欠(地輪七・水輪七・火輪三・空風輪三)がある。

石灰岩製の宝篋印塔は塔身を欠くが、相輪を良く残している。石灰岩製のものは殆んどが相輪を欠失しているだけに貴重である。

善昌庵の宝篋印塔の造立年代を推定させる資料として、戸張八幡神社に次のような棟札がある。

(表)　天長地久于殊信心之大檀那善昌庵槙佐屋□弟

(梵字)　奉謹新建立八幡大菩薩宮御社檀

御願円満住持天外恵文乙卯五拾七歳祈念敬白

(裏)　戸張村槙佐屋ノ□弟善昌庵住持佛法繁昌子孫

天下大平国土安穏于殊信心之大檀那乙卯歳

繁栄祈念ゼ　天文廿年辛亥菊月吉日

石塔の形式及び棟札から見て、造立は天文前後と思われる。

図98　同所の石灰岩製宝篋印塔

31　松ケ峠の伝松尾修理大夫塔

世羅町大字青水

青水の松ケ峠の山道脇に、径五メートルばかりの円墳状の基壇があり、この上に現高九五センチの花崗岩製の宝篋印塔がある。

基礎は二段式で高さ二五センチ、幅三四・七センチ、上端の幅二〇・三センチで側面三面に格狭間がある。格狭間の両側の幅は各六センチで幅が広い。格狭間の花頭形は狭く内面がふくらんでいる。

塔身は高さ一七・五センチ、幅一八・五センチで四面に金剛界四仏の種子を刻んでいる。

笠は下二段上六段の定形式で、高さ二六・五センチ、笠幅三一セ

図99　松ケ峠の伝松尾修理大夫塔

ンチ、隅飾は高さ一一センチ、下端の幅九・五センチで二弧を輪郭で刻出している。

相輪は第四輪以上を欠失している。伏鉢の高さ六センチ、径一四センチ、請花は高さ四・五センチ、径一三・二センチある。

本塔の脇には切り石でつくった石碑があり、これに「松尾修理大夫久我通秋坵」と刻されている。造立の時代は室町後期のものと思われる。

32 石塔曽根の宝篋印塔

世羅西町大字山中福田

本塔は、黒杭氏墓地塔（図九三）から谷をへだてて向いの山の曽根にあり、葺石をもって築かれた径四メートル、高さ約三メートルの円墳状の上にある。

一基は花崗岩製で、相輪の中間部を折損、宝珠を欠失する外は完存している。現高一〇九センチで、基礎の高さ二五センチ、幅三四センチ、三面に格狭間がある。

塔身は高さ一六・八センチ、幅一八センチで、四面に梵字等は見られない。笠は高さ二六・五センチ、笠幅三一・五センチ、隅飾は高さ一一センチ、下端の端九・三センチ、二弧を輪郭で刻出している。相輪は現高四〇・七センチある。

図100 石塔曽根の宝篋印塔

他の一基は石灰岩製で、相輪の殆んどを欠失している外は残存している。同質の基壇を有し、笠は下二段上四段に造成されている。

造立の時代は、花崗岩製のものは室町中期から後期にかけてのもの、石灰岩製のものは室町末期のものと推定される。

本塔は、谷を見おろす位置に造立されており、黒杭氏墓地塔と共に、当時の有力な名主級の造塔と思われる。

33　鳳林寺の伝湯浅氏宝篋印塔

甲山町大字伊尾

宝篋印塔五基及び五輪塔数基は、伊尾の尾首城主湯浅氏の墓として甲山町重要文化財に指定されている。いずれも反花式のもので、格狭間は正面にだけ設けられている。

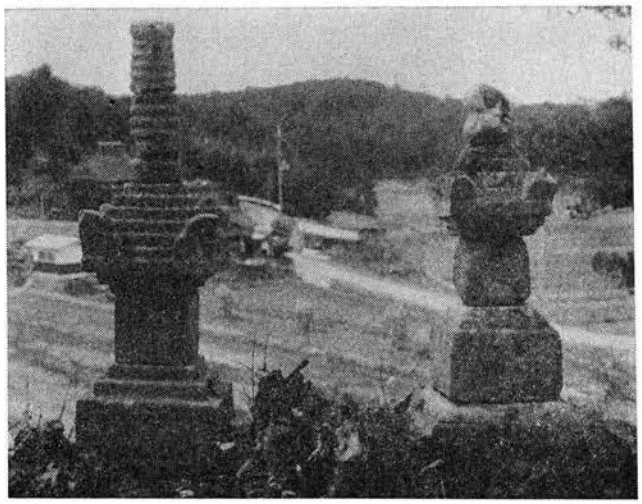

図101　同

図102　鳳林寺の伝湯浅氏宝篋印塔

図104 同所の宝篋印塔

図103 同所の五輪塔

図一〇二の左から二基目の塔身に三行にわたり銘字が見られるが、定かでなく、僅かに「□□禅定尼」の銘が読みとられる。なお、荘内の同時期の宝篋印塔群としては、甲山大字赤屋の文栽寺墓

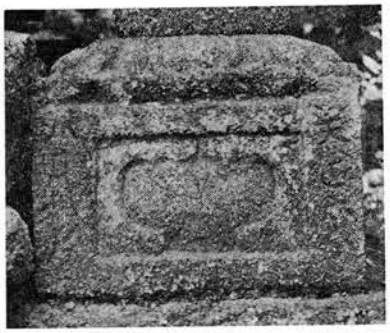

図106 同（基礎部）

図105 伝大隅氏の宝篋印塔（御調郡久井町中野）

地塔（四基）や、世羅町大字徳市の福地坊墓地塔（六基）などがある。

これらの宝篋印塔は室町後期から末期にかけてのものと推定される。近くでは御調郡久井町大字中野の伝大隅氏塔に「天正六年」の銘が見られる（高さ一二八センチ）。

34　文栽寺墓地の宝篋印塔

甲山町大字赤屋

赤屋の文栽寺墓地に古石塔群がある。これらの石塔はもとは文栽寺の裏山にあったもので、数十年前山津浪に合って流されたため、現在地に移転したものである。

墓地には花崗岩製の宝篋印塔六基及び結晶石灰岩製のもの四基、他に石仏二体や五輪塔、無縫塔などがある。これらの石塔は、寺の背後にあった高山城主天野氏関係のものと伝えられており、いずれも室町時代後期の形式を有する。

宝篋印塔の基礎はいずれも浅い反花のあるもので、幅三〇センチ前後、格狭間は前面にだけある。塔身は高さ一七センチ前後、幅一八センチ前後のもので、塔身の四面に浅い梵字が陰刻されている。

笠は幅二八センチ前後のもので、下二段上五段となっている。相輪は九輪を線刻しただけのものや略式のもので一基を除いてほとんど欠損したものが多い。完形のものは高さ一一〇センチ程度の小型で、石質も近在産出の石を使用したためか時代の割には風化が進んでいる。基礎（格狭間なし）に「𑖡（タラーク）　大成宗功」と陰

図107　文栽寺墓地の宝篋印塔

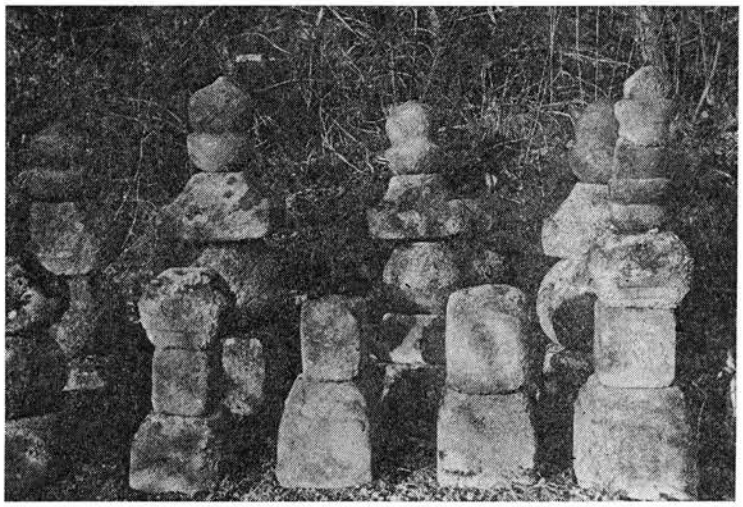

図108 文栽寺墓地の宝篋印塔

刻されたものが一基あり、他のものには刻銘が見あたらない。室町後期を代表する宝篋印塔として、伊尾鳳林寺の伝湯浅氏塔、徳市の福地坊墓地塔とともに貴重である。

35 今高野山観音堂前の宝篋印塔

甲山町大字甲山

今高野山の観音堂前に高さ四メートルばかりの宝篋印塔がある。

図109 同

図110 今高野山観音堂前の宝篋印塔

図111　同（基礎部の銘文）

図112　同（同）

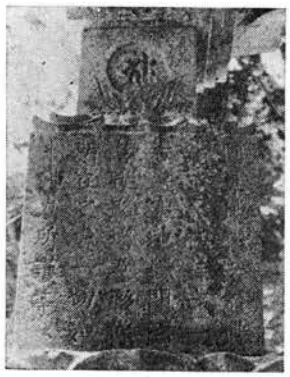

図113　同（同）

元文三年（一七三八）の造立である。塔身の四面に金剛界四仏の種子を陰刻している。各種子は蓮華座の上にのる月輪の中に刻出されている。基礎の正面（南面）には梵字シチリア（宝篋印陀羅尼経）を、他の面には銘文を刻んでいる。

（西面）
経日若有有青能
於此塔一香一華
禮拝供養八十億
劫生死重罪一時
消滅生免災殃死
生佛家若有應随

（北面）
阿鼻地獄若於此
塔或一禮拝或一
右邊塞地獄門開
菩提路塔及形像
所在之處一切如
来神力所護等久

（東面）
天長地久国家安榮
乃至法界平等普利
時之現住　法印榮雄
法印快深
闍梨恭圓
元文三戊午星
孟夏嘉辰
施入三原秋窻了躰
法吟性詠

なお切り石の基壇の二面に左記の陰刻銘がある。

石作大連公　金具寄附夫□
尾道町　蓮室自弘尼
藤原氏山根平三郎安利

(四) 石灰岩製の宝篋印塔

石灰岩製の宝篋印塔は室町時代の中期以降に流行したもので、造立当初は純白の美しい姿であったと思われるが、現在は殆んどの塔が相輪部を欠損・欠失しており、隅飾りは風化してくずれ、石も灰色に変化している。現在残欠を含めて荘内で約一〇〇基の造塔が認められるが、桑原方の甲奴郡甲奴町の宇賀地区や甲山町大字青近・赤屋・別迫・西上原・東上原あたりに多く、太田方では世羅町大字安田・戸張・徳市・本郷・重永辺に散在している。中でも宇賀地区には結晶石灰岩製のものが大へん多い。このことは石灰岩の産地が比婆郡東城町末渡や久代・戸宇・同郡西城町の平子などにあって搬出に便利なことに起因したものと思われる。なお、五輪塔にも室町中期頃から石灰岩が使用されてきており、その形式は花崗岩とはやや形が異って、水輪がつぼ形のものや横にはり出したものもある。

石灰岩製の宝篋印塔の中でも初期のものは、笠幅二四・五センチ

表3 郡内の主要な石灰岩製の宝篋印塔一覧表

No.	名称	所在地	現高(センチ)	笠幅(センチ)	備考
1	女鹿山石塔尾根塔	甲山町大字青近	一〇五	三〇	塔身四面に梵字。相輪欠失。径五メートルの円墳上。
2	ホテクラ山行者ケ原塔	甲山町大字青近	七二	二五	塔身四面に梵字。相輪欠失。径三・五メートルの円墳上。
3	黒木正家墓地塔	甲山町大字別迫	二四	二九	笠部のみ。
4	平谷静夫家裏塔	甲山町大字別迫	一二七	二八	完存。塔身四面に梵字。円墳状の上にある。
5	久代城跡塔	甲山町大字東上原	一二六	二九	殆んど完存。塔身四面に梵字。径四メートルの円墳上。
6	深串正登家前塔	甲山町大字西上原	八〇	二七	相輪部欠失。塔身四面に梵字。径四メートルの円墳上。
7	瀬近一本杉塔	甲山町大字青近	七八	二六	相輪部欠失。
8	福仙寺跡の塔	甲山町大字別迫	八三	二八	相輪部欠失。もと近くの堂山にあった。
9	水越石塔坂塔	甲山町大字赤屋	八〇	二七	相輪部を欠失。円墳上にある。四面梵字。
10	大前廃寺近くの宝篋印塔	甲山町大字赤屋	八一	二八	廃寺跡が近くにある。四面梵字。相輪部欠失。
11	マカットウ山塔	甲山町大字赤屋		—	基礎及び相輪のみ。径四メートルの円墳上。
12	下津屋高山正人家裏塔	甲山町大字伊尾		—	塔身（四面梵字）と基礎のみ。

13	国久奥天神社岡塔	世羅町大字井折	七二	二五	塔身部欠失。基壇あり。
14	千田平塔	世羅町大字本郷	七六	二五	相輪部欠失。円墳上。
15	松本家墓地塔	世羅町大字寺町			
16	宇山の金山塔	世羅町大字寺町			
17	下横路塔	世羅町大字安田	八七・五	三〇	相輪部欠失。
18	鹿田の阿弥陀堂塔	世羅町大字徳市	五六	二一	相輪部欠失。円墳上。
19	大仙石風呂塔	世羅西町大字山中福田			
20	円城寺ホウノキ塔	世羅西町大字山中福田	七五	二二	相輪部第一輪以上欠失。石灰岩の基壇あり。
21	石塔曽根塔	世羅西町大字山中福田	八四		
22	西川の天神社岡塔	世羅町大字井折			二基
23	殿さん墓塔	世羅町大字重永		二五・五	塔身及び相輪部欠失。石灰岩の基壇あり。
24	善昌庵墓地塔	世羅町大字安田			塔身欠失。
25	太郎丸塔	甲奴町大字宇賀			塔身及び相輪部欠失。
26	水呑塔	甲奴町大字宇賀			基礎と塔身のみ。
27	種久正登家墓地塔	甲奴町大字宇賀			相輪部欠失。
28	高山塔	甲奴町大字宇賀			相輪部欠失。
29	目谷塔	世羅町徳市	九二	二六	相輪部二輪以上欠失。四面梵字。金剛界四仏。
30	頭士山古寺院跡塔	世羅町戸張			基壇と基礎のみ。笠は山下に落下している。
31	善法寺参道脇経塚塔	世羅町賀茂	七七	二九	円墳状盛土上
32	宮野家墓地塔	世羅町本郷			
33	大仙谷塔	世羅西町山中福田			地名石風呂に有り。基礎と笠のみ。（いぼを落すと信仰している）
34	城の洲沢家裏山の宝篋印塔残欠	甲奴町宇賀	八七	二〇	
35	行者が原の宝篋印塔	甲山町青近	七四・五	一四	

から二九センチにかけてのもので、同質の整形した基壇一段の上に二段式の基礎をかさね、原則として塔身の四面に金剛界四仏を大きく薬研彫している。これらの石塔は径四メートル位、高さ二メートル程度の円墳状の塚の上に造立され、中には川原石のふき石が見られる。今までに刻銘があるものが発見されていないので造塔の性格が不明であるが、高田郡甲田町上甲立の余谷にある石灰岩製の宝篋印塔には「天叟覚隆大居士　文禄二年二月五日」とあり（是光吉基前掲書）、墓塔として造立されたものであることがわかる。しかし、盛土をもった塔は経塚ではないかと推定され、今後の考古学的な調査が待たれる。

石灰岩製の笠幅一五センチから一九センチ程度の小さな宝篋印塔は、桃山時代から江戸時代初期にかけてのものと推定される。この期のものは隅飾が低く、しかも外反がめだってきている。

石灰岩製の基礎には側面に格狭間が設けてなく、僅かに赤屋水越の石塔坂塔（No.9）と重永の殿様墓（No.23）に異形のものが見られるのみである。尚、段数は、基礎はすべて二段式につくられており、反花式は見られない、笠は下二段上五段式のものと、下二段上四段式のものが普通で、中には下二段上三段式（No.9・23）のものも見られる。

種子は初期のものは塔身一杯に大きく薬研彫されているが、時代の経過に伴って次第に小さく浅く彫られる傾向にある。また月輪で囲んだものは宇賀に一例（No.34）あるだけである。なお、塔身は縦長のものがほとんどである。

石灰岩製の宝篋印塔や五輪塔などは、花崗岩製のものと形式がやや異なることから、花崗岩を石材として使って造塔した石工とは別に、専門の石工が居たことが考えられる。或は産地で直接製造して荘内に運びこんだものかもしれない。

宝篋印塔の終末期は荘内においては江戸時代の初め頃と考えられる。これ以降には宝篋印塔は殆んど作られなくなる。たまたま造られたものは笠幅二七センチ程度で、塔身には梵字が極めて浅く陰刻されるか、又は梵字を彫らなくなり、反花も浅く、ついには省略するようになる。石質も地元の手に入れやすい花崗岩や小型の石灰岩を使用しており、石質が悪く風化もかなり進んでいる。今高野山観音堂前にある江戸中期の大型の宝篋印塔（図一〇）は例外である。

1　平谷家裏の宝篋印塔

甲山町大字別迫

別迫砂田の平谷静夫家の裏に、結晶石灰岩製の宝篋印塔がある。本塔は荘内にある石灰岩製の塔のうちでは、最も風化が少なく、相輪部まで完存する点貴重で、甲山町の重要文化財に指定されてい

る。

基壇からの高さ一二七センチ、基壇は同質の方形のもので、高さ一二センチ、幅四三センチある。

基礎は二段式で高さ二七・八センチ、幅三一センチ、側面の高さは二〇・五センチあって、四面は素面である。

塔身は高さ一八センチ、幅一八・五センチとほぼ方形で、四面に金剛界四仏を種子で陰刻している。上下端の中央に径七・五センチの枘が出ている。

笠は高さ二六・七センチ、笠幅二八センチ、笠中央部の厚さ五センチで、隅飾は高さ七・五センチと短い。段形は下二段上五段で、下端の幅二二センチ、上端の幅一二・五センチで上部に径一〇センチ、深さ一〇センチの相輪の枘受けの穴がある。

図114　平谷家裏の宝篋印塔

相輪部は高さ四二・五センチで、伏鉢は高さ六センチ、径一三・五センチ、下の請花は高さ五センチ、幅一三・五センチ、九輪はやや深く刻線であらわしている。上の請花は高さ六センチ、幅一二・五センチ、宝珠は高さ九センチ、径一一センチである。尚、請花は上下とも八葉の単弁を刻出している。

本塔は、もと径五メートル、高さ数メートルの円墳状の上にあったが、現在は半分位けずり取られてしまっている。造立の時代は室町中期から後期にかけてのものと推定される。

2　久代城跡の宝篋印塔

甲山町大字東上原

東上原の上谷、久代谷の西側にある久代城と呼ばれる城跡の一画に、径四メートル、高さ一・五メートルの盛土があり、この上に宝篋印塔がある。

高さ一三七センチ、基壇は繰り形のもので高さ一一センチ、側面は高さ五センチ、幅四六センチ、基礎は高さ二九・五センチ、幅三一センチの二段式のもので、四面は切り放しの素面で上端の幅は二四センチある。

塔身は高さ一九・五センチ、幅一八センチで平谷家塔にくらべるとやや縦長である。各面には金剛界四仏の種字が大きく陰刻されて

図115 久代城跡の宝篋印塔

図116 同

相輪部は三つに折れ、宝珠の一部を欠損しているが、別迫平谷家裏塔に似た形式である。現高五〇センチ、伏鉢は高さ六センチ、径一三センチ、下の請花は高さ六センチ、径一三センチ、九輪部は線刻である。上の請花は高さ五・五センチ、宝珠部は半分位欠損している。久代城は、太田荘の雑掌として活躍した久代氏一族の根拠地と推定され、薬師堂脇にある五輪塔と共に当時を物語る石塔である。

3 深串家前の宝篋印塔

甲山町大字西上原

西上原の深串正登家前に径四メートル、高さ一メートルの塚があり、この上に本塔がある。

高さ八五センチの石灰岩製で、相輪部を欠失している。基壇は繰り形のもので高さ一二・五センチ、側面は高さ五センチ、幅四六センチで切り放しの素面である。

基礎は二段式で高さ二六・五センチ、幅三〇・五センチ、側面は高さ一九センチで格狭間は設けられていない。上端は幅二二・八センチある。

塔身は高さ一九・五センチ、幅一八センチで、四面に金剛界四仏の種子を陰刻している。笠は高さ二五センチ、幅二八センチで、下端の幅二二センチ、上端の幅一一センチで、かなり風化している。

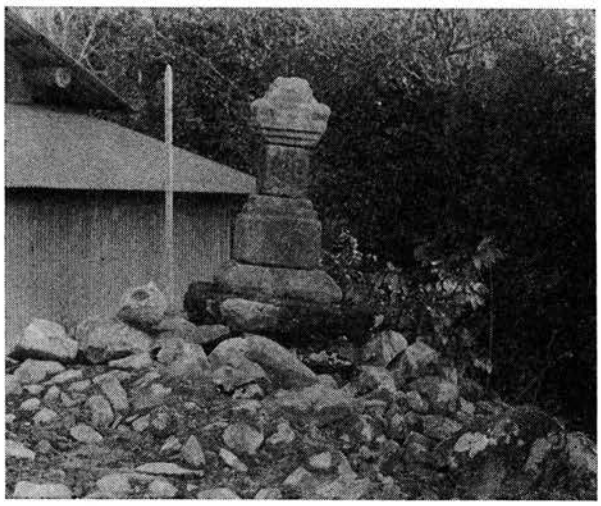

図117　深串家前の宝篋印塔

笠は下二段上五段で、高さ二五センチ、幅二六・七センチ、軒幅三・七センチで隅飾はやや風化が進んでいる。

本塔は甲山城（今高野山城）主、毛利氏の墓と伝えているが定かでない。

4　円城寺上の宝篋印塔

世羅西町大字山中福田

図118　同

山中福田の円城寺近くの末森家の上に、ほうの木の古株があって、その株の根元に現高約九〇センチの宝篋印塔がある。

このほうの木には面白い言い伝えがある。昔この木を切って、山中福田八幡（溝熊八幡）の御神体と、徳市八幡の御神体、それに円城寺の仏像を作ったという。そこで、それ以来山中福田の人々は、ほうの木で作った下駄ははかないと言う。この神体や仏像を作った

図119 円城寺上の宝篋印塔

という伝説と、この地に宝篋印塔が造立されたこととは何らかの関連をもつものと思われる。

基壇の高さ八センチ、幅三二センチ、基礎は二段式で高さ二二・五センチ、幅二五センチ、側面の高さは一六・五センチである。塔身は高さ一六・五センチ、幅一五センチ、笠は高さ二三センチ、幅二二センチで、下二段上五段である。

相輪は現高一三センチで伏鉢と請花を残すのみである。

5 城の洲沢家裏山の宝篋印塔残欠

甲奴町大字宇賀

洲沢令二家裏山の墓地の中央部あたりに、宇賀の上野城主矢田新輔元俊（元亀三年九月没・閣樓院殿建山真公大居士）の墓として、

図120 城の洲沢家裏山の宝篋印塔

上記の法名を記した木製卒都婆が建ててある。

結晶石灰岩製の宝篋印塔で、現高八七センチであるが、塔身より上は別物である。基壇は同質のもので高さ九・五センチ、繰り形をしており側面は高さ四・五センチ、幅は三五センチある。

基礎は高さ二四センチ、幅二五・五センチで、側面は高さ一七・五センチあり、二段式で四面は切り放しの素面である。上端の幅は一九・五センチで、この上に高さ二〇センチ、幅一七センチの塔身がある。塔身には径一二・七センチの月輪が各面に陰刻され、中に金剛界四仏が陰刻されている。笠は幅二〇センチと小さく、下端の幅も一五センチと狭いため、別の小型の塔に付随するものと思われる。

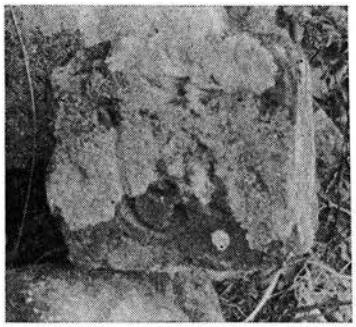

図121　同所の凝灰岩製の塔身

荘内外の石灰岩製の宝篋印塔の中で、月輪を持つものは本塔だけで珍らしく貴重である。造立の時代は所伝の如く室町末期のものと思われる。尚、脇には花崗岩製の小型の宝篋印塔が二基造立されている。いずれも室町末期のものである。

図一二一は凝灰岩製の小型の宝篋印塔の塔身で、高さ一五センチ、幅一六・二センチあり、四面に胎蔵界の四仏を種子で大きく薬研彫している。荘内では、世羅町大字田打の若永の層塔残欠を除いては凝灰岩製の石塔がなく珍らしい。

6　行者が原の宝篋印塔

甲山町大字青近

青近の行者が原と呼ぶ山林の中に、径四メートルばかりの石積の盛土があり、その上に本塔が立っている。

高さ七四・五センチで相輪を欠失しているが、その他は原形を保っている。基壇は高さ一〇センチ、幅四一センチ、繰り形である。

基礎は二段式で高さ二四・五センチ、側面は高さ一六・三センチ、幅二八・七センチの四方切り放しの素面である。上端の幅は二二センチで中央に枘穴がある。

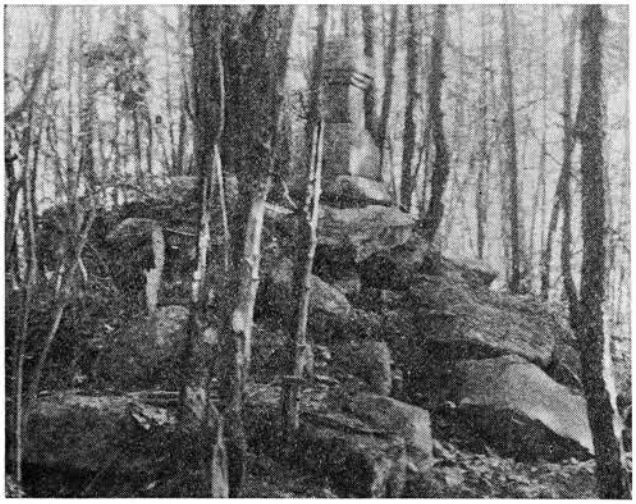

図122　行者が原の宝篋印塔

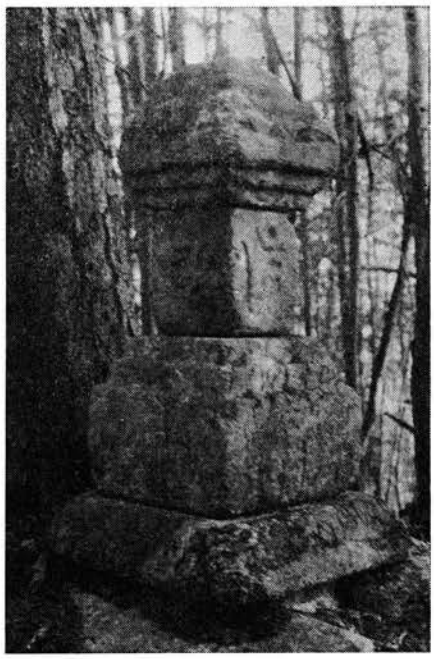

図123 行者が原の宝篋印塔

塔身は高さ一八・五センチ、幅一五・五センチとやや縦長で、各面に金剛界の四仏を種子で大きく陰刻している。

笠は下二段上四段と上の段数が少なく、上端部分(幅一四センチ)はかなり風化が進んでいる。高さ二一・五センチ、幅は二四・五センチある。

造立の時代は室町時代後期のものと推定され、行者が原と呼ばれていることから、古くから修験道の行者による祈禱が行なわれていたことをうかがわせている。

7 千田平の宝篋印塔

世羅町大字本郷

本郷大村の国道一八四号線、国久口の西側に千田平と呼ぶ棚田がある。その中の開発より残された尾根の突端に、円墳状の盛土があり、本塔が立っている。

高さ七六センチで、基礎は高さ二四センチ、幅二八センチ、塔身は高さ二〇・五センチ、幅一八センチで四面に金剛界四仏を種子で陰刻している。

笠は下二段上四段で上端の幅一三センチ、下端の幅一九センチである。

隅飾は高さ一一センチでやや外傾している。

本塔脇には五輪塔の地輪や形の美しい空風輪が数箇ある。これら

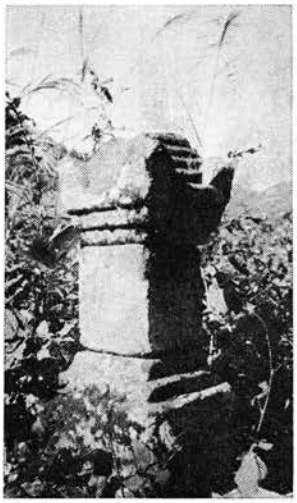

図124 千田平の宝篋印塔

の石塔は、この地を開拓した名主級の墓と思われる。造立の時代は室町末期と推定する。

この塔と形式・大きさ共に良く似ているものが安田の横路にある。然もその立地が円墳状の盛土の上に建っている点も共通している。ただ塔身の四面に彫られた金剛界四仏の種子は字体が異なっている。同一時代の同一趣旨の造立と思われるので、参考のために掲げた。

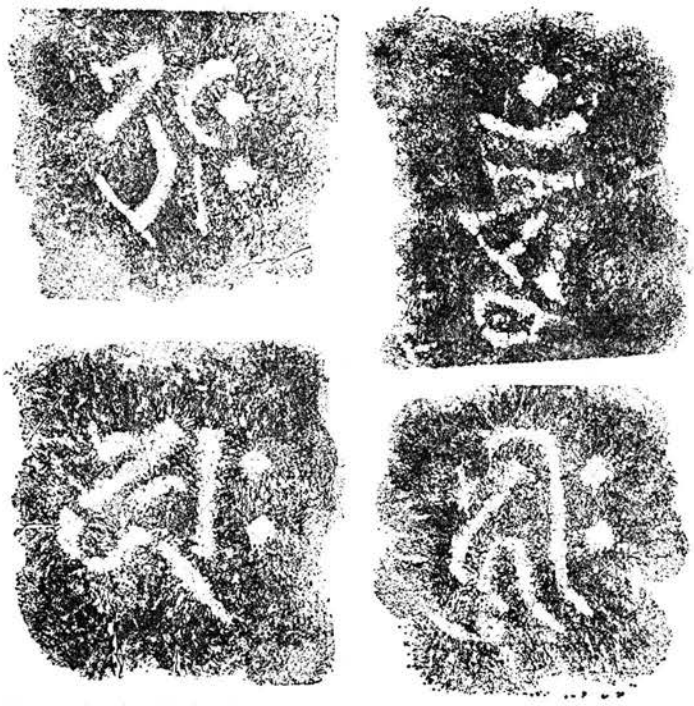

図125　同（塔身部拓影）

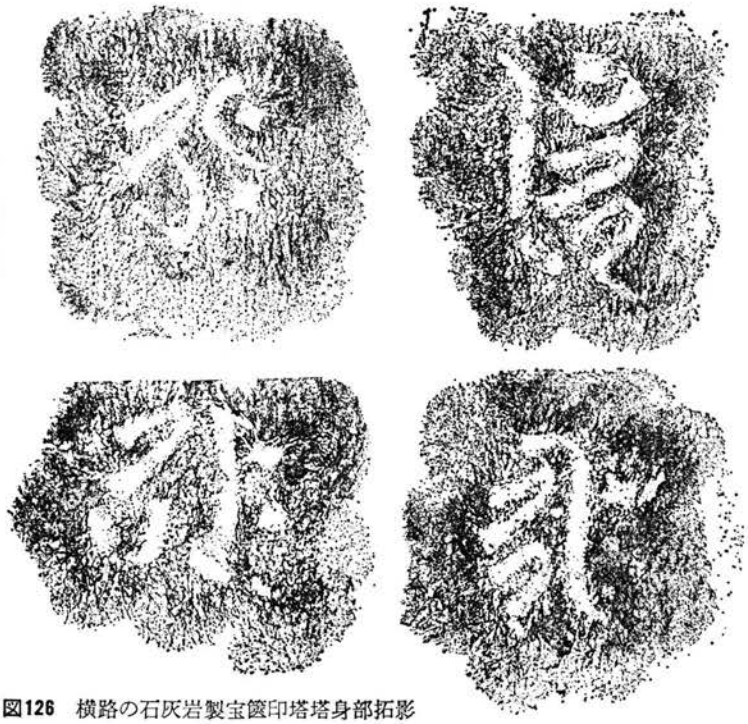

図126　横路の石灰岩製宝篋印塔塔身部拓影

8 水越石塔坂の宝篋印塔

甲山町大字赤屋

赤屋の水越、新池上の大松下に円墳状の盛土があり、この上に石灰岩製の宝篋印塔がある。

高さ七九センチで相輪部を欠失している。石灰岩製の基壇は高さ一二センチで上部に反花が一面に五花刻出されている。側面は高さ六センチ、幅四三センチで切り放しの素面である。

基礎は二段式で高さ二七センチ、側面は高さ一八・二センチ、幅二八・八センチで四面に格狭間が設けられている。格狭間の形は花崗岩製のものには見られない形のもので、写真のように凵形のものを各面に二個ずつ並べている。

図127 水越，石塔坂の宝篋印塔

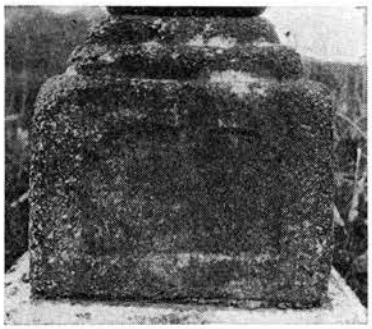

図128 同（基礎部）

図129 重永の殿様墓

塔身は高さ一九センチ、幅一七・二センチで四面に梵字を陰刻している。

笠部は風化が進んでいて定かでないが、高さ二一センチ、笠幅二六センチ、中央部の厚さ四センチ、下二段上三段と上部の段数が少ない。隅飾は風化が進んでいるが現高一一センチである。

本塔は基壇に反花を刻出している点及び基礎に変った形の格狭間を設けている点など、他の石灰岩製のものに見られない珍らしい例である。尚、本塔と類似する塔としては、世羅町大字重永の殿様墓がある。

9　下横路の宝篋印塔

世羅町大字安田

安田の沖田の県道宇賀安田線から見える小高い丘の上に本塔が立っている。

高さ八七・五センチで、相輪を欠失しているが、この塔は文政年間の「国郡志差出帖」にも記載されており、現在まで塔周辺の草刈を女性が行ってはならないと言い伝えられてきた特異な塔である。

基壇は高さ八・五センチ、幅四一センチで、基礎は上二段式で高さ二八・五センチある。

塔身は高さ二〇センチ、幅一九センチで、四面に金剛界四仏の梵字を陰刻している。笠は高さ二五センチ、幅三〇センチで、下二段上四段の形式である。造立は室町時代末期のものと思われる。

図130　下横路の宝篋印塔

10　目谷の宝篋印塔

世羅町大字徳市

徳市の目谷ダムの下方の台地上に、図一三一のように結晶石灰岩製の宝篋印塔が五輪塔や石仏と並立している。

高さ九二センチで、九輪の上部辺が折れ、隅飾の風化が進んでいる外は完存している。基礎は二段式、塔身には四面に梵字を陰刻している。笠は下二段上四段である。

造立の時代は室町末期のものと思われる。尚、徳市の鹿田の谷に

も同じような石灰岩製の宝篋印塔がある。

図131 目谷の宝篋印塔

11 大前寺跡近くの宝篋印塔

甲山町大字赤屋

赤屋の松本家奥の山林中の寺跡と伝えられる付近に本塔がある。

図133 同所の石塔残欠

図132 大前寺跡付近の宝篋印塔

現在は石の上に置かれているが、元来は十数メートル先の円墳状の盛土の上に立っていたものと思われる。

相輪の大部分を欠失する外は残っていて、現高八〇・五センチ、基礎は高さ二七・七センチ、幅三〇センチ、塔身は高さ一七センチ、幅一七・八センチで、四面に大きく種子を陰刻している。

笠は下二段上四段で、幅は二七・五センチである。造立の時代は室町中期から後期にかけての造立と思われる。

尚、近くの寺跡の上手には、円墳状の盛土の上に五輪塔や花崗岩製の宝篋印塔が散在している。

12　福仙寺跡の宝篋印塔（元堂山塔）

甲山町大字別迫

別迫播磨の福仙寺跡に多数の古石塔がある。その中の一基で元は付近の堂山の上にあったが、耕地整理のために堂山がけずり取られて現在地に移された石灰岩製の宝篋印塔である。

基壇からの高さ九八センチで、相輪を欠失し、現在は別物の小型の相輪の一部を置いてある。

基壇は高さ一一センチ、一辺四五・五センチの方形のものである。基礎は二段式で高さ二九センチ、幅三一・五センチで四面は切り放しの素面である。側面の高さ二一センチ、上端の幅二一・七センチで中央に枘穴がある。

図134　福仙寺跡の宝篋印塔

塔身は高さ一八・五センチ、幅一八・七センチと正方形に近く、四面には金剛界四仏を種子で陰刻している。

笠は風化が進んでいるが、高さ二二・六センチ、幅二七・六センチで、下二段上三段と上の段数が少ない。隅飾はほとんど磨滅して定かでない。造立の時代は室町中期以降と思われる。尚、以前堂山をけずり取った際、本塔の下には無数の小礫が敷かれ、中から土師質の坏（径約一二センチ）一箇が出土した。

(五) 五輪塔

荘内における五輪塔は、数百年間の星霜を経て、残欠になっているものも多い。

花崗岩製の五輪塔は、形式から見て鎌倉中期頃から造立が始まり南北朝期から室町前期にかけて盛行し、江戸時代初期頃まで続く。室町後期頃から石灰岩製の五輪塔や花崗岩製の一石五輪塔の造立も始まったが、次第に小型化し、ついには姿を消して行く。一石五輪塔や小型の石灰岩製の五輪塔は江戸時代の中期近くまで造立されたようである。そして五輪塔に代って板碑形の墓石が誕生する。

初期の五輪塔は鎌倉中期頃から、荘官級や有力な名主層が造立を始めたものと思われる。しかし、造立時から六百有余年を経過する間に開墾が進み、相当数の石塔がもとの位置から移動させられた。また、数十年前まで結婚式などの際、地域の青年層が石仏や古石塔を民家へ持ち込み祝うといった風習があったために、古石塔が被害を受け、元あった場所へ戻されなくなって、今日見られるように残欠化していったものもあったと思われる。

石質は、古い時期のものは良質の花崗岩を使用しているため風化が進まず、質の悪い石を利用した室町末期のものの方がかえって風化が進んでいる傾向が強い。石材としては花崗岩製が大部分で、これについで結晶石灰岩製（こごめ石と呼んでいる）のものが室町時代から使われているが数は少ない。砂岩製のものはごく一部で見られるのみで、凝灰岩製のものは発見されていない。

五輪塔には紀年銘のあるものが少なく、たとえあっても銘文が磨滅して読みとれない。僅かに東上原上谷（久代谷）薬師堂五輪塔の一基の地輪に「暦応二年」の銘がある（No.13）のみで、他には時代の新しい今高野山墓地に、寛永年間や寛文年間のものがあるだけである。この様に基準資料に乏しい五輪塔は、その造立年代の判定に困難が伴う。

形式的に見ると初期のものは地輪が低く、水輪は真丸形の上下端を切った形で枘がない。鎌倉末期から南北朝期にかけて、水輪の上部に円形の奉籠孔のあるものが多い（No.13・14）。この時期には水輪が下へすぼまった形のもので上下端に枘を造り出しているものが多い。中には上端は水平に切り、下端に枘をもっているものもある。

火輪は初期のものは高さがやや低く、軒も厚く、軒の心反りが美しい。時代が経過するにつれて軒の厚みも薄くなり、軒の端が厚みを増し、軒下端部の反りも少なくなってくる傾向がある。また下端中央には枘穴が設けられている。

表4　郡内の主要な五輪塔一覧表

No.	名称	所在地	高さ（センチ）	備考
1	今高野山塔の岡塔	甲山町大字甲山	二三四	寺伝では「願主の墓」という。久代了信の墓か。
2	田打八幡神社塔	世羅町大字田打	空風輪 一二八・五	地輪は別物。鎌倉前期か。
3	下津屋田中家墓地残欠	甲山町大字伊尾	地火輪 三四・五	深鉢形空風輪。古式。
4	五反平五輪塔残欠	世羅町大字安田	五九	古式の残欠。鎌倉時代。
5	城の洲沢家裏山の五輪塔残欠	甲奴町大字宇賀	八二	地輪欠失、空風若干欠損。水輪臼型で古式。鎌倉時代。
6	安楽院墓地の五輪塔残欠	甲山町大字甲山	地輪 二三	幅三八センチ。四面に梵字。上面枘穴なし。鎌倉時代外。
7	堂風呂の五輪塔	甲山町大字赤屋	一〇二	鎌倉時代から南北朝期のもの二基、外残欠。
8	町営住宅上の五輪塔残欠	世羅町大字井折	地輪 二八	幅三七センチ。鎌倉時代。
9	明覚寺跡墓地の五輪塔	甲山町大字赤屋	九〇外	鎌倉中期から末期（中央の四基）。
10	金福寺跡の五輪塔群	世羅町大字黒淵		五〇基以上。鎌倉時代から室町時代。黒淵地頭三善氏に関係のものか。
11	万福寺跡の五輪塔群	世羅町大字堀越		二〇数基の五輪塔群の近くに地輪に仏像彫出のもの二基あり。
12	万福寺跡大仙社脇の五輪塔	世羅町大字堀越	八七・五	室町初期。地輪に銘あり。
13	久代谷薬師堂の五輪塔群	甲山町大字東上原	一二三外	「暦応二年二月五日」「勝念阿弥陀仏」の銘のあるものを含む。
14	十二坊跡山の五輪塔	甲山町大字伊尾	一二九外	鎌倉時代から室町時代にかけて五〇基以上。
15	福仙寺跡墓地の塔	甲山町大字別迫	約 八七外	南北朝時代。桑原方地頭関係の墓か。
16	城の秋坂谷塔	甲奴町大字宇賀	七三	四基。鎌倉末期から南北朝期。
17	高山の丘陵上の塔	甲奴町大字宇賀	八〇外	地元で祖霊の墓という。南北朝期か。
18	善法寺跡参道脇の塔	世羅町大字賀茂	一六一外	水輪に下脹れと肩張り壺形の二通りあり。
19	永安寺跡の五輪塔群	世羅町大字中原		郡内第二位の大きいものを含む。室町時代。
20	柳原家上の五輪塔残欠	世羅町大字寺町	水輪 最大径四四	鎌倉末期から室町時代。五〇基以上。宝篋印塔・石仏を含む。
21	宮ヶ森の五輪塔群	世羅町大字重永	空風輪 三四外	水輪の側面に三個の凸形の穴がある。
22	高橋家脇の五輪塔の残欠	世羅町大字本郷		鎌倉中期から室町時代。二〇基。
				空風輪は大型で四方梵字有り。屋敷には空堀りあり。

No.	名称	所在地	高さ（センチ）	備考
23	長寿椿の五輪塔群	世羅西町大字山中福田		鎌倉時代から室町時代のもの十数基。
24	中迫五輪塔群	世羅西町大字長田		鎌倉時代から室町時代。
25	窪田堂脇石塔群	世羅町大字本郷		鎌倉時代から南北朝期。
26	矢倉の五輪塔	世羅町大字西神崎		
27	矢原の五輪塔群	世羅西町大字長田（横坂）		
28	定光地墓地の経塚塔	世羅町大字津口	一二五	鎌倉時代から室町時代。横坂地頭関係のものか。
29	文栽寺墓地塔	甲山町大字赤屋	五七外	水輪が方形で内部石仏を刻出。享禄二年造立。
30	今高野山金剛寺墓地の五輪塔	甲山町大字甲山	九一	石灰岩製のもの二基。室町末期。
31	本地の竹下家墓地	甲山町大字伊尾	八〇外	空風輪を欠失。寛永□年の銘あり。
32	鳳林寺下見氏塔	甲山町大字伊尾		南北朝時代。
33	鳳林寺墓地塔	甲山町大字伊尾		一基。室町時代。
34	子山堂ヶ谷五輪塔群	世羅町大字戸張		一基。室町末期。
35	岡坊跡五輪塔群	世羅町大字寺町		寺院跡。
36	毛利家墓地の残欠	甲山町大字西上原		古墳上に数十基。鎌倉時代から室町時代。
37	今高野山安楽院墓地の残欠	甲山町大字甲山		火輪二基。A形の陰刻が二個ずつ四面にあり。江戸初期か。
38	下津屋権現山新墓下	甲山町大字伊尾		地輪二基の四面に大きく梵字が陰刻されている。鎌倉時代。
39	医王寺裏五輪塔群	世羅町大字本郷平ノ城		水輪に奉籠孔あり。鎌倉時代。
40	十日市堂脇石塔群	世羅町大字本郷		南北朝期から室町末期。
41	旧修善院跡五輪塔群	世羅町大字本郷（西川）		層塔残欠を含む。
42	白雲寺跡五輪塔	世羅西町山中福田		鎌倉時代～南北朝。梵字あり。
43	広福寺脇五輪塔	世羅町大字徳市		山中地頭に関係か。鎌倉時代～室町初期。
44	鹿田の五輪塔	世羅町大字徳市		室町初期から末期。
45	西明寺跡下泉家墓地脇石塔群	甲山町大字小世良		南北朝期から室町後期。
46	万年寺跡（三川ダム）石塔群	甲山町大字川尻（久恵）		鎌倉中期から室町末期。

空風輪は一石で作られており、古式のものは空輪が蓮の蕾のような形で縦に長く、風輪は深鉢のような形である。鎌倉末期から南北朝期にかけては、双三郡布野村松雲寺の五輪塔（元亨二年）の如く空輪の下部が細くしぼまる傾向があり、形も宝珠形に近い（図一五二）。時代が経過するに従って風輪部が半円形になる傾向が見られる。室町時代の後半からは空輪の先端が次第に伸びてきて、空輪と風輪の径も同大に近くなってくる。

種子は、初期のものは各輪の四方に、薬研彫で大きく深く刻出している（No.6・8・10）。時代の経過に伴って、小さく浅く彫られるようになり、また一面にだけ彫られる傾向がでてきて、ついには種子が陰刻されなくなる。久代谷薬師堂の南北朝期の五輪塔の中には、各輪の正面にだけ大日の報身真言、ア・ビ・ラ・ウーン・ケンの種子を配したものが多い（一二四～一二六頁参照）。

五輪塔の基壇は、室町印塔のように一定の墓域に切り石造りの基壇を設けたもの（No.14）もあったと思われるが、ほとんど残っていない。室町末期から江戸初期頃にかけてと思われる五輪塔の中には基壇を繰り形につくったり、反花を刻出した例（今高野山金剛寺墓地・安楽院墓地・宇賀の洲沢家裏山墓地塔）もある。尚、当時の墓域を示す石垣づくりの土壇は、甲山町宇津戸の京蔵山や世羅町宇山の山林中に残っている。

1　今高野山塔の岡の五輪塔

甲山町大字甲山

今高野山の塔の岡と呼ばれる岡には、元亨三年多宝塔が建立されたと見られる（元亨三年十月廿三日付、了信今高野多宝塔建立願白文、『広島県史、古代中世資料編Ⅳ』所収）。この岡の一画に五輪塔が建っている。

高さ二三四センチの花崗岩製で、基壇は高さ二一・六センチあり一三センチ上に繰り形をつけ、その上端は一辺八八センチ、下端一辺一一二・五センチ、側面は高さ一〇・五センチ、一辺一一七・五センチである。

地輪は高さ五二センチ、下端の幅八二センチ、上端の幅七九・七

図135　今高野山塔の岡の五輪塔

センチ、やや低く各面とも素面で刻銘が見あたらない。

水輪は高さ五八センチ、最大径七〇・三センチで、僅かに横に張った地形をしている。大型のため上端下端の枘等は確認できていない。塔身に種子はない。

火輪は高さ四五センチで軒幅七〇・五センチ、屋根の勾配はきつく隅棟も強く反っている。軒中央の厚さは一三・八センチとやや厚い。風輪はやや半球形に近く、高さ二四センチ、径四三センチ、空輪は宝珠形で高さ三三センチ、最大径二七センチである。

寺伝では「願主の墓」と伝えており（今高野山安楽院蔵「寺伝記録帳」）、多宝塔の願主久代了信の供養塔ではないかと思われる。荘内では最大の五輪塔である。尚、基礎等にも刻銘は見られない。

2　田打八幡神社の五輪塔残欠

世羅町大字田打

田打の八幡神社境内の脇に、十基ばかりの寄せ集めの五輪塔群がある。本塔はその中でも大型で形式も他のものと異なっている。

空輪部の先端を欠失するが、高さ一二八・五センチの花崗岩製である。地輪は高さ二六・五センチ、幅四一・五センチであるが、他の火・水輪と比較して小さく、石質も異なるので別物と考えられる。

図136　田打八幡神社の五輪塔

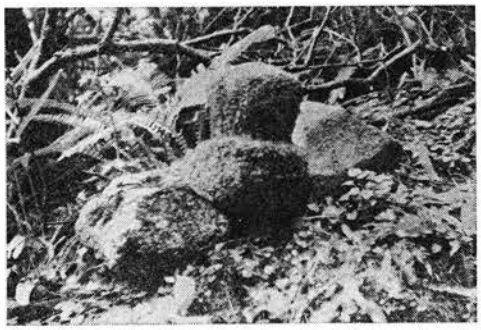

図137　寺町，箕口の五輪塔残欠

水輪は高さ四〇センチ、幅三九・五センチで一見古式に見えるやや角張った球形をしており、四面にバの四転を配している。

火輪は高さ三〇センチ、軒幅四五センチで、軒の厚さは中央部九センチ、軒は隅で大きく反っている。上端は一七・五センチで中央に深いお椀状の枘穴を穿っている。空風輪も異形で風輪は高さ一四・五センチ、幅二二・五センチで深鉢形であり、空輪は肩の張った形で高さ一九センチ、幅二一センチで丈が高い。

この種の空風輪は郡内では極めて少なく、世羅町大字寺町字箕口に一基、同本郷の西川の窪田堂の五輪塔残欠の中に二基、甲山町大

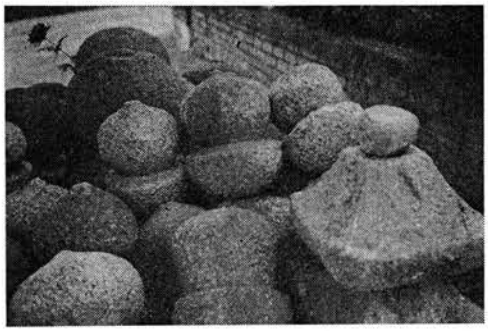

図138　西川，窪田堂の五輪塔残欠

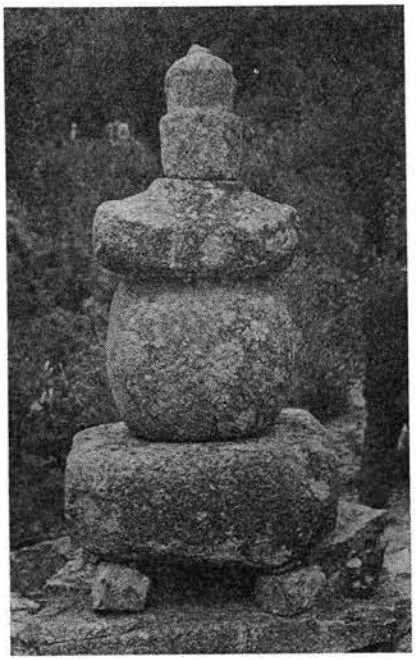

図140　(参考)青目寺の五輪塔（府中市本山町）

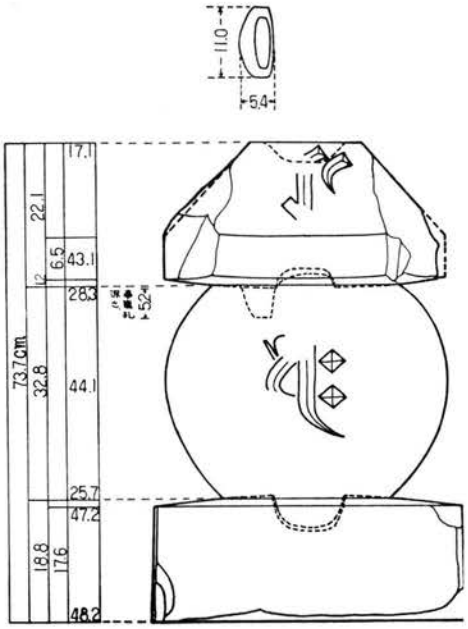

図139　(参考)城の鼻の五輪塔（三原市須波西町城ノ鼻　『三原市の石造物』より）

字伊尾の十二坊跡の中に一基（三四・五センチ）見られるが、いずれも大型である。

造立の時代は、水輪から見ると鎌倉前期に近い形式をしているが、火輪の軒端が高く、地輪も合せ物と見られるので決定が困難である。しかし、いずれにしても郡内では古式に属するものと考えられる。

3　下津屋十二坊跡田中家墓地脇の塔

甲山町大字伊尾

下津屋の出雲神社石段脇東側の林道を五〇メートルばかり北へ入ったところにある田中家の墓地脇に数基の五輪塔残欠にまじって図一四一のような大型の空風輪がある。

高さ三四・五センチの花崗岩製で、風輪部は高さ一五センチ、径二四センチあり、深鉢に近い形である。空輪部は高さ一九・五センチ、最大径一九センチ、下部の径一六センチある。

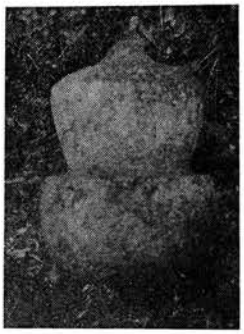

図141　下津屋，田中家墓地脇の塔

図142　同

本形式のものは、世羅町田打の八幡神社境内塔や、甲奴町宇賀の城洲沢家裏山塔、世羅町本郷の世羅高等学校脇の辻堂その他に少数見られるもので、荘内では古式に入るものと推定される。

4　五反平の五輪塔残欠

世羅町大字安田

安田の五反平の辻堂脇に、図一四三・一四四のような五輪塔残欠がある。いずれも花崗岩製のもので、地輪二、水輪一、火輪七、空

風輪一で、鎌倉時代中期前半から末期にかけてのものと推定される。

右端の塔は地輪は石質が水輪や火輪と異なり、枘穴もあることから別物と思われる。

水輪は石粒の荒い石質で、上端及び下端を水平に切った石臼形の異形のもので、この種のものは現在までに、世羅町大字田打の八幡神社境内の塔（一一〇頁参照）及び甲奴町大字宇賀の城、洲沢令二家裏山の塔（一一四頁参照）の三箇所からしか発見されていないもので、どっしりとした古式の塔である。高さ三四センチ、上端の径二一センチ、下端の径一八センチ、四方に種子がある。

図143　五反平の五輪塔残欠

火輪は水輪と同じ石質のもので高さ二五センチ、軒幅三九・五センチ、軒中央部の厚さは八センチと厚く、下端には枘穴がない。上端は幅一七センチで、中央に径一二センチ、深さ三・五センチのお椀形の大きな枘穴がある。

図一四三の中央の火輪のうち最上部のものは、高さ二一・五センチ、軒幅三四センチ、軒中央部の厚さ八センチ、上端の幅一五センチで石質が右の塔と酷似しており、上端の枘穴も同形のものである。造立は鎌倉中期に遡るものと思われる。尚、他の火輪及び地輪は石質の良好な大型のもので枘穴があり、鎌倉末期のものと思われ

図144　同

る。

本塔のある場所は、「戸張」と境が接しており、近くの辻堂には古式の一木造りの木像が七体伝わっており、この辺りが古くから開かれた祭政の中心地であったことをうかがわせる。

5 城の洲沢家裏山の五輪塔残欠

甲奴町大字宇賀

洲沢家裏山の台地に古い墓地があり、ここに花崗岩製の宝篋印塔二基、結晶石灰岩製の宝篋印塔三基、その外五輪塔が数基散在している。図一四六はその中の一基で地輪部は欠失しているが、どっしりとした臼型の水輪及び火輪、空風輪の残欠である。

水輪は高さ三二センチで上下端を水平に切ってあり、下端の中央部に小さな枘穴状のものがある。四方に梵字がある。

火輪は軒の各面をかなり損傷しており、当初の形ははっきりしない。高さ二〇センチ、軒幅三八センチ、上端の幅一六センチで、上部に径一〇センチの枘穴がある。各面に梵字を大きく陰刻している。

空風輪は両輪の境部で切損し、空輪部だけ残っている。高さ一七センチ、径二〇センチで、風輪部をあわせると三〇センチばかりのものであったと思われる。

図145 洲沢家裏山の石塔群

本塔は、世羅町大字田打の八幡神社境内塔に似ており、形式から見て鎌倉時代中期前半頃の造塔と推定される。

図一四七は同所にある石灰岩製のもので現高七一センチ、火輪部はかなり風化が進んでいる。空風輪は風化が甚しくて当初のものか定かでない。

基壇は同質のもので高さ八センチ、幅二七センチで繰り形のものである。地輪は高さ二二センチ、幅二四・五センチと丈が高い、水輪は下すぼまりの壺型で高さ二三センチ、径二一・五センチである。火輪は高さ一八・五センチ、軒幅二一・五センチで風化が進み、当初の形がはっきりしない。時代は室町末期のものと思われる。

図一四八は同所にある石灰岩質の残欠群で、左端のものは高さ一

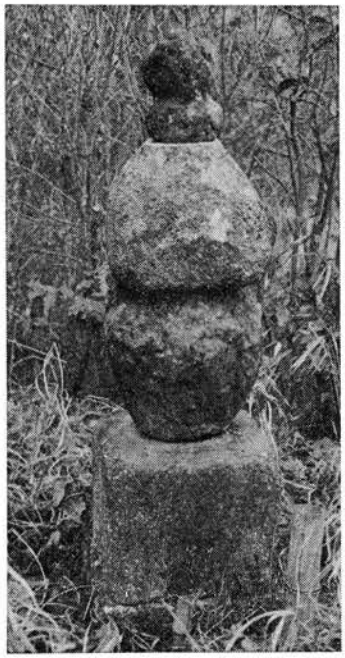

図147　同所の五輪塔（石灰岩製）

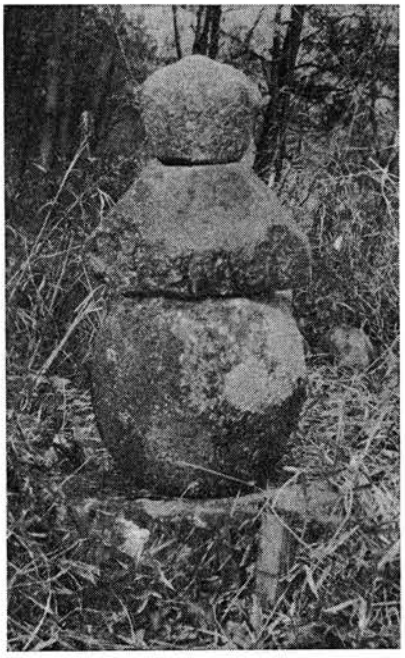

図146　同所の五輪塔

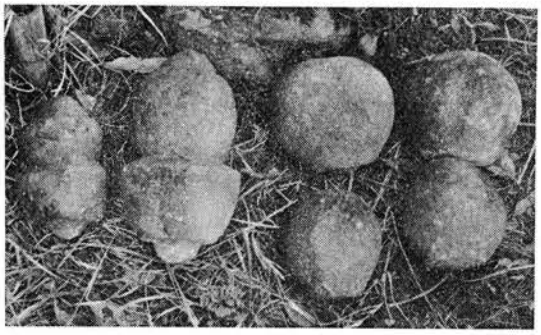

図148　同所の五輪塔残欠（石灰岩製）

八センチ、その右の大型の空風輪は高さ三四・五センチあり、かなり大型の五輪塔が存在したことがわかる。

右上部の二つの水輪は高さ一六センチ、径一九センチで、右側のものは上下端を水平に切っており、左側のものは下部に枘がある。これらのものは、いずれも室町末期のものと思われる。

6 安楽院墓地の五輪塔残欠

甲山町大字甲山

今高野山の子院の一つ安楽院の墓地には、近世の歴代僧侶の無縫塔に混って五基の五輪塔がある。

墓地に向って右手に二基、左手に三基あるが、図一五〇の拓本は

図149 安楽院墓地の五輪塔

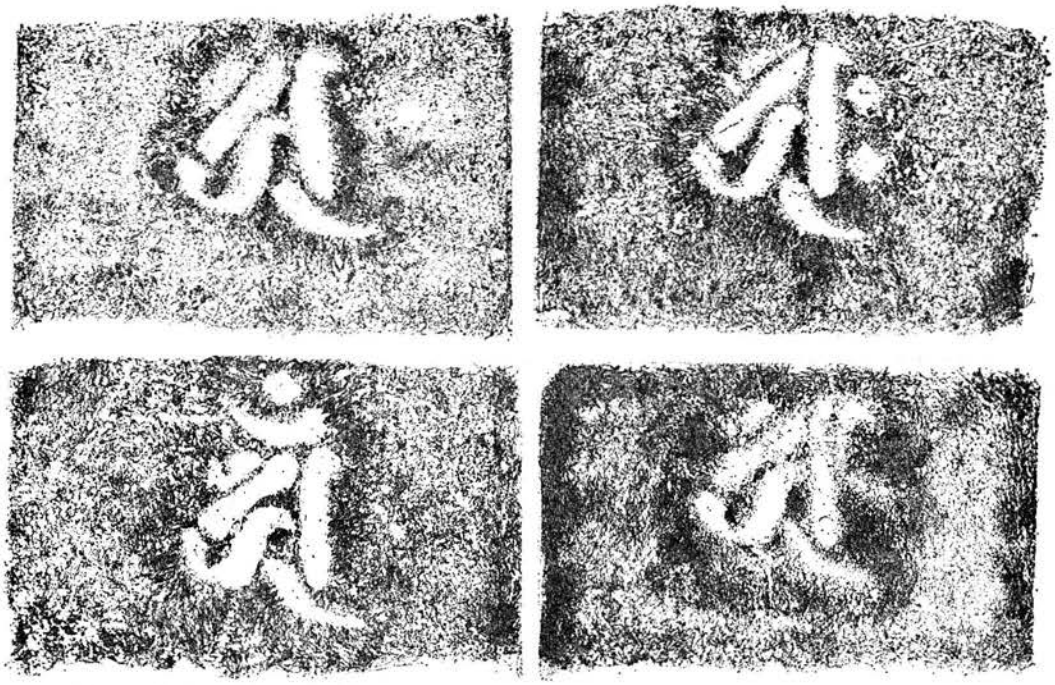

図150 同所の五輪塔（地輪拓影）

右手にある近世初頭の五輪塔の基壇に使われているもので、高さ約二三センチ、幅三八センチの地輪部である。上端には枘穴がなく、この上には枘のない水輪がのっていたものと思われる。

図151　安楽院墓地左側の五輪塔

種子は各面に高さ、幅とも約一五センチの大きさで、肉太く薬研彫でア字の四門を陰刻している。アの種子の両脇に銘の跡が見られるが定かでない。尚、底部は高低があり不整形で、高さ二二センチ位を地上に出し、あとは土中に埋めていたものと思われる。

図一五一は左側にある三基で、写真の右側のものは地輪の四方にア字の四門を薬研彫で陰刻している。図一五〇と比較すると種子が僅かに小ぶりで、上端に枘穴が設けられていることから、枘をもつ水輪がのっていたものと思われる。高さ約三〇センチ、幅は四〇センチ余りある。水輪には四方に種子があるが、小ぶりで下端に枘がないことから別物である。火輪は軒も厚く心反りで堂々としているが当初のものか不明である。

図152　(参考)松雲寺の五輪塔
(双三郡布野村上布野，高さ 189 センチ)
(銘　元亨二年□戌　五月一日)

風輪の残欠も火輪の枘穴と合わず別物と思われる。以上、多くの五輪塔が混在していて不明な点が多いが、図一五〇・一五一の二基の地輪は鎌倉時代中期頃から末期前半頃にかけての造立と思われる。共に地輪の四面に大きな種子をもつ塔として、荘内における代表と目されるものである。

尚、他の五輪塔は江戸初期から中期にかけてのもので、地輪の正面に「寛文十三年」、「為祐□□□」、「五月六日」とあるもの（高さ二〇・八センチ、幅二〇・八）や、「寛永八年」、「五月朔日」、「為……」とあるもの（高さ二五センチ、幅二八センチ）などがある。

安楽院本堂は昭和二八年類焼にあい、四〇年現在の大師堂脇に移築された。その際縁側の支柱の根石などに多数の五輪塔の笠などが使われていることが判明したが、そのまま移転して使われている。

7　赤屋堂風呂の五輪塔

甲山町大字赤屋

赤屋の堂風呂と呼ばれる辻堂の脇に十数基の五輪塔がある。図一五四はそのうちの完形と思われる塔で、高さ一〇二センチの花崗岩製である。

地輪の高さ二四センチ、上端の幅三五センチ、水輪は高さ二七・五センチ、最大幅三五センチで上端及び下端を水平に切っていて枘

図153　赤屋堂風呂の五輪塔群

はない。形は真円の上下端を切りとった形である。水輪は高さ二二センチ、軒の幅三二・五センチ、軒中央の厚さ七・五センチで、厚手である。反りは力強く反っていて、屋根の傾斜は隅で強く反っている。風輪は高さ一一センチ、幅は二一センチで深鉢形である。空輪は高さ一七センチ、最大幅一八・五センチで宝珠形である。時代は鎌倉時代中期のものと思われる。尚、各輪部には種子・銘字が見られない。

堂風呂周辺には十基ばかりの五輪塔があり、いずれも鎌倉時代から南北朝時代にかけての形式を有しており、赤屋地区では古式の方に属する。

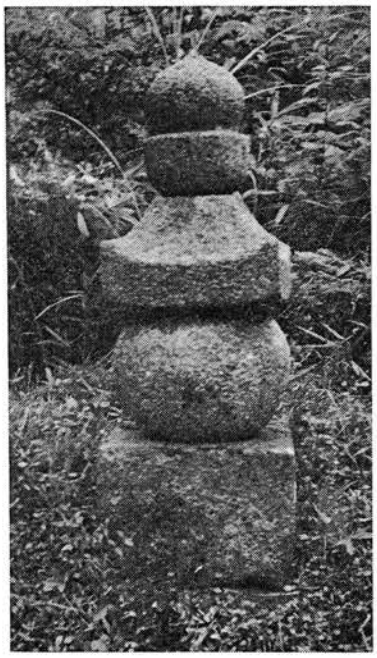

図154　同所の五輪塔

8　井折の住宅上の五輪塔残欠

世羅町大字井折

世羅町井折地区の町営住宅上にある辻堂脇に宝篋印塔の基礎や五輪塔と共に梵字のしっかりした地輪が一基ある。

図155　井折，住宅上の石塔

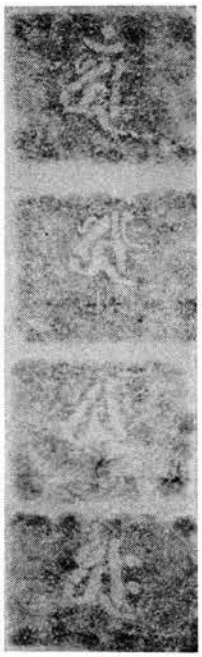

図156 同所の地輪拓影

高さ二八センチ、幅三七センチの花崗岩製で、四面にア字の四門が大きく薬研彫りされている。この辺りの地名を「戸の敷」と呼んでおり、中世何かの遺構があった所と思われる。尚、宝篋印塔は二段式の基礎のもので、室町初期を下らぬものである。

9 明覚寺墓地の五輪塔

甲山町大字赤屋

赤屋延木谷の明覚寺跡の墓地には、虎・少将の墓という伝説をもつ大型の宝篋印塔（前述、五三～五六頁）を中心にして、五輪塔が残欠を含めて約二〇基ばかり集められている。中でも二基の宝篋印塔の間にある四基の五輪塔はその中心をなすもので、中央の二基は水輪の下端がすぼまった形の鎌倉末期から南北朝時代にかけての様式をもち、地輪も両端のものに比較して背が高い。

図一五七は高さ八六センチで、地輪は高さ一八センチ、幅三五・五センチであるが、底部は不整形で高低があり、本来は何センチか地中に埋められていたもので、当初の高さは更に低くなる。水輪は高さ二五センチ、幅三一・五センチで、真円の上下端を水平に切った形で枘がない。上部の径は二一センチであるが、この中心に径一二センチ、深さ六センチの奉籠孔がある。火輪は高さ一八・五セン

図157 明覚寺跡墓地の五輪塔

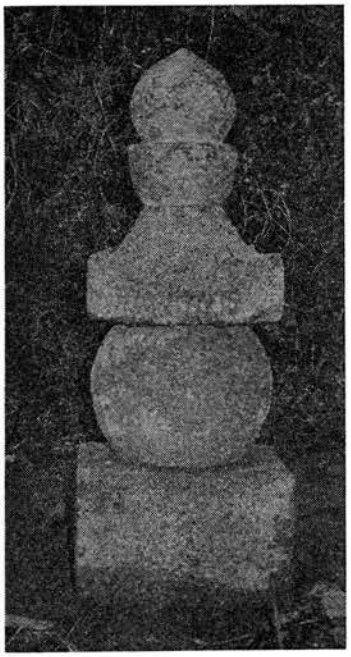

図158 同

チ、軒幅三一センチ、軒の中央部の厚さ六・五センチ、軒端での厚さは九センチあり、軒反りは隅で反りが大きい。上端の幅は一二・五センチである。風輪は高さ一〇センチ、幅一七センチで深鉢形であり、空輪は高さ一四・五センチ、幅一六センチで蓮の蕾のような形をしている。

各輪の四面には五大種子の四門を配している。字はやや小さいが薬研彫りである。

図一五八は、右の五輪塔と同形式、同時代のものと思われるもので、高さ九〇・三センチ、地輪は整形されていないが現高二〇センチ、幅三五センチ、水輪は高さ二四・三センチ、幅二八・五センチ上端の中央に径一一センチ、深さ五センチの奉籠孔がある。火輪は高さ一八・五センチ、軒幅三一センチ、軒中央部の厚さ六センチ、軒端での厚さ九センチである。風輪は高さ一〇・五センチ、幅一一センチ、空輪は高さ一六センチ、幅一七センチで各輪の四面に種子が陰刻されている。刻銘は見られないが形式から見て鎌倉中〜末期の造立と思われる。

10　黒渕の金福寺跡の五輪塔群

世羅町大字黒渕

黒渕の獅子田、清水家の裏山に金福寺跡と呼ばれるところがあ

図159　黒渕の金福寺跡の五輪塔群

図160 同所の五輪塔

図161 同所の宝篋印塔

り、山林中に宝篋印塔一基（高さ八七センチ）と五〇基ばかりの五輪塔が累々と立っている。荘内でもこれほど多数の五輪塔が一箇所に存在するのは珍らしく、この地に相当栄えた豪族がいたものと推定される。形式的には鎌倉時代から室町時代初期にかけての造立と推定されるもので、黒渕地頭三善氏関係のものと推測される。

11 万福寺跡の五輪塔群

世羅町大字堀越

堀越の万福寺跡の西側の山林中に、自然石で方形に築かれた墓域があり、ここに地輪八、水輪二二、火輪一五、空風輪一〇、石仏二、宝篋印塔の笠一が集められている。

水輪・火輪にくらべ地輪・空風輪が少ないのは、後世何かに転用されたのであろうか。水輪には大型のものがかなりある。造立は鎌倉末期から室町中期にかけてのものと思われる。

この一群から一五メートルばかり離れた位置に、図一六四のような地輪の正面に蓮華座を刻出し、上部に阿弥陀如来坐像（カ）を彫出したものが二基ある。高さ二〇・五センチ、幅二八・二センチで二基とも同大である。上部に径六センチ、深さ二センチの枘穴がある。像高一六センチで、像の周囲を約一・八センチ彫り下げて尊容が浮き上るように刻出している。この形式のものは、三原市の大善寺の宝篋印塔の塔身に見られる（『三原市の石造物』第一〇五図）。造立の時代は室町期であろう。尚、脇には写真のような石仏（右、高さ六〇センチ、

図162　万福寺跡の五輪塔群

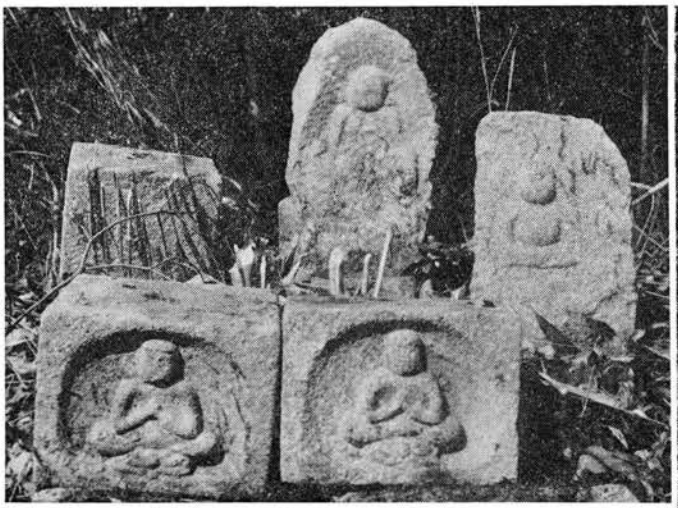

図164　地輪(カ)に尊像を彫出したもの

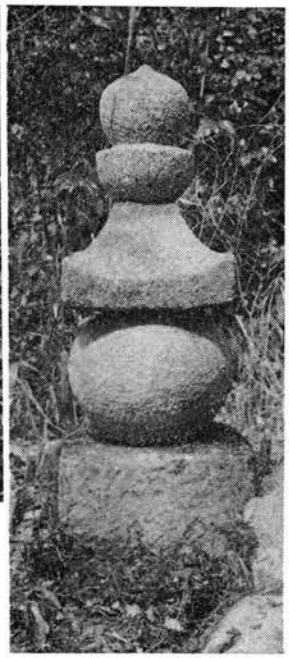

図163　同所の五輪塔

左、高さ五〇センチ）が二体立っている。五輪塔の地輪に仏像を刻出したものは、世羅町大字津口の定光地墓地の塔（享禄二年銘）を除いて本塔だけである。

12 万福寺跡大仙社脇の五輪塔

世羅町大字堀越

堀越の万福寺跡奥の大仙社脇に、図一六五の五輪塔が板碑と並んで立っている。全高八七・五センチの花崗岩製で、地輪は高さ二六センチ、幅は上端で三〇・五センチである。

水輪は高さ二二・五センチで、径は最大四〇センチ、球は幾分肩張りの傾向があり、上端は水平に切り、下端には枘を造り出している。

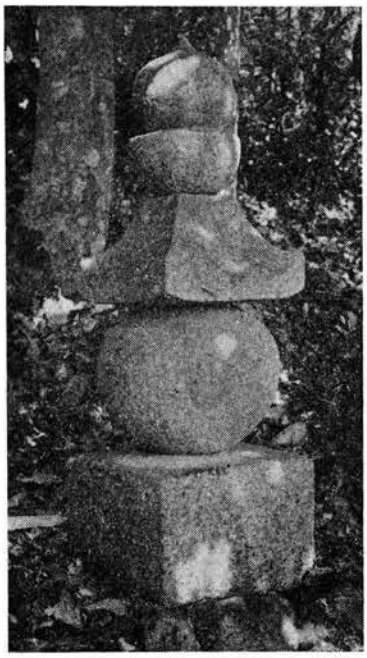

図165 万福寺跡大仙社脇の五輪塔

火輪は高さ一七センチ、軒は中央の厚さ四・七センチと薄く、両端では七センチある。反りは両端において急に上った傾向がある。風輪は高さ八・五センチ、最大径一六センチで、形は半球形に近い。空輪は高さ一四センチ、最大径一四センチである。

梵字は各輪四面に五大種子の四門が刻まれている。地輪のアーの左右に銘文が陰刻されているが、彫りが浅くて定かでないが、僅かに、右側に「為志□□……」、左側に二行で「□□□（大字カ）年、□月日」の字が見える。形式から見て室町初期の造立と思われる。

13 久代谷薬師堂の五輪塔群

甲山町大字東上原

東上原上谷に久代谷と呼ばれる谷間があり、背後に薬師堂がある。五輪塔は堂の周囲に数十基並んでおり壮観である。もとは周辺にあったものを後世になって現在地に移転したもので、地輪や空風輪の失われているものが多い。

図一六六はその中の一部であるが、各輪は多少入れかわったものもあるかも知れない。この写真の左から二番目のものは、ここにある五輪塔の中で最大のもので、当初からの完存の塔と思われる。全高一二三センチ、地輪の高さ三三センチ、幅四六センチで、比較的背が低い。

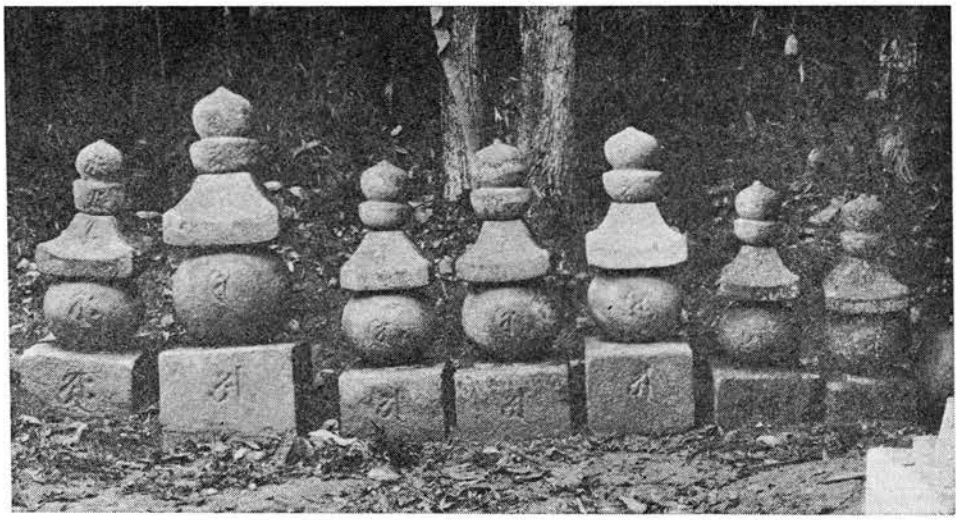

図166　久代谷，薬師堂の五輪塔群

水輪は高さ三四センチ、径四二センチのほぼ球形で、上下端を水平に切っており曲線に張りがある。火輪は高さ二五センチ、軒幅四〇・五センチ、軒中央の厚さ九センチで軒反りは美しく力強くなっている。風輪は深鉢形で高さ一二センチ、径二二センチ、空輪は蓮の蕾のような形で高さ一七・五センチ、径一九・五センチである。各輪の四方に五輪塔の種子が薬研彫で刻まれている。形式から見て鎌倉時代中期から末期にかけてのものと思われる。

図一六七・一六八は全高一〇四センチ、地輪の正面に梵字をはさんで左右に刻銘のあるものである。向って右手に「暦応二年二月五日」、左手に「勝(カ)□(念カ)阿弥陀佛」とあるもので地輪の高さ二八センチ幅三六・五センチで、やや背が高い。各輪は当初のものか不明であるが、水輪は高くて下へすぼまり、火輪の傾斜は急で隅棟も強く反

図167　久代谷の暦応年号の塔

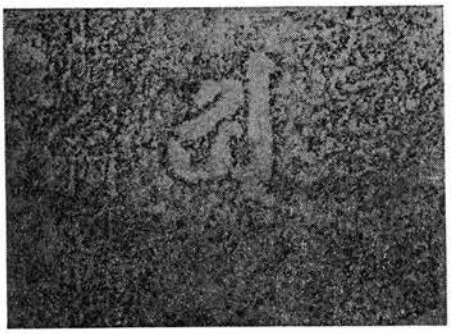

図168 暦応年号の塔（地輪拓影）

っている。空輪は宝珠形で下部がかなりすぼまっている。風輪はやや深鉢に近い半球形であり、各輪の正面にのみ大日の報身真言ア・ビ・ラ・ウーン・ケンの種子を配している。

図一六九・一七〇は水輪上部の奉籠孔を撮影したもので、図一七〇は枘穴の中心に径一二センチ、深さ七センチの穴をあけており、図一六九は水輪の上下端を水平に切ったもので、上部に径一三センチ、深さ三センチの穴をあけている。

図一六六の左端のものは全高一〇二センチ、地輪は高さ二五センチ、幅四〇センチ、水輪は真円形の上下端を切った形で高さ二七・三センチ、径三六センチ、火輪は軒幅三四・七センチで、屋根の傾斜は急で隅で反っている。軒中央の厚さ七センチ、軒の隅での高さ八センチ、風輪は深鉢形で高さ一一・五センチ、径一八センチ、空輪は高さ一五・五センチ、径一六センチで、梵字は四面に五大種字の四門が刻されている。造立は鎌倉時代中期頃と思われる。

図169 水輪上部の奉籠孔

久代谷の五輪塔群は、高野山文書に記載されている雑掌久代定渕や良信（了信）等、久代一族に関係するものと推定され、付近には久代城と呼ばれる古城跡も存在している。

14 十二坊跡の五輪塔

甲山町大字伊尾

伊尾の下津屋十二坊跡の背後の山に、経塚風に築かれた円墳上に他の宝篋印塔・五輪塔と共に並立している。

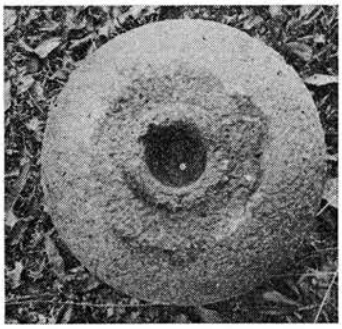

図170 同

高さ一二九センチの花崗岩製で、傍に切石の基壇の一部が残っている。地輪はやや高く高さ三七センチ、幅四八・五センチで、四面は素面である。

水輪は下へすぼまった形で高さ四〇・五センチ、最大径四三センチある。上端及び下端に枘があり、上端の枘半面に縦七・五センチ、横一四・五センチ、深さ四・六センチの長方形の奉籠孔があり、火輪の下部で覆うようになっている。

火輪は高さ二四センチ、軒幅四三センチ、軒中央の厚さ七・八センチで隅で強く反っている。空輪は宝珠形で高さ一五センチ、径一九センチで、風輪は半球形で高さ一一センチ、径二一センチあり、形式から見て鎌倉時代末期から南北朝時代の造立と思われる。

尚、十二坊跡一帯は鎌倉時代から室町時代にかけての五輪塔の残欠が数多く散乱しており、桑原方の地頭氏寺があったことを窺わせている。

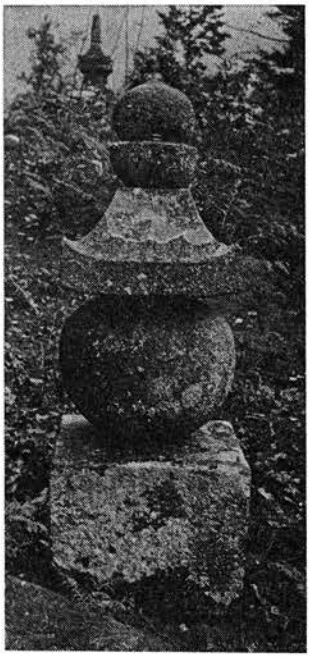

図171　下津屋，十二坊跡の五輪塔

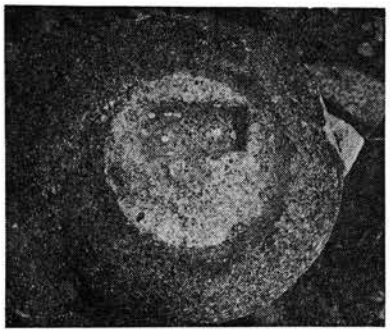

図172　同（水輪上面）

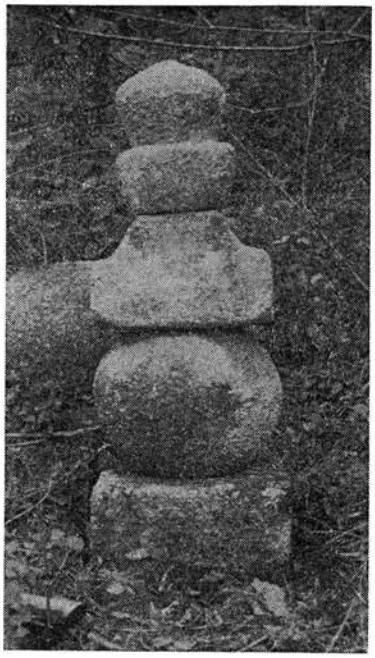

図173　下津屋十二坊跡，権現山新墓下の五輪塔

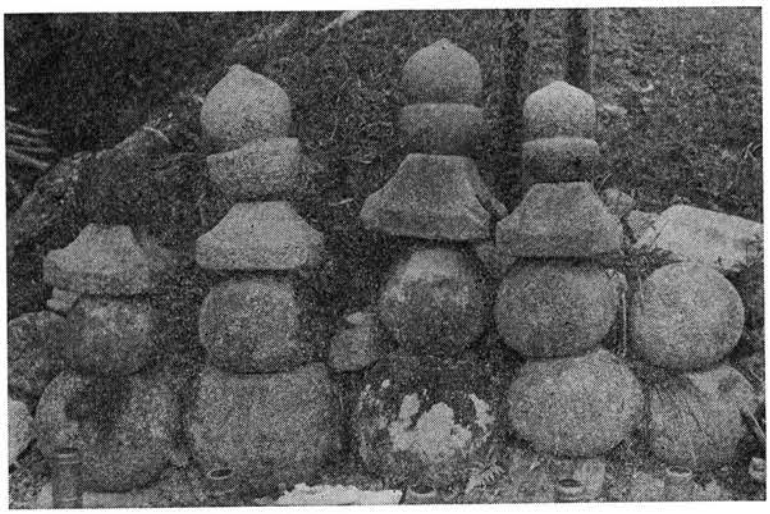

図174 下津屋十二坊跡，岡田実家裏の五輪塔

15 福仙寺跡墓地の五輪塔

甲山町大字別迫

別迫播磨の福仙寺跡墓地に、宝篋印塔や石仏とともに写真のような五輪塔が四基ある。

そのうちの一基は、全高八七センチの花崗岩製で、地輪は高さ二三センチ、幅は上端三〇・五センチ、下端三〇・二センチで、上面は側端部に向けてかなり傾斜している。水輪は高さ二三・五センチ、最大幅二七センチで、上端下端は水平に切っており、真丸形である。火輪は高さ一八センチ、軒幅二七・五センチ、軒中央の厚さ五・七側端の厚さ六センチで、軒反りも美しく屋根の傾斜はゆったりとしている。風輪は高さ九・五センチ、幅一六センチ、空輪は高さ一三センチ、最大幅一四・五センチで宝珠形である。

これらの石塔は別迫播磨地区にある五輪塔の中でも古い時期に属するもので、高さはそれぞれ八九センチ、八九センチ、九〇センチ等、三尺塔として建立されたものであろう。時代は形式から見て鎌倉末期から南北朝期にかけての造塔と思われる。尚、各輪に種子・銘は見あたらない。

図175　福仙寺跡墓地の五輪塔

16　城の秋坂谷の五輪塔

甲奴町大字宇賀

宇賀の城地区秋坂谷の横山宅脇にあり、石垣で築いた方形の基壇の中央部に一基ある。高さ七三センチの花崗岩製で石質もよく当初

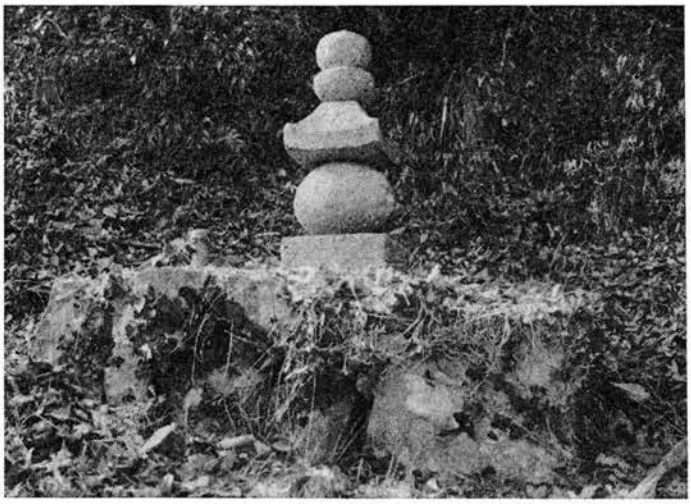

図176　城の秋坂谷の五輪塔

からのものと思われる。

地輪は高さ一八センチ、幅二六センチでやや低い。水輪は高さ二〇センチ、径二四センチでやや横に張り出した形である。火輪は高さ一四センチ、軒幅二三・五センチ、軒中央の厚さ四センチで軒反りが美しい。風輪は高さ八・五センチ、径一五センチ、空輪は高さ一一・五センチ、径一三センチである。

本塔は形式から見て鎌倉末期から南北朝期にかけての造立と思われる。地元では祖霊の墓といわれ宮迫家で供養されてきており、この谷の開発名主級の墓と推定される。

17 高山の五輪塔

甲奴町大字宇賀

宇賀の高山の毘沙門堂近くに写真のような五輪塔がある。高さはいずれも八〇センチばかりの花崗岩製のもので、地輪はやや高い。水輪は下脹れのものと、肩の張った壺形のものと二通りある。火輪は心反りである。風輪は半球形に近く、空輪は宝珠形に近い。

尚、脇には結晶石灰岩製の五輪塔もある。

図177 高山の五輪塔

18　善法寺の五輪塔

世羅町大字賀茂

賀茂の善法寺の参道脇に、宝篋印塔や五輪塔・石仏と共に並立している（前述、七五・七六頁）もので、高さ一六一・五センチの花崗岩製である。地輪は高さ五三センチ、幅五一センチと方形に近く四面は素面である。

水輪は高さ四一センチ、径五三センチと大きく、火輪や地輪より外に張り出ておりつり合っていない。火輪は高さ三〇センチ、軒幅四三・五センチで軒反りも急であり隅で大きく反っている。

風輪は高さ一五センチ、径二八センチで半球形をしている。空輪は高さ二二センチ、径二五・五センチで先端部がやや突出している。

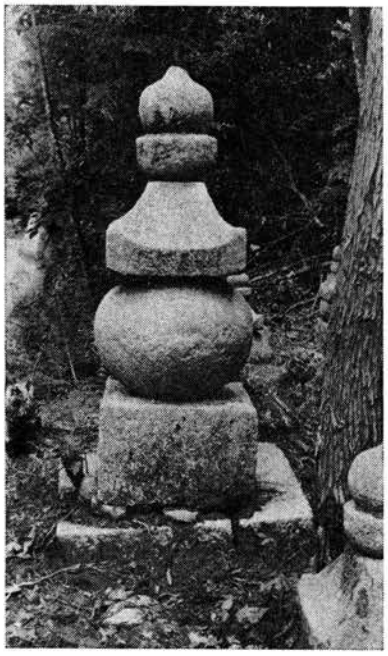

図178　善法寺の五輪塔

この塔は郡内第二位の大きさであるが、元は境内の二箇所に分散していたものを組み合わせたものでつり合いも悪く、当初の形ではないであろう。形式からみて室町時代のものと思われる。

19　永安寺跡の五輪塔群

世羅町大字中原

中原の永安寺山の山麓の道の脇に、多くの古石塔が散在している。地輪二三、水輪五〇、火輪三八、空風輪二八基を数え、元は五〇基以上の五輪塔があったことを物語っている。その他、宝篋印塔二基の残欠があり、一石五輪塔も一基ある。また二仏或は三仏を陽刻した石仏も見られ、形式から見て鎌倉末期から南北朝期・室町期に至る造立と推定される。

当初からここにあった物以外に周辺から集められたものもあると思われるが、いずれにしても当時を知る手がかりとなる古石塔として貴重である。

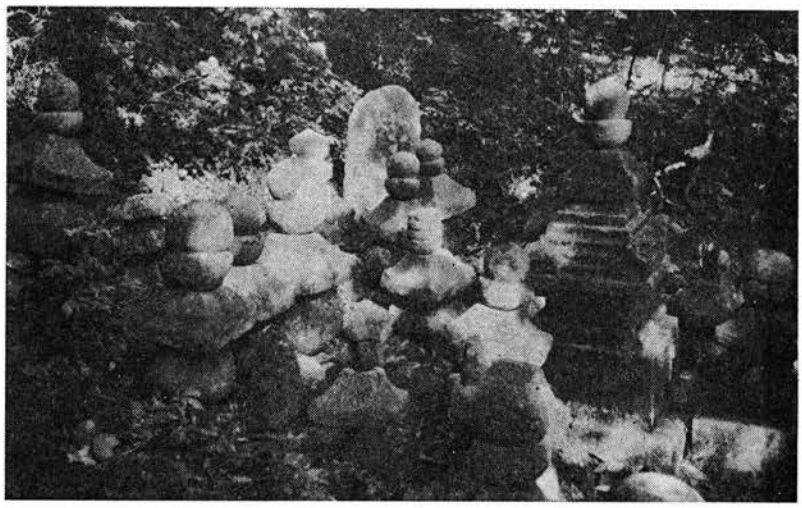

図179 永安寺跡の石塔群

20 柳原家上の五輪塔残欠

世羅町大字寺町

赤子の泣き声がすると言い伝える寺町の「目代」と呼ぶ水田の入口にあったものを柳原家上の山麓に移したものである。

水輪の側面に三箇の回形の輪郭を並列的に刻したもので、中央のものは縦六・五センチ、横四センチ、奥行七・五センチ、左右のものは大体同形であるが高さがやや低い。最大径四四センチの水輪で、上下にそれぞれ径九・五センチの枘を刻出しており、本来これに組する基礎や笠があったことがわかり、現在欠失しているのが誠に残念である。

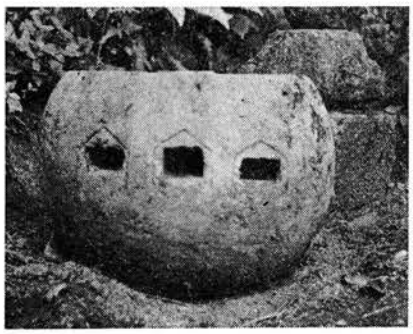

図180 柳原家上の五輪塔残欠

この水輪以外にも周辺には多くの五輪塔の残欠が散在しているが、すぐ隣家の升谷家付近は寺院跡と言われており、いつの世にか山津波で崩れたものと伝える。同家脇には鎌倉時代から室町時代にかけての大型の五輪塔が累々と集められている。また畑の脇に宝篋印塔の笠や大型の相輪が埋っているところもある。

「目代」という地名や多数の古石塔から推して、この付近に荘園の役人級の豪族が居住していたことをうかがわせる。

21　重永の宮ケ森の五輪塔群

世羅町大字重永

重永の宮ケ森の栗政家の墓地には、花崗岩製の五輪塔がたくさんある。地輪一二、水輪一七、火輪一七、空風輪二〇基で、元来二〇基以上の五輪塔がこの地に存在したことを物語っている。

また近くの金尾家の竹林中にも数基分の五輪塔残欠があり、この付近には中世名主級の者が居たことがうかがわれる。石塔の形式から見て、これらの五輪塔は鎌倉時代末期から室町時代にかけての造立と推定される。

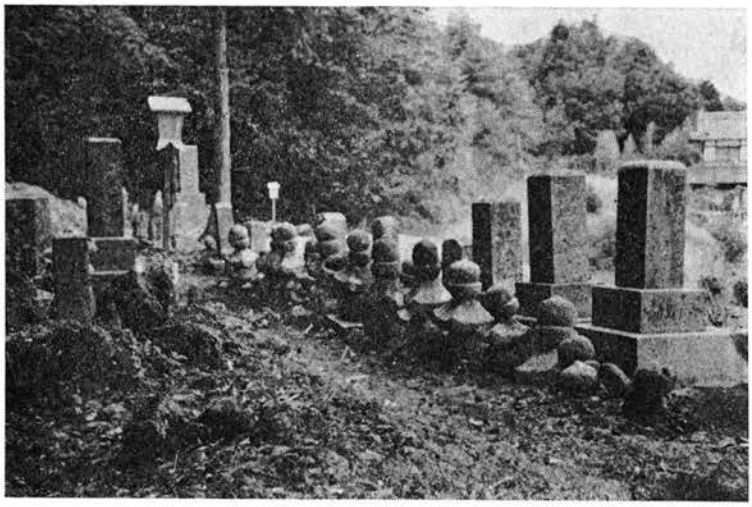

図181　宮ケ森の五輪塔群

22 高橋家脇の五輪塔残欠

世羅町大字本郷

本郷の釜田地区、池田に源を発する手縄川が国道一八四号線ぞいに流れ下って、太田盆地の開けるあたり、東側高台の突端に高橋家

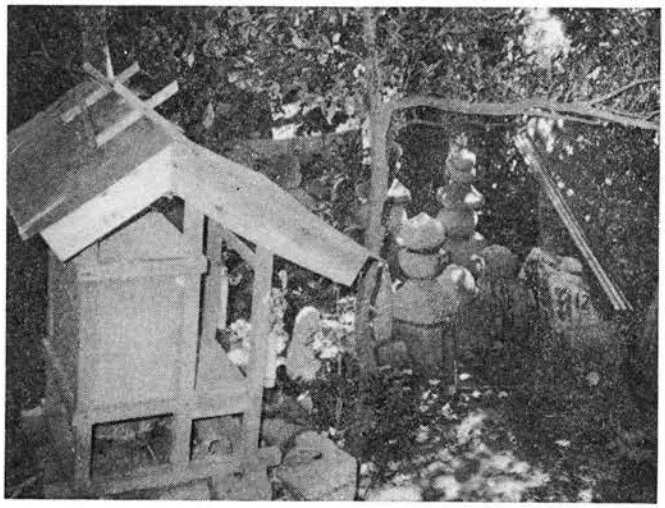

図182 高橋家脇の五輪塔残欠

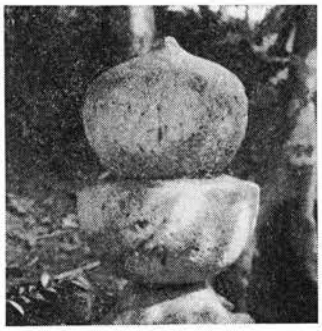

図183 同（空風輪）

（屋号井中）がある。周囲に空堀と土塁の遺構をとどめている。

五輪塔は高橋家の西脇の屋敷神祠の前に五、六基分の残欠があり更にそこより落下したものと思われる水輪などが数個、旧道脇にある。

この中には、四面に梵字を陰刻した鎌倉期と思われる空風輪も混っている。風輪は高さ一五センチ、幅二六センチで半月形をしており、空輪は高さ一九センチ、幅二二センチで宝珠形をしていて下部の切れ込みが深い。下部の枘は径七センチ、高さ二センチで、これをもとに各輪を想像するとかなり大型の五輪塔となり、地頭級の造立と思われる。中世の屋敷跡と共に当時を物語る石塔として貴重である。

23　長寿椿の五輪塔群

世羅西町大字山中福田

この地は、文政三年の「国郡志書出帳」に記載のある「本郷溝熊谷の内加世義谷」にあたる。山中福田、加世義谷の長寿椿と呼ばれる大きな椿の木のある水田の中の台地に、二基の宝篋印塔の笠と共に二〇基ばかりの五輪塔がある。

長寿椿から向い約三〇〇メートルの所に空堀をめぐらした屋敷跡があり、この石塔群は山中郷溝熊に住した荘官級の墓と推定される。

図184　長寿椿の五輪塔群

図185　同

また、この屋敷地の西方一〇〇メートルの地点には鉄滓の出土するところがあり、中世ここで製鉄が行われていたことがうかがえる。

24 中迫こうげの五輪塔群

世羅西町大字長田

長田中村の中迫地区、梶田家の前方に「こうげ」と呼ばれる台地があり、台地上に約三〇基の五輪塔が散在している。また近くの松俵家脇には花崗岩製の宝篋印塔（塔身欠）一基と五輪塔残欠がある。

図186 中迫こうげの五輪塔群

梶田家の屋号を鍛冶屋と呼び、近くに水量の豊かな池を持っている。こうげと呼ばれる台地上には鉄滓の出土するところがあり、中世この地で製鉄を業とした者がいた事を物語っている。これらの石塔群は、形式から見て鎌倉末期から室町時代にかけての造立と思われ、この地はかなり古くから開かれていたことが明らかである。

因に、建久元年（一一九〇）の「僧鑁阿置文」中に「大田御庄両郷田公事勤否次第事」として、村々別作田の中に「横坂ノ福田長田」と記載されている地は、当地と比定される。

25 窪田堂付近の五輪塔残欠

世羅町大字本郷

本郷の窪田堂は、世羅高等学校西の三叉路にあり、堂脇に多数の五輪塔の残欠が集められている。地輪二、水輪八、火輪六、空風輪一二、宝篋印塔の九輪の残欠一で、これらの石塔は西方の字西福寺の水田中より出土したものと言われている。また小森さんと呼ぶ西福寺跡の東側にも、古石塔の残欠を集めた小高い丘がある。

そして世羅高の西隣り、修善院の旧跡と伝える周りを水田で取り

囲まれた小高い場所にも五輪塔の残欠がある（図一八八）。

これらの残欠は、いずれも鎌倉時代から南北朝期にかけての造立と推定される。

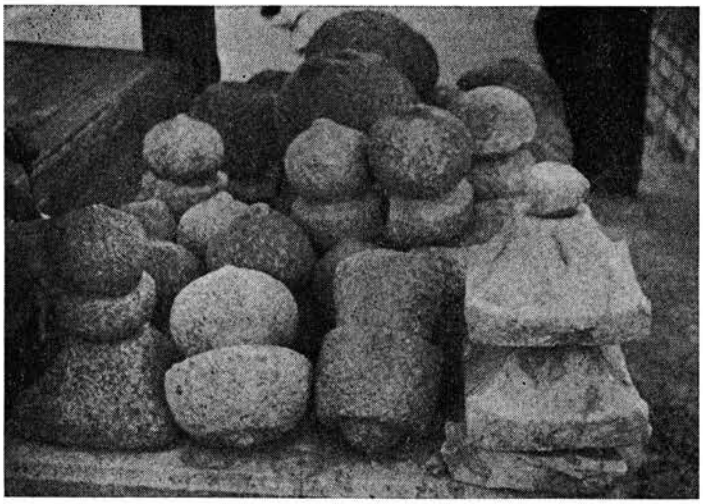

図187　窪田堂の五輪塔残欠

26　矢倉の五輪塔

世羅町大字西神崎

西神崎の矢倉の地は、寺町八幡神社の沖にあたり、この付近には「西福寺」「大膳」「新京」など、往古栄えた康徳寺を本寺とする天台宗の一二坊の遺名と思われる地名がある。

大膳・土居丸・矢倉は寺町に接しており、昔時は寺町に属していたと思われるが現在は西神崎分である。芦田川の流路の変化で大膳は南北に分断されている。「大膳」は大善寺（坊）の遺名と推定されるが現在は田のため寺院跡の確認はできていない。

「土居丸」は、中世の名主「土与丸」に比定したい。「矢倉」の地名のいわれは不明であるが、同所の河岸段丘辺に位置する増見家前には豊富な清水が湧出しており、周辺には民家も四戸建っている。

石造物は増見家の裏にあり、先祖代々、「九日に拝まぬと頭が痛む」と伝える花崗岩製の五輪塔の残欠がある。この外、同家の墓地や栗原家の墓地に四～五基の五輪塔や一石五輪塔がある。また矢倉の道路拡張工事の際にも一石五輪塔の残欠が出土している。

これら各地に散在する古石塔から見て、中世この地に名主級の者が居住していたと思われる。当時は河岸段丘下の冠水し易い水田の

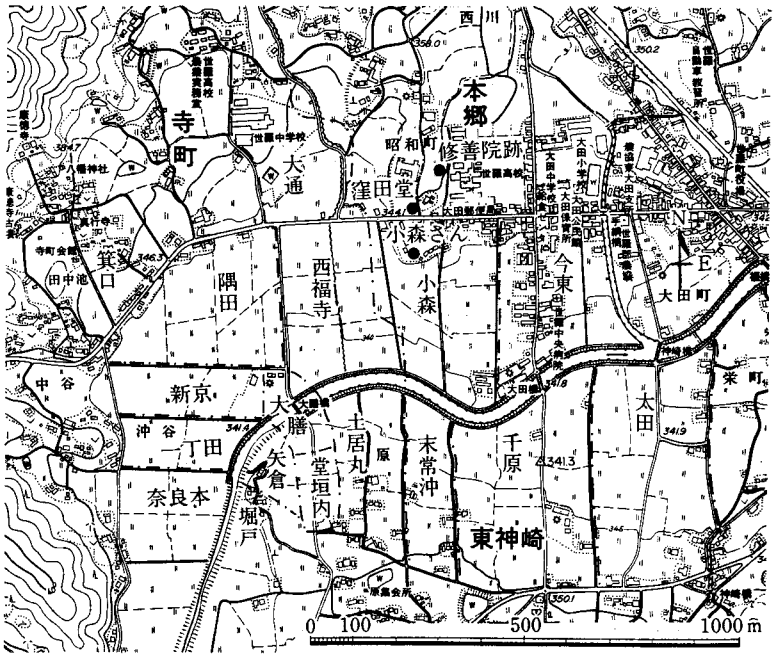

図188 本郷・寺町・神崎付近の略図

耕作と段丘の僅かな湧水に頼って水田の耕作を行い、併せて原野の中に畑作を営んでいたものと思われる。

27 横坂の矢原の五輪塔群

世羅西町大字長田

長田の横坂矢原地区は山中地頭より分立した横坂地頭の居たところと推定される。「高野山文書」（元徳二年十月三日付、備後国大田庄雑掌一分地頭和与状）に載せる地頭名「熊丸」また「智門」の名が現在も「熊丸」、「地守」という姓で存在している。また岡崎家（屋号土居）の裏山には山城遺構の残った竜王山城や天神社等があり、地頭の居所にふさわしいところである。

この土居屋敷の前方、川向うを「矢原」と呼び、その一角の半島状の台地に、多数の積石状の高まりがある。その上に花崗岩製五輪塔約五基と石灰岩製五輪塔数基が立っている。まだ地下にも若干埋まっていると思われる。

花崗岩製の一～二基は火輪の高さが低く、風空輪の様式から、鎌倉～南北朝期と推定され、石灰岩製のものは戦国期の造立と思われる。地頭の墓石としては、花崗岩製のものを考える。数は少ないが、墓地の景観は溝熊の長寿椿の五輪塔群と似ており、また横坂地区に他に五輪塔群の発見されていないことから、一応横坂地頭の墓地と想定したい。

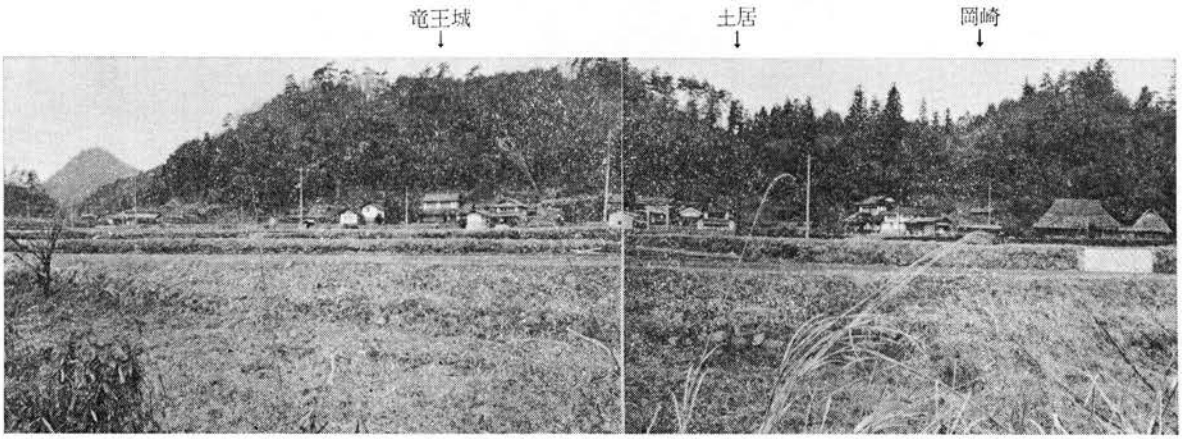

図189　横坂地区の景観

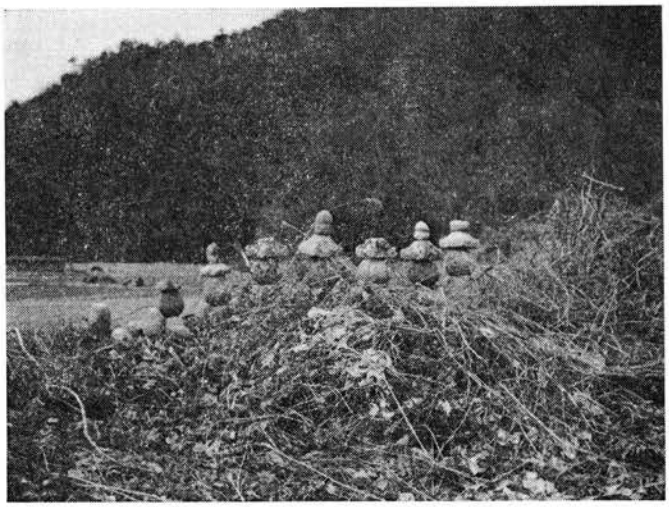

図190　横坂矢原の五輪塔群

28 定光地墓地の経塚塔

世羅町大字津口

津口の平野チエ氏宅（屋号定光地）より東三〇〇メートルの位置にある定光地谷の東山すそに、幅六・三メートル、奥行七・二メートル、高さ二・四五メートルの長方形の石囲いがあり、その中央部に高さ七〇センチ程の石積みがなされ、その上に本塔が建っている。

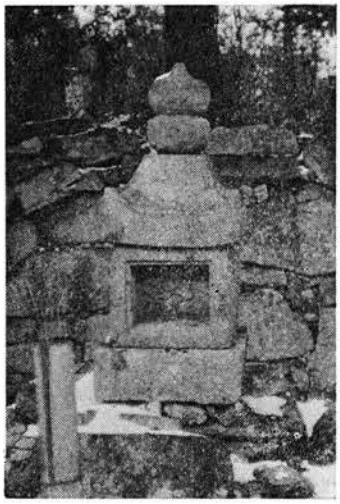

図191 定光地（平野氏）の経塚塔

図192 同（塔身部銘拓影）

全高一二五センチの花崗岩製で、五輪塔の水輪部が方形になっており、一見した形式は京都高山寺の如法経塔（『重要文化財14・建造物Ⅲ』No.一五八）に似ている。地輪は高さ二〇・五センチ、幅六〇・五センチで高さが低い。水輪は長方形で高さ四二・五センチ、幅は上下端五〇センチで内部を直方体にくり抜いている。輪郭は幅五～六センチで、更に一・八センチ幅の縁どりがある。奥壁に阿弥陀如来と思われる坐像を刻出している。

火輪は高さ二九センチ、軒幅五五センチ、軒中央の厚さ一四センチ、下端の反りは少ないが軒上部の反りは隅で強く反っている。風輪は高さ一四センチ、空輪は高さ二六センチで先端がかなり突出しており、各輪の四面には種子が陰刻されている。

水輪部（塔身）左の輪郭に「享禄二年十一月十日」の刻銘が見られる。石室前面の両端に小さな枘穴があり、元は木製の観音開きの扉があったと思われる。尚、平野氏は近世には割庄屋を務めていた。

29 文裁寺墓地の石灰岩製五輪塔

甲山町大字赤屋

赤屋の文裁寺墓地にある石灰岩製の小型の五輪塔で、右塔は高さ五七センチ、左塔は五七・五センチある。

右の塔は地輪の高さ一四センチ、幅一九センチ、水輪は高さ一七センチ、最大径二一・五センチのつぼ形のもので上下端に枘はない。火輪は高さ一〇・五センチ、軒幅一七センチ、風輪は高さ七センチ、径一二センチ、空輪は高さ一〇センチである。上部に径四・五センチの枘状のものがある。

左の塔は地輪の高さ一一・五センチ、幅一八センチと低く、水輪はつぼ形で高さ二〇センチ、径一九センチ、火輪は高さ九センチ、軒幅一七・五センチ、風輪は高さ七センチ、径一二センチ、空輪は高さ一〇センチ、径九・五センチである。尚、各輪に梵字はなく、造立は室町末期のものと思われる。

図193　文栽寺墓地の石灰岩製五輪塔

30　今高野山金剛寺墓地の五輪塔

甲山町大字甲山

今高野山護摩堂の裏手に金剛寺僧侶墓碑がある。本塔はその背後にあり、高さ九一センチの花崗岩製で、空風輪を欠失している。

基壇は高さ約三〇センチで中央に複弁の反花、隅にも大きく反花を刻出している。上端の幅三二センチある。

地輪は高さ二四センチ、幅二六・五センチで、次の銘文がある。

寛永□(四カ)年

図194　今高野山金剛寺墓地の五輪塔

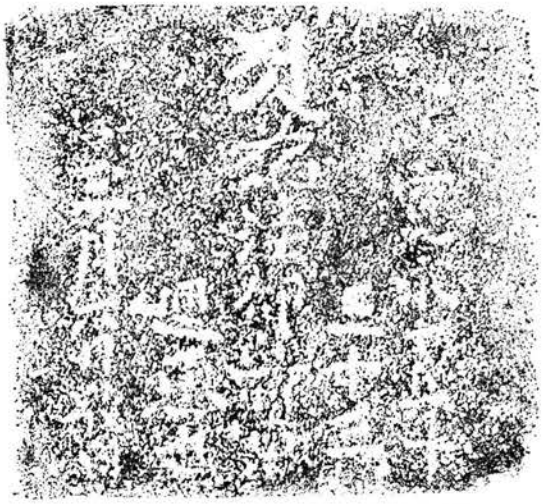

図195 同（地輪拓影）

三十三

為法印宥恵

廻忌也

三月六日敬白

水輪は高さ二二センチ、径二七センチで下ぶくれの形をしている。火輪は高さ一五センチ、軒幅二六センチ、軒中央の厚さ六・五センチある。上端の幅は一二センチで、上部に枘穴がある。なお、各輪の正面に梵字が陰刻されている。

(六)　一石五輪塔

一石で各輪を刻出した一石五輪塔は、荘内では室町時代の後期前半頃からと推定される。古式のものは地輪の背が低く方形に近い(No.2賀茂善法寺塔)。水輪は横にひしゃげた形で、火輪の軒の下端は側端部で僅かに反るだけで他の部分は水平である。

空風輪は径がほぼ同大であるが空輪部がやや高い。種子のあるものも見られるが小さく浅く陰刻してある。

時代の経過に伴って各輪の刻出が浅くなり、火輪の軒の側端部が高くなる傾向がある。地輪は長く伸びて、この面に法名・没年月日等が陰刻される場合がある(No.3川尻万年寺跡塔)。地輪の高いものは底部が整形されていないため、直接土中に建てられたものと思われる。

一石五輪塔の終末は江戸中期頃と思われる。この期のものには地輪の下端に枘があり、台石の上に置かれたものであることがわかる(No.24井折三上家墓地塔・No.11宇津戸旧延安家墓地塔)。江戸中期頃から一石五輪塔に代って板碑型の墓石が出現するようになり、一石五輪塔は姿を消していく。尚、江戸初期頃と思われる一石五輪塔の正面には、石仏が刻出されているものがある(No.8小世良農免道路脇塔外)。

表5　郡内の主要な一石五輪塔一覧表

No.	名称	所在地	高さ(地上高)(センチ)	備考
1	万福寺址五輪卒塔婆	世羅町大字堀越	一五〇	正平十二年銘の宝篋印塔の両脇にある。火輪部で二つに分かれる。
2	善法寺参道脇塔	世羅町大字賀茂	七四外	七四センチ・六八センチ・六六センチ外一塔。
3	万年寺跡塔	甲山町大字川尻	九七	□去□□□□禅定門。[天文廿]一壬子六月四日河尻住人林弥二郎尉□□外十六基
4	慈徳院墓地塔	世羅町大字重永	八二	正面に石仏を刻出。下部に刻銘の跡あり。
5	金藤家脇塔	甲山町大字赤屋	六八外	二基(六八センチ・六〇センチ)
6	新山塔	甲山町大字赤屋	六七	国正利明家山林中。
7	茶垣内塔	世羅町大字東神崎	六三・五	毛利繁夫家前。※No.6と同形式、他に五一センチのもの。
8	農免道路脇塔	甲山町大字小世良	六〇外	正面に石仏を刻出。他に一基あり。

No.	名称	所在地	高さ(地上高)(センチ)	備考
9	今高野山墓地塔	甲山町大字甲山	四六・五	正面に二体の石仏を並立させている。
10	箱の行旨家墓地塔	甲山町大字宇津戸	六〇	正面に石仏（立像）を刻出。
11	箱の延安家墓地塔	甲山町大字宇津戸	五六・五	他に一基（五六センチ）あり。下部に枘がある。
12	長尾の橘高家前塔	甲山町大字宇津戸	六四	他に一基（五六・五センチ）あり。
13	鳳林寺湯浅氏墓地塔	甲山町大字伊尾	七〇	一基。他に宝篋印塔五基。五輪塔あり。
14	鳳林寺墓地	甲山町大字伊尾		二石五輪塔二基。
15	近江堂黒杭墓地塔	世羅町大字山中福田	二九・五	二石五輪塔残欠。
16	照善寺塔	甲山町大字宇津戸	一二一	照善寺の前身円寿寺の僧「竜谷」の墓か。
17	時森谷辻堂塔	甲山町大字川尻		二石五輪塔一基（残欠）。
18	時森谷沖家脇塔	甲山町大字川尻	六八外	二石五輪塔六基。
19	井折三上家墓地塔	甲山町大字井折	六八	地□三常清禅定門、寛文三天、五月廿二日。
20	久伝家裏仏法寺谷塔	甲山町大字西上原	五九外	六基。
21	矢倉の塔	世羅町大字西神崎	三四	一基。室町末期。矢倉八三一番地。
22	影政の塔	甲山町大字西上原		五基。他に石仏四体あり。
23	西光寺跡の塔	甲山町大字別迫	五四	一基。他に五輪塔、石仏等あり。
24	三上家墓地の一石五輪塔	世羅町大字井折	六八	寛文三天の銘有り。
25	尾道屋の墓碑	甲山町大字甲山	一五三	貞享□年十月十八日逆修……の銘有り。
26	川尻久恵の板東家墓地	甲山町大字川尻	一〇四	宝暦四戌……大元廿六代坂東重左衛門……の銘有り。
27	寺町木船家前一石五輪塔	世羅町大字寺町	六二	一基。積み石組の上に有り。高さ二五センチの石仏浮刻あり。
28	小反田藤ン迫の塔	世羅町大字寺町	六〇外	二基。五輪塔も数基あり。
29	山下（屋号吉清）家墓地の塔	世羅町大字本郷		小型。石灰岩製五輪塔の中に一基混在。
30	重光墓地脇の塔	世羅町大字京光	三〇	二基。付近に五輪塔多数あり。
31	板壁の塔	世羅町大字東神崎	五〇・五外	

32	善昌庵墓地内の塔	世羅町大字安田		
33	清水堂内の塔	世羅町大字青水	五四外	三基。黒渕京丸堺の焼見堂より堂は移築したもの。五四センチ・四四センチなど。
34	栗原・増見家墓地の塔	世羅町大字西神崎	四九外	二基。

1　堀越万福寺跡の二石五輪塔（五輪卒都婆）

世羅町大字堀越

堀越の万福寺跡の正平十二年銘の宝篋印塔脇に、二基の花崗岩製の二石五輪塔が立っている。南側の一基は現高一五〇センチで、下部を地中に埋めている。地輪部は、下部は埋没しているが現高一〇八センチ、幅一九・三センチで、四面いっぱいに「南無阿弥陀佛」を陰刻している。水輪部は高さ一四・五センチ、最大幅一九・五センチ、火輪部は高さ一一センチ、軒幅二〇センチ、幅の中央の厚さ三・五センチ、風輪部の高さ六・五センチ、最大幅一三・三センチ、空輪部は高さ一〇センチ、最大幅一二・五センチで、梵字は見られない。他の一基も同大、同形式であるが、水輪部を欠損している。時代は宝篋印塔とほぼ同じ時期のものと思われる。

本塔は空風火輪で一石、水地輪が一石と二つに分かれるように、水輪の上部に径五・五センチ、高さ四・六センチの枘が出ており、火輪下部に径五・六センチの枘穴がある。

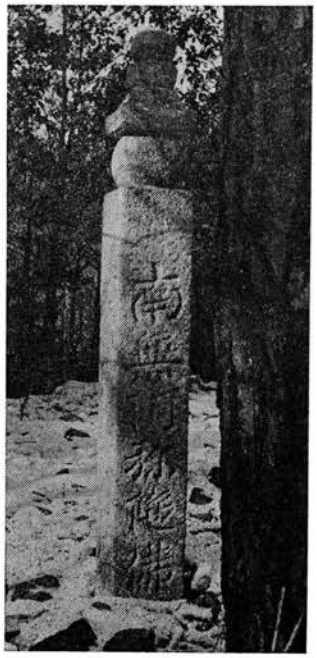

図196　万福寺跡の二石五輪塔（南塔）

図197　同（北塔）

2 時森谷の二石五輪塔

甲山町大字川尻

時森谷の沖家脇の山林中に一四基の五輪塔群がある。この中に六基の二石五輪塔がある。仮に二石五輪塔と呼ぶのは、上部の空風火輪を一石でつくり、下部の水地輪を一石で彫成しているからである。

図一九八の右の塔は高さ六八センチ、地輪は高さ一七センチ、幅二四センチと低い、水輪は高さ一四・五センチ、径二三センチで上部に径九センチ、深さ三・五センチの奉籠孔状の枘穴がある。

火輪は高さ一五・五センチ、軒幅二三・三センチ、軒中央部の厚さ五センチ、風輪は高さ八センチ、径一五・三センチ、空輪は高さ一一センチ、径一四センチある。なお火輪の下部に一センチ位の枘を刻出している。

左の塔は高さ六八・五センチで地輪は高さ一五・五センチ、幅二四センチ、水輪は高さ一六センチ、径一四・五センチで上部に同じような大きさの奉籠孔状の枘穴がある。火輪より上部は右の塔とほぼ同じである。

川尻の聖神社の板絵御刃刀の像の裏の墨書に、明応六年ごろ、「時守住人、大願主丹治朝臣道本……」（『広島県史古代中世資料編Ⅳ』所収、伝御刃刀之像裏面墨書銘）とあり、当時、時森に丹治氏の居住していたことがわかる。

図198 時森谷の二石五輪塔

沖家脇の五輪塔群から、約三〇〇メートル離れた毘沙門堂の脇にも、各輪に梵字の陰刻された二石五輪塔の上部が一基ある。

3　善法寺の一石五輪塔

世羅町大字賀茂

善法寺の参道脇の山林中に宝篋印塔及び五輪塔が多数集められており、その中に花崗岩製の一石五輪塔が四基混っている。

その一（図一九九）は大型五輪塔の脇にあるもので高さ七四センチ、地輪部の高さ二五センチ、幅二五センチの方形で、水輪部は高さ一三センチ、径二四センチである。

火輪部は高さ一六・五センチ、軒の幅二四センチ、風輪部の高さ七センチ、径一六センチ、空輪部は高さ一一センチ、径一五センチあり、各輪に梵字は見られない。

その二（図二〇〇）は、一の隣りにあり、高さ六六センチ、地輪部は高さ一九センチで、幅二一・五センチある。水輪部は高さ一一・五センチ、径二一センチある。風輪部は高さ六・五センチ、径一四・五センチ、空輪部は高さ一二センチ、径一三センチで、一と同形式で同時代のものと思われる。

両塔とも地輪の下部を整形しており、基壇の上に置かれていたものと思われる。造立の時代は室町時代後期頃と推定される。

その三（図二〇一）は、この隣りにあるもので、地輪の高さ三二センチ、幅一七センチ、水輪の高さ九センチ、径一六・五センチであ

図199　善法寺の一石五輪塔

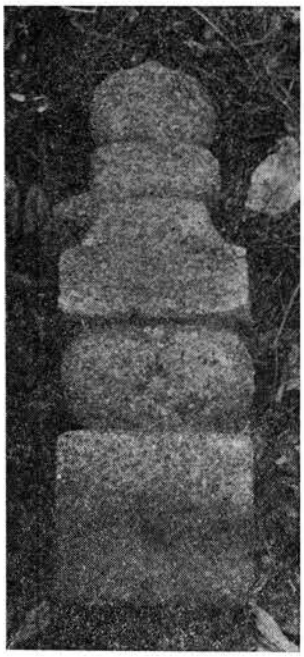

図200　同

図201　同

る。火輪は高さ一二センチ、軒幅一六・五センチ、軒の厚さ四センチである。風輪は高さ六・五センチ、径一三・五センチ、空輪は高さ一〇センチ、径一二・五センチで、一や二と比較して地輪が高く、しかも底が整形されていないため、直接土中につき立たせたものと思われる。造立は室町後期のものと思われる。

4 万年寺跡の一石五輪塔

甲山町大字川尻

三川ダムの小島に多数の中世の古石塔が集められている（後述、一六七頁）が、これはその中の一基である。全高九七センチの花崗岩製で、地輪の高さ四八センチ、幅二六センチ、水輪の高さ一五・五センチ、

図202 万年寺跡の一石五輪塔

図203 同（地輪拓影）

幅二六・五センチ、火輪の高さ一七センチ、幅二六センチ、風輪の高さ六センチ、幅一八・五センチ、空輪の高さ一〇・五センチ、幅一八・五センチである。各輪の四面に梵字が浅く陰刻され、地輪に刻銘がある。

□去□□□□□禅定門

ｷﾘｰ 天文廿一壬子六月四日

河尻住人林弥二郎尉□□

この種の塔が甲山町大字赤屋の久保に、花崗岩製で全高七三・五センチ、地輪の高さ三五センチ、水輪の高さ一一センチ、火輪の高さ九センチ、空風輪の高さ一八・七センチのものがある。この一石五輪塔は、三原市西町の大善寺の無縁墓の慶長十七年銘の一石五輪塔（『三原市の石造物』七一頁）と形式が似ているので、恐らく慶長前後の造立と推定される。

なお、林氏は川尻の地を領して、同地の松岡城及び赤城に在城したと言われている（『芸藩通志』『備後古城記』）。文明五年（一四七三）の「御頭文

帳」に「長禄二年（一四五八）林肥前就昭建立」（『世羅郡誌』）と記されており、川尻の聖神社旧蔵の棟札にも「当社、慶長年間再造の棟札に、林肥前就長とあり……」（『芸藩通志』巻百七）と記されており、本塔は、当時勢力のあった林氏一族の墓塔と思われる。なお、この外に一石五輪塔が残欠を含めて一六基ばかりが、他の塔と共に並んでいる。

5　慈徳院墓地の一石五輪塔

世羅町大字重永

重永の慈徳院墓地の歴代僧侶の無縫塔にまじって本塔がある。現高八一センチで五輪塔の地輪の上に立ててある。花崗岩製で、正面を火輪の軒の部分から地輪部にかけて平らにけずり、水輪部辺

図204　慈徳院墓地の一石五輪塔

図205　同

りに地蔵菩薩坐像を刻出している。

地輪部は高さ四六センチあり、三行にわたり銘文の跡が見られるが定かでない。室町後期から末期にかけての造立と思われる。

6　照善寺境内の一石五輪塔

甲山町大字宇津戸

照善寺の本堂裏にあり、高さ一二一センチの花崗岩製である。地輪の高さ四三センチ、幅は上端部二二センチ、下端部二三センチで底部は不整形である。水輪は高さ一三・五センチ、径二一・五センチ、火輪は高さ一五・五センチ、軒幅二一センチ、軒中央の厚さ五センチ、上端の幅一〇・五センチである。風輪は高さ六センチ、径一三センチ、空輪は高さ一三センチ、径一二センチである。各輪の正面に種子の痕跡が見られ、地輪部にも銘字の跡が見られ

るが、石質が荒く風化も進んでいるので定かでない。

照善寺の前身は、同寺裏山にある円寿山城主の菩提寺円寿寺で、本塔は開基竜谷（天正頃の人と伝う）の墓ではないかと思われる。

図206　照善寺境内の一石五輪塔

7　長尾の一石五輪塔

甲山町大字宇津戸

宇津戸の長尾、橘高高登家前方の竹林中に他の五輪塔と共にある。高さ六四センチの花崗岩製で、地輪の高さ現高二四センチ、幅一六センチ、水輪の高さ一〇・五センチ、最大径一五・五センチ、火輪の高さ一三センチ、軒幅一五・五センチ、風輪の高さ六センチ、径一二・五センチ、空輪の高さ九・五センチ、最大径一一・五センチである。銘文は定かでないが形式から見て近世初頭のものと思われる。尚、この石塔と同形式のものが宇津戸箱の旧延安家裏山の墓地に他の五輪塔と共に並立している（次項参照）。

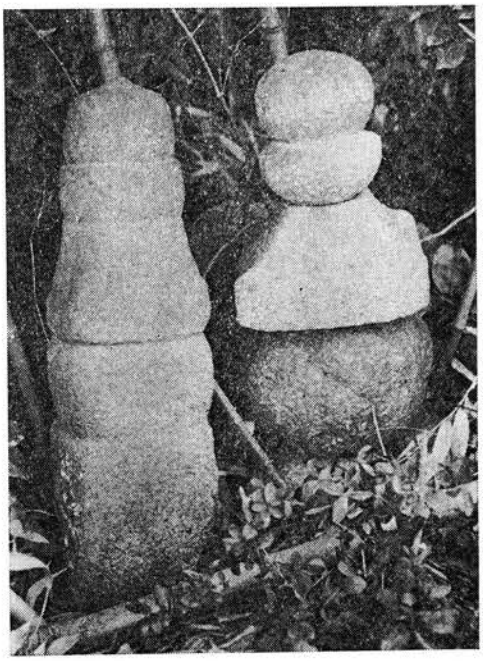

図207　長尾の一石五輪塔

8　箱の旧延安家墓地の一石五輪塔

甲山町大字宇津戸

宇津戸の箱、旧延安家のあった裏山は、中世の土豪の館であった所と推定され、その一画に五輪塔が十基ばかりと、二基の一石五輪塔がある。

このうちの一基は、江戸時代初期のものと思われるもので、地輪の下端を欠損しているが、現高五六・五センチで元は二尺塔として

図208　箱の旧延安家裏山の五輪塔群

造立されたものであろう。地輪の高さ二二センチ、幅一八・五センチ、水輪の高さ一〇・五センチ、幅一七・五センチ、火輪は高さ一二センチ、軒幅一七・五センチ、軒中央の幅四・三センチ、風輪は高さ六センチ、幅一三・五センチ、空輪は高さ九・五センチ、幅一二・五センチで、石質はあまり良質ではない。

他の一基は、室町時代の五輪塔群より少し離れた位置にあって現

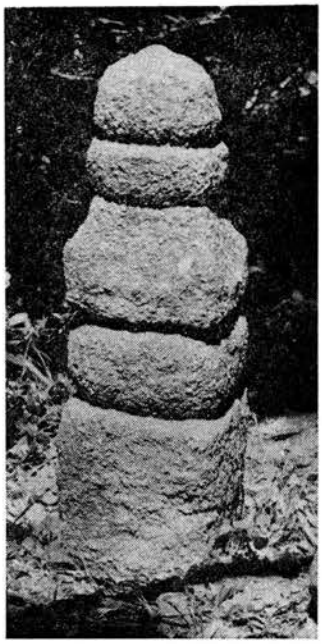

図209　同所の一石五輪塔（室町末期）

図210　同（江戸中期）

高五六センチ、地輪は高さ三六・五センチ、幅一八・五センチで底部の中央に径五・五センチ、高さ二センチの枘があり、この下に基礎があったものと推定される。水輪は高さ六・五センチ、幅一八センチで、ほとんど球形を失い、線刻で水輪部を表わしているに過ぎない。火輪は高さ三・五センチ、幅一七センチで、軒の厚みも殆ど略されている。風輪は高さ五センチ、幅一三・五センチで、空輪は高さ四・五センチ、幅一二・五センチである。地輪に縦二行の刻銘の跡が見られるが文字は判読できない。形式から見て江戸中期に近い造立と思われる。

9 箱の行旨家墓地脇の一石五輪塔

甲山町大字宇津戸

宇津戸の箱地区、行旨辰三家の墓地脇に、図二一一・二一二のように一石五輪塔の一つの面の地輪から上を平らにして、そこを像高三〇センチ、肩幅一〇センチの合掌した仏体を刻出したものがある。全高六〇センチの花崗岩製である。

地輪の高さ一九センチ、幅は上端一五センチ、下端一六センチ、水輪は高さ一六センチ、径一五・五センチ、火輪の端が風輪部まで

図211 箱の行旨家墓地脇の一石五輪塔

図213 同所の五輪塔・石仏

図212 同（他面）

のびていて高さ一二・五センチ、軒幅一四センチ、軒中央部の厚さ七センチである。風輪の高さ六センチ、空輪の高さ一一センチ、径一三センチである。

本塔の脇には室町時代の石仏四体と二基の五輪塔がある。また近くの地つづきの山林内の墓地に二基の一石五輪塔や多数の五輪塔があり、「堀」、「小丸山」の地名も残り、この付近に中世土豪の館のあったことをうかがわせる。

10　金藤家脇の一石五輪塔

甲山町大字赤屋

赤屋の丸山、金藤一郎家裏手の台地上に、図二一四のような二基の一石五輪塔がある。石質は荒い花崗岩質で、高さは右手の方が六八センチ、左手のが六〇センチである。

図214　赤屋の金藤家脇の一石五輪塔

右手の塔は空輪が椎の実形で、高さ一五センチ、幅一三・五センチでやや大きく目立つ。風輪は高さ四・五センチで、この下部に火輪部の軒端が高く突き出ている。水輪はたこ壺形で、高さ二二センチと長く、地輪は一七センチと低くなっている。現在、空輪部と火輪部が折損して三つに分かれているが、元は一石であったと思われる。

左手の塔は、空輪部が右手の塔より低く、高さ一一センチ、水輪部は右手のものより一七センチと低い。地輪部は高さ幅とも一七センチで、石質は両塔とも同質に近い。

こういった形式の一石五輪塔は、赤屋の新山、国正利夫家の山林中に一基、西上原の仏法寺跡付近に五基、世羅町東神崎の毛利繁夫家前の道路脇に一基（高さ六五・五センチ）、茶垣内の墓地に一基（高さ五二・五センチ）などがある。本形式の一石五輪塔は、室町時代末期から江戸初期にかけての造立と推定される。

尚、今高野山福智院裏手の墓地には、同じような形式の一石五輪塔の一つの面に、二体の石仏を刻出したものが一基、また小世良の農免道路脇の一画には、一体の石仏を刻出したものが他の石仏や一石五輪塔と共に立っている。

11 小世良農免道路脇の一石五輪塔

甲山町大字小世良

高さ六〇センチの花崗岩製で、一つの面に合掌する仏像を刻出している。地輪は高さ一二センチ、幅二一センチで低い。水輪は方形で高さ一五センチ、幅二一センチ、火輪は中央部の高さ八センチ、隅部は三角にとがっている。風輪は高さ一〇・五センチ、幅一九センチ、空輪は三角形で高さ一二センチ、幅一七センチである。

石仏は風輪部から水輪部にかけて像の周りを掘り下げて、像が浮き出るように刻出している。像高二一センチ、合掌する坐像の姿から地蔵菩薩と思われる。像の下部に反花が刻出されている。

本塔は底部が方形でなく、脇の面の幅は一六センチと短い。時代は近世初頭のものと推定される。

図215 小世良農免道路脇の一石五輪塔

図216 同

12 今高野山墓地の一石五輪塔

甲山町大字甲山

今高野山の福智院墓地域にある亀山家墓地の脇にある。高さ四六・五センチ、下端の幅二〇・五センチ、風輪の幅一六・五センチである。火輪の軒が風輪部まで突出した形をしており、水輪も方形に

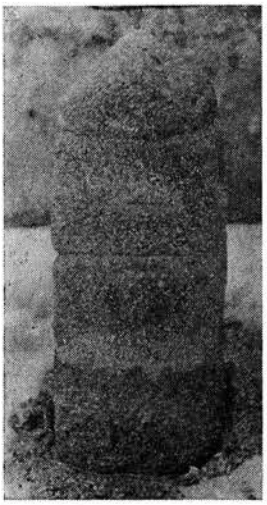

図217 今高野山墓地の一石五輪塔

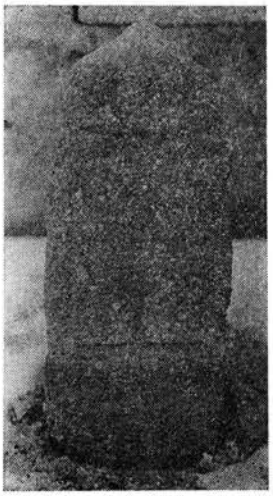

図218　同

なっている。

側面は正面より幅がやや狭く、下端幅一五・五センチ、水輪の径一三・五センチ、火輪の幅一二・五センチ、空輪径一〇センチとなっている。

石仏は、風・火・水輪部に相当する位置に二体並んで刻出されており、像高二〇・五センチ、胴部の幅七センチである。近世初頭の造立と思われる。

13　影政の一石五輪塔

甲山町大字西上原

西上原の信実治夫家の裏山付近を影政と呼んでいる。一石五輪塔は山中の一画に径四メートル、高さ二メートルばかりの円墳があり、この脇に地輪部の長い一石五輪塔が五基と石仏が四基、他に五輪塔の残欠が集められている。

一石五輪塔は高さ六〇～七〇センチばかりで、石質は良くなく風化が進んでいる。石仏の石質も同様で同時代・近世初頭頃のものと思われる。

図219　西上原影政の一石五輪塔

14 三上家墓地の一石五輪塔

世羅町大字井折

井折の三上家墓地にあり、全高六八センチの花崗岩製で、地輪の高さ三七センチ、幅一六センチである。水輪は高さ一〇センチ、径一六センチ、火輪は高さ一〇センチ、軒幅一六センチ、軒の厚さ四センチである。風輪は高さ四・五センチ、径一二センチ、空輪の高さ六・五センチ、経一一センチで空風輪の径はほぼ同大である。

図220 三上家墓地の一石五輪塔（寛文三年）

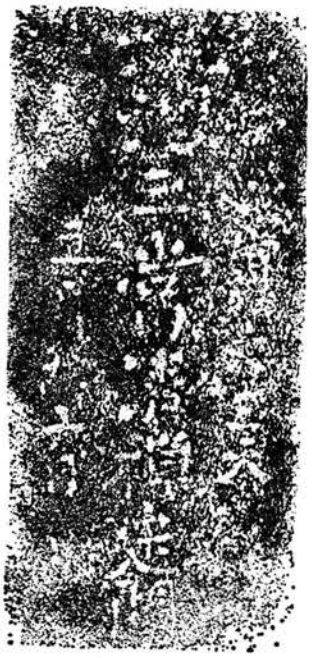

図221 同（地輪拓影）

地輪の下部に枘があり、高さ一五センチ、幅三二センチの基壇の上に建てられている。基壇は前方中央部に方形の線香立て、左右に円形の花立の穴、後方に地輪の枘を受ける枘穴があいている。

地輪の正面に次の銘がある。

寛文三天
空風火水地　□三常清禅定門
五月廿二日

15 尾道屋の墓碑

甲山町大字甲山

今高野山の安楽院の墓地脇に、江戸時代の甲山町年寄を勤めた小川家の墓地がある。その中の一基に図二二二のような五輪塔を二基刻出した墓碑がある。

切り石の方形の基壇の上に基礎をおき、その上に舟形の塔身をおいてある。基礎は高さ三〇センチで上部に単弁の反花を刻出している。塔身は高さ一五三センチ、下部の幅四六センチ、上部最大幅五六センチで下部に蓮華座を設けている。

碑面に二基の五輪塔を刻出し、各輪には、キャ・カ・ラ・バ・ア

図222　尾道屋の墓碑

の種子を陰刻している。地輪は高さ二三センチ、幅一五センチ、水輪は高さ一二センチ、幅一五センチのつぼ形で下部がすぼまっている。火輪は高さ八・五センチ、幅一五センチで、隅部がかなり上部につき出ている。空風輪は高さ一二センチで、空輪の先端がとがっている。

五輪塔の下部に、「貞享□年十月八日　逆修……」の銘があり、貞享年間（一六八四―八八）の五輪塔の形式を知ることができる。

16　川尻久恵の坂東家墓地の墓石

甲山町川尻

川尻の久恵、三川ダム道路脇に坂東家の墓地がある。この中に図二二三のように五輪を彫り出した墓石がある。全高一〇四センチ、幅四〇センチ、五輪塔の高さ七四センチである。銘は正面に、

宝暦四戌
法名　釈理證信士
四月十一日

とあり、脇には「大元廿六代　坂東重左衛門」と陰刻されている。

図223　川尻，坂東家墓地の墓石

(七) 板碑

荘内には現段階で五基の板碑が発見されている。これらの板碑に共通する点として、いずれも花崗岩製であること、額部が一線ないし二線に見え、上端を山形にとがらしていることがあげられる。

このうち三基に仏像が刻出され、身部はいずれも輪郭を伴わず、背面は荒く整形されている。これらの板碑はいずれも室町時代後期の造立と思われるが、近隣を見ても、御調郡久井町大字泉及び三原市沼田東町納所字近広と尾道浄土寺に各一基見られる程度で数が少なく、桑原方では未見である。

大きさは、高さ七〇センチ前後のもの（No.4宮広家碑・No.2京丸碑）と高さ一〇〇センチ前後のもの（No.3万福寺跡碑・No.1津口塔の岡碑）との二種がありそうで、この外、大型のもの、特殊なものとして、今高野山護摩堂脇に光明真言種子板碑（No.5）や種子板碑（No.7）がある。

表6　郡内の主要な板碑一覧表

No.	名称	所在地	高さ（地上高）（センチ）	幅（センチ）	備考
1	峠の塔の岡板碑	世羅町大字津口	一一七	二四～二六	蓮華座を持つ石仏を刻出、下部に銘字あり。（應永十二カ）
2	京丸の板碑	世羅町大字京丸	六八	二四・五	額部の下に地蔵菩薩を刻出。
3	万福寺跡大仙社裏の板碑	世羅町大字堀越	九九・五	一七～二〇	額部の下部に銘字あり。
4	万福寺跡宮広家の板碑	世羅町大字堀越	七二	二三・七～二五	額部の下に、光背を持つ石仏を刻出。
5	今高野山光明真言種子板碑	甲山町大字甲山	一八三	五七	上端は山形。光明真言種子を陰刻。
6	丹下寺址自然石板碑	甲山町大字宇津戸	一三六	三八～四二	自然石に三尊種子、下部に銘字を陰刻。
7	今高野山護摩堂脇種子板碑	甲山町大字甲山	一二〇	三八	種子の下部に今高野山とあり。背面を彫って手水鉢にしていた。
8	泉の金行家裏山板碑	久井町大字泉	一二三	二七・五～二八・五	上端は山形。上部に阿弥陀如来坐像を刻出、下部に銘字を陰刻。
9	矢熊の自然石板碑	甲山町大字宇津戸			種子の下部に「権大僧都南光坊」とあり。

1　峠の塔の岡板碑

世羅町大字津口

津口の峠、塔の岡の原野に宝篋印塔や五輪塔などの残欠といっしょにこの板碑が建っている。花崗岩製、現高一一七センチで、先端を山形に切り、その高さ一三センチ、肩の幅二四センチで、先端部が僅かに前傾している。額部は高さ四・五センチ、身部は高さ九六センチで、上半分に阿弥陀如来の坐像を刻出している。蓮華座は五弁で、中央大弁の左右の弁間に小花を入れている。銘文は蓮華座の下部に数行に分けて陰刻されているが、判読ができていない。形式から見て室町初期の造立と推定される。

図224　峠の塔の岡板碑

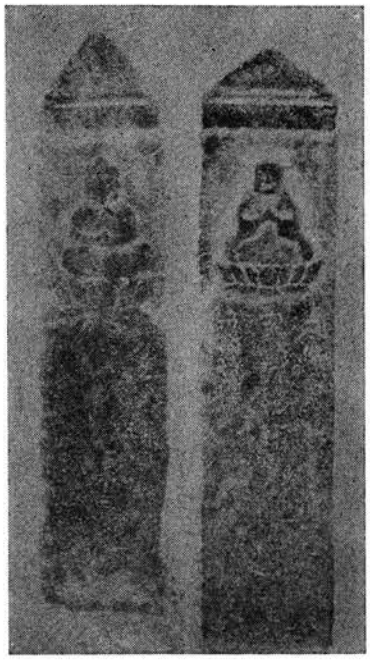

図225　(左)塔の岡板碑拓影
(右)金行家裏山の板碑拓影

2　金行家裏山の板碑

久井町大字泉

泉の金行家は前面及び側面の一部を堀で囲まれ、側面から背後にかけて土塁が巡り、その一画の平坦地にこの板碑が建っている。全高一四三センチで、地上部は一二三センチである。幅は下端部が二八・五センチ、中央部あたりが二七・五センチである。額部は幅二六・五センチ、厚さ五センチ、額部の上の線は高さ二センチで、先

図226　金行家裏山の板碑
坐像拓影

端が山形にとがっている。上部の山形は高さ八・五センチ、一辺一四センチで素面である。

身部には、高さ六・三センチ、幅二一センチの蓮華座の上に、像高二一センチ、肩幅一二センチ、膝張り一八センチの阿弥陀如来(カ)の坐像が刻出されている。銘文は蓮華座のすぐ下から地表近くまで三行に陰刻されている。

為□　　敬
(像)　南無阿弥陀仏　□□□□十月一日
　　□阿弥陀仏　　白

本塔は、前後の塔の岡の板碑とほぼ同形同大であり、造立も同じ頃の室町時代初期をくだらないものと推定される。

3　宮広家前の板碑

世羅町大字堀越

板碑は県史跡万福寺跡の入口辺に位置する宮広重夫家の前庭に他の石仏と並立する。花崗岩製で、高さ七二センチ、先端を額部の上八センチのところから、山形に切る。額部は下部高さ三・五センチ上部四センチで下部に向けて一センチ刻り下げている。肩の幅二三・七センチで、身部より三・五センチ突出している。

身部は高さ四九センチで、上部に頭光・身光を持つ高さ二七センチの地蔵菩薩(カ)立像を刻出している。像を浮びあがらせるため、頭光・身光部を彫り下げている。また板碑を横から見ると前に傾斜させてある。

図227　宮広家前の板碑

尚、この板碑の右手に高さ三六センチ、幅二九・五センチの花崗岩に二体の仏像を刻出した石仏があり、左手にも高さ四四センチ、

図228　同

幅二〇センチの石に仏像を刻んだものがある。いずれも室町時代のものと思われる。

4　京丸の板碑

世羅町大字京丸

旧京丸小学校東の道路脇に立っている。花崗岩製、高さ六八センチで、先端を山形に切る。身部は高さ五二・五センチで、像高三一センチの地蔵菩薩立像を刻出している。山形の高さ八・五センチで、その下部に高さ三センチ及び四センチの額部がある。

上の額部は山形より二・五センチ突出し、下の額部に向って、斜めに切りこんでいる。下の額部は身部より一・五センチ突出し、肩の幅二四・五センチである。厚さは一五センチある。この板碑も横から見るとやや前傾斜に仕立ててある。

図229　京丸の板碑（正面）

図230　同（側面）

5　万福寺跡の板碑

世羅町大字堀越

堀越万福寺跡の大仙社の小祠の裏に五輪塔と並立している。全高九九・五センチ、地上高六五センチの花崗岩製のもので、先端を山

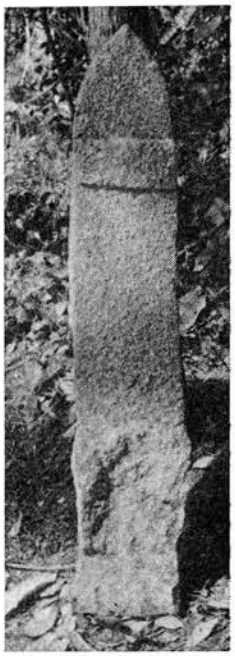

図231 万福寺跡の板碑（正面）

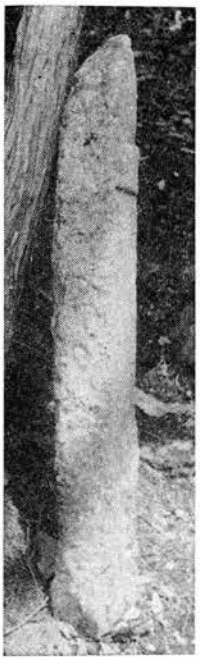

図232 同（側面）

形に切り、額部は高さ七～七・七センチ、幅一六～一六・五センチで、身部より〇・六センチ突出している。額部の上部から先端までは高さ一六・七センチで、身部には前傾斜がない。

地表部の幅二〇センチ、身部の中間部の幅は一七センチである。厚さは約一一センチで、身部に銘文が陰刻されているが、判読できていない。

6 今高野山の種子板碑

甲山町大字甲山

今高野山の護摩堂脇にあり、地上高一二〇センチの花崗岩製である。上端・下端の幅三八センチ、厚さ三二センチの直方体で、上部に大きく大日如来の種子バーンクを薬研彫し、その下に「今高野山」と陰刻している。

背面は水舟にくり抜かれており、後世になって種子板碑を手水鉢に転用したものと思われる。

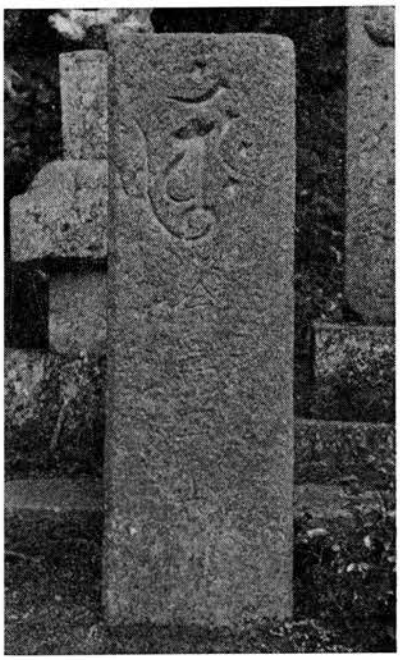

図233 今高野山の種子板碑

7 今高野山の光明真言板碑

甲山町大字甲山

今高野山護摩堂脇にあり、高さ一八三センチで、上端を山形に切っている。上端の幅五六・五センチ、下端の幅五七センチで、高さ三・四センチ、幅九一センチ、奥行六六センチの切石の台石の上に

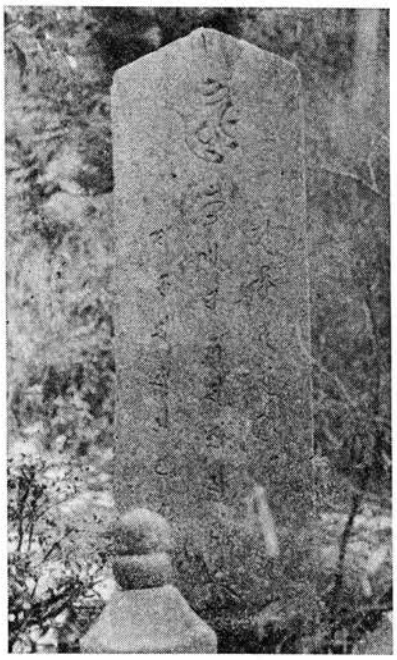

図234　今高野山の光明真言板碑

立っている。上部の中心に、金剛界大日如来のバーンクの種子を薬研彫りし、その下に三行で光明真言を陰刻している。

ア　ベイ　ナウ　ボ　ニ　ジンバ　バ　ウーン
オン←ギャ←シャ←カー←マ←ドマ←ハラ←ヤ←タ
ボ↘ロ↘マ↘ダラ↘ハン↘ラ↘リタ↘ハッ↘

他に刻銘はなく、類似の遺品もないので造立の年代については留保しておきたい。

8　矢熊の自然石板碑

甲山町大字宇津戸

宇津戸の矢熊谷の円山に五輪塔の残欠や一石五輪塔にまじって本板碑がある。

図235　矢熊の自然石板碑

自然石を利用したもので上端が山形になっている。上部に月輪を陰刻し、中にキリークを彫っている。種子の下部に「権大僧都南光坊」とあり、以下土中に埋っている。

こういった形式のものは、宇津戸の下仮屋丹下寺跡に例がある。また、今高野山塔の岡の自然石に彫られている「権大僧都宥恵逆修塔」とあるものは、上部にアを陰刻している。

(八) 無縫塔

太田荘には中世の無縫塔が、残欠を含めてこれまでに一〇基余り発見されている。石質は、東上原久代谷薬師堂の石灰岩製の塔身を除いてはいずれも花崗岩製である。

単制のものは万年寺跡僧侶墓碑のうち、「扶岩」の銘のあるもの(No.5)、「長安」の銘のあるもの(No.6)、文裁寺墓地のもの(No.10)及び丹下寺跡のもの(No.7)である。

重制のものは、貞治五年の銘を有する康徳寺開山塔(No.1)が最も古く、これにつぐものは慈徳院開山塔(No.2)で、万年寺跡の二基(No.3・4)はいずれも室町後期のものである。

康徳寺、慈徳院、廃万年寺はいずれも仏通寺系統の寺院であり、他の寺院には古い時期の無縫塔が見られないようである。なお、東上原久代谷薬師堂の塔身(No.8)は、石灰岩で作られており他の部分が失われているのが惜まれる。

表7 郡内の主要な無縫塔一覧表

No.	各称	所在地	高さ(センチ)	形式	備考
1	康徳寺開山塔	世羅町大字寺町	一二一	重制	「康徳開山」「石室和尚霊塔」「貞治五年丙午[神]夏」
2	慈徳院開山塔	世羅町大字重永	九〇	重制	無銘。室町中期。
3	万年寺跡塔	甲山町大字川尻	一四〇	重制	無銘。室町後期。
4	万年寺跡塔	甲山町大字川尻	九九	重制	無銘。室町後期。
5	万年寺跡塔	甲山町大字川尻	一〇二	単制	扶岩の銘あり。室町末期。
6	万年寺跡塔	甲山町大字川尻	七〇・五	単制	長安の銘あり。室町末期。
7	丹下寺跡塔	甲山町大字宇津戸	六八・五	単制	無銘。室町。
8	上谷薬師堂塔	甲山町大字東上原	二七・五		塔身のみ。石灰岩製。
9	文裁寺墓地塔	甲山町大字赤屋	—	重制	竿部。
10	文裁寺墓地塔	甲山町大字赤屋	七六	単制	銘字の跡あり。江戸初期か。
11	仏法寺谷塔	甲山町大字西上原	—	重制	塔身。竿。基礎?。

1　康徳寺開山の無縫塔

世羅町大字寺町

基礎・竿・(中台)・請花・塔身の五部より成る重制無縫塔である。現在康徳寺の墓地の一画に他の近世の無縫塔群と並置されている。全高一二一センチ、花崗岩製、下に二段の基壇を設けている。

上の段は基礎と同じく八角形で、長さ六三センチあり、八面素面である。下の段は、長さ九二センチ、高さ約二一センチの長石三石で正方形に積んでいる。

八角形の基礎は、素面であるが上端の反花は複弁一葉をすみに配し、複弁と複弁との間に界線の反花を刻出しており、下部の長さは四二センチある。八角の竿は高さ二三センチ、幅は一辺九・五センチで、径二二・五センチである。前方の二面に、「康徳開山」、「石室和尚霊塔」と一行ずつ陰刻し、更に隣りの面に「貞治五年丙午仲夏」とある。

中台は略されているが、請花は高さ一六センチで、小花入り素弁十六葉を刻出している。塔身は高さ二五・五センチ、最大径は三〇センチあり、肩が張った室町形式のものである。竿の銘文の通り、寺伝では石室禅師の墓と伝えているが恐らく供養塔であろう。尚、康徳寺に伝わる石室禅師の位牌には、「康應元年九月廿五日寂」とあり、本塔の銘文と一致しない。後考をまちたい。

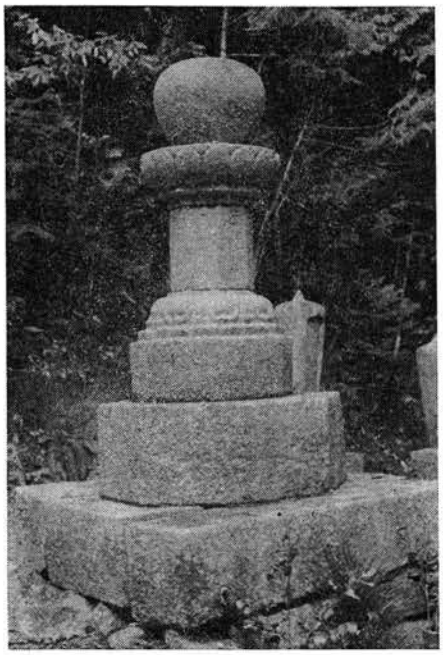

図236　康徳寺開山の無縫塔

図237　同

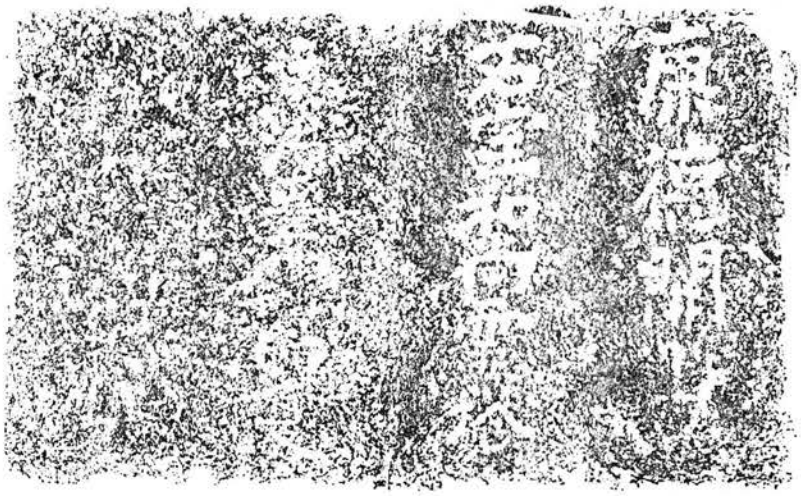

図238 康徳寺開山の無縫塔（竿部拓影）

2 慈徳院墓地の伝開山無縫塔

世羅町賀茂

墓地内にある江戸時代の歴代僧侶無縫塔の中にこの塔がある。傍には室町時代末期の仏体を刻出した一石五輪塔があり、背後には室町時代の宝塔一基及び宝篋印塔の残欠が散在する。また五輪塔も多数集められている。全高九〇センチの花崗岩製である。

基壇は八角形で上下端を切り放し、各面にも格狭間はない。一面の高さ一二センチ、幅二二センチである。基礎は八角形で、高さ一七センチ、各面上端に複弁一葉を配し、隅は界線の反花を刻出している。側面は高さ一一センチ、幅二九センチで、一面を除いて輪郭付格狭間入である。

竿は高さ一九・五センチ、一辺の幅八・五センチで刻字等は見あたらない。中台は高さ一〇・五センチ、八角形で、各面の下端に単弁一葉と隅は界線の反花を刻出している。側面は高さ三センチ、一辺の幅一三・五センチで格狭間はない。上端は水平に切り、中央に径五・五センチ、深さ一・二センチの枘穴をあけている。

請花は高さ一〇・五センチで、稜をつけた小花入り素弁八葉を刻出している。上端の径は二七・八センチで、中央に径五・五センチ、深さ一センチの枘穴があり、下端中央には径五・五センチ、高

さ一センチの枘がある。

塔身は高さ一三・五センチと小型で、肩の張った球形である。石質が荒い花崗岩で他の部分の石質と異なり後補と思われる。肩のあたりの最大幅は一六・五センチで、上端中央に径五センチの枘穴風の円を刻出し、下端には径五・五センチの枘を刻出している。塔身の中央の四面に梵字の痕が残っている。

図239　慈徳院墓地の伝開山無縫塔

図240　同（基礎部拓影）

慈徳院は応永七年（一四〇〇）、三次市の東酒屋城主松尾長門守光勝の女、松岩禅尼の創立といわれ、仏通寺愚中法弟の古枘を開基とし、九世長琳の代に毛利家の祈願寺となり、寺領十四貫三百を給せられたという（『世羅郡誌』）。寺伝では、本塔を応永二三年に入寂した開山松岩禅尼の墓と伝えるが、定かではない。

3　万年寺跡の無縫塔

甲山町大字川尻

川尻の久恵地区には、中世万年寺という禅宗の寺院があったと伝えられている。現在は三川ダムの湖底に没したため、古石塔はダム

図241　万年寺跡の重制無縫塔

図242 万年寺跡の重制無縫塔

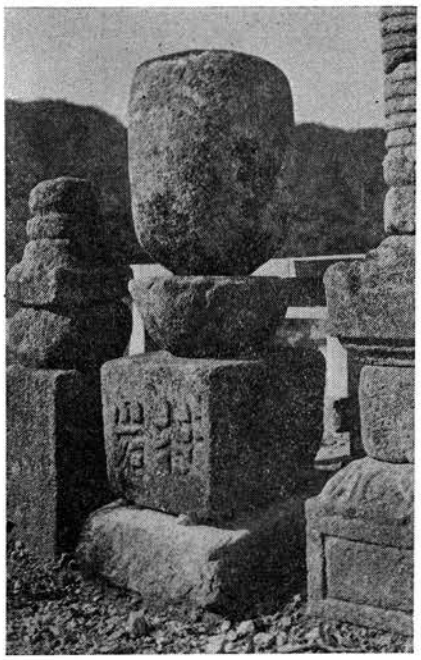

図243 万年寺跡の単制無縫塔（銘扶岩）

の小島に移されている。これらの古石塔は多数の宝篋印塔や五輪塔で占められているが、この中に四基の無縫塔が含まれている。これらの石塔のうち紀年銘を有するものなど七基が、「万年寺僧侶墓碑」として広島県重要文化財に指定されている。

図二四一は、全高一四〇センチ、花崗岩製の重制無縫塔である。基壇は八角形で高さ一七センチ、上端には各面の中央及び各端にくるように複弁の反花が均等に配されている。側面は格狭間はなく素面である。

基礎は高さ二四センチで八面に整形され、各面に格狭間を設け、上端は複弁の反花を一葉ずつ中央に設け、各端には界線の反花が刻出されている。竿は高さ二四センチ、各面の幅は一〇・五センチ、中台は高さ一八センチで、下端には複弁の反花をめぐらし、上部側

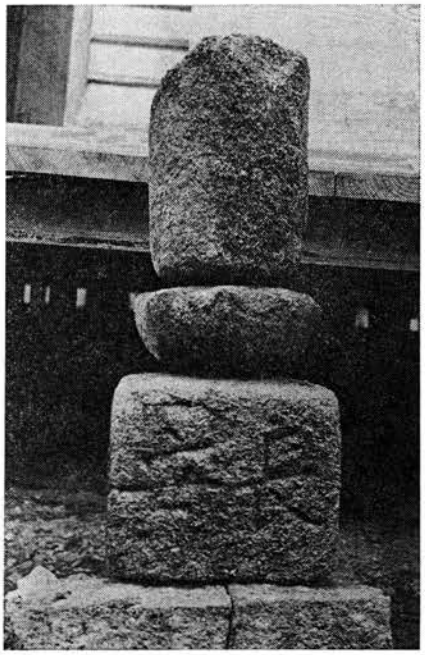

図244 同（銘長安）

面の八面には格狭間を設けている。請花は八葉の小花入り素弁をめぐらしている。塔身は高さ三八センチ、径三一・五センチで、肩の張った室町形式のものである。銘字は不明であるが歴代僧侶の墓碑と思われる。

図二四二は花崗岩製の重制無縫塔で、高さ九九センチの小ぶりなものである。基礎は八角で高さ二一・五センチ、側面は素面であるが、上端は複弁の反花を設けている。竿は高さ二〇センチ、中台は高さ一六・五センチで、下端に反花を、上部側面の各面には格狭間が設けられている。請花は八葉の大型の素弁となっている。塔身は高さ二五・五センチのもので、時代は室町後期のものと推定される。

図二四三は花崗岩製の単制無縫塔で高さ一〇二センチ、基礎は高さ三一・五センチ、幅三七センチで、正面に大きく横に「扶岩」と陰刻してある。請花は高さ一八・三センチ、幅三四・五センチで、稜をつけた小花入り素弁八葉を刻出している。塔身は高さ五二センチ、径三五・五センチで頭頂にわずかに突起がある。

「扶岩」の名は、双三郡吉舎町大字清綱の浄土寺の木造阿弥陀如来坐像（天文四年在銘）の胎内墨書にも記載されており、本塔は室町後期の造立と思われる。

図二四四は花崗岩製の単制無縫塔で、高さ七〇・五センチである。基礎は高さ二三センチ、幅二八センチ、請花は高さ一二センチ、幅二三・五センチで素弁八葉を刻出している。塔身は高さ三四センチ、径二一センチで、上部の一部を欠損している。基礎は横に大きく「長安」と陰刻され、万年寺僧侶の墓碑と思われる。

4　文裁寺墓地の無縫塔

甲山町大字赤屋

赤屋の文裁寺墓地にあり、単制の花崗岩製のものである。総高七七センチ、基礎は高さ二四センチ、幅三二センチであるが、塔身や請花とやや石質を異にしており或は別物かもしれない。

請花は高さ一八センチで、長い単弁を八弁、それぞれの間には小花をめぐらしている。上部の径は三〇センチあり、中央に径五センチの枘穴がある。塔身は高さ三五センチ、最大径二一・五センチ、

図245　文裁寺墓地の無縫塔

下部の径一四センチで細長い形をしており、両面に陰刻の跡が見られる。形式から見て室町末期から江戸初期にかけての造立と思われる。

この外に小型の重制無縫塔の竿部と思われる高さ二三センチ、幅一五・五センチの花崗岩製のものがある。側面は幅八センチと五・五センチを交互にめぐらした八角形のもので、上部及び下部に径四・五センチの枘がある。

5 丹下寺跡の無縫塔

甲山町大字宇津戸

宇津戸下仮屋の谷家の下方に丹下寺跡と呼ばれる畑がある。この畑の脇の山寄りに石灰岩製の宝篋印塔や五輪塔があり、その中に一基の無縫塔がある。

高さ六八・五センチの花崗岩製の単制の塔で、基礎の高さ一八センチ、幅二六センチで上部に径七・五センチ、深さ二センチの枘穴がある。

請花は高さ一四センチ、幅二六・五センチで小花入り素弁八葉を刻出している。下部には枘がある。塔身は高さ三六・五センチ、最大径二八センチで頭頂には突起がない。塔身の下部はすぼまり、下端の径一三センチで枘がある。

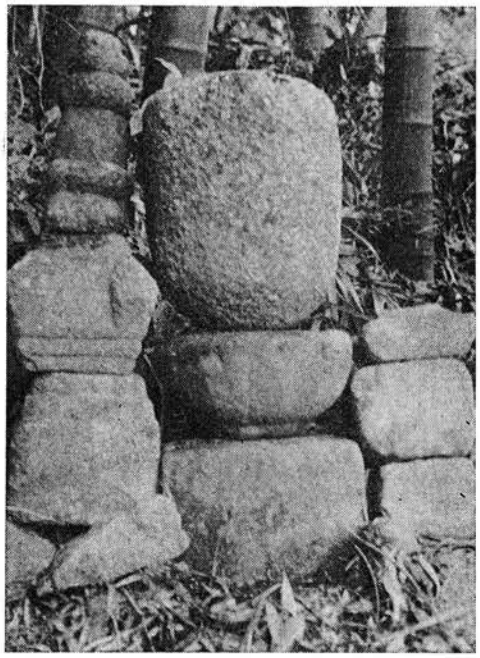

図246 丹下寺跡の無縫塔

丹下寺跡は、中世備後国鋳師総大工職として活躍した鋳物師丹下氏の菩提寺の跡と言われている。

(九) 石仏

荘内における石仏は小型のものを入れると相当な数に達するものと思われるが、大部分は六〇センチ未満の小石仏が多く、時代も室町末期から近世初頭にかけてのものが多い。

石仏には紀年銘を刻するものが殆んどなく、たとえあっても風化が進み読みとれぬものが多い。ただ一例、世羅町大字田打の慶長銘の石仏があるのみである。

古式で大型に属するものとしては、甲山町大字川尻の金光省三家裏山にある石仏群(阿弥陀如来坐像・高さ一〇二センチ他)があり、いずれも下部に蓮華座を刻出している。石質も良質な点は古い時期の宝篋印塔や五輪塔とも共通している。

甲山町大字西上原の極楽寺境内には高さ九七センチの地蔵菩薩像があり、下部左右に格狭間を刻出している。同東上原上谷大池畔の辻堂跡にも古式の石仏（高さ六〇センチ）があり、川尻の金光家裏の助友の石橋の脇には室町末期の石仏（高さ八四センチ）がある。また、世羅町大字青山の青山寺境内には高さ約五〇センチの阿弥陀如来坐像があり、螺髪・白毫までていねいに刻出した後代の勝れた作品がある。

石仏造立の目的は銘文がないため定かでないが、小石仏の多くは墓塔と考えられる。紀年銘のある田打月ヶ平の慶長二年銘の地蔵菩薩坐像の下部には「□福阿弥陀佛」とあり、地蔵信仰に基づく造立と思われる。尚、地蔵菩薩の立像を彫成したものは六〇センチ前後のものが多い。

石仏は江戸時代に入ると新四国八十八ヵ所めぐりなどの目的を持った石仏が各地に造立されるようになるが、これらの石仏と比較して室町期のものは頭部が大きく彫成されたものが多く、末期になると合掌した地蔵菩薩と思われる坐像が一般的となるようである。

表8　郡内の主要な石仏一覧表

No.	名称	所在地	高さ(センチ)	備考
1	東上原大原の地の石仏群	甲山町大字東上原	一〇二外	四体のうち三体は蓮華座がある。阿弥陀如来・地蔵菩薩の坐像外。
2	極楽寺の地蔵菩薩立像	甲山町大字西上原	九七	極楽寺境内にあり。下部に格狭間を刻出している。
3	上谷大池畔の石仏	甲山町大字東上原	六〇	阿弥陀如来坐像。蓮華座。

No.	名称	所在地	高さ(センチ)	備考
4	青山寺の阿弥陀如来坐像	世羅町大字青山		青山寺境内にあり。彫成が細やかである。
5	慈徳院の地蔵菩薩立像	世羅町大字重永	一三九	蓮華座の上に月輪を刻出した基礎の上に立つ。
6	月ケ平の地蔵菩薩座像	世羅町大字田打	一〇二(地上高)	石垣積の基壇あり。慶長二年七月(一五九七)の陰刻あり。
7	金光家裏の石仏	甲山町大字川尻	九〇(地上高)	頭部が大きく刻出された坐像。桃山時代の形式をもつ。
8	観音寺山丹下氏墓地の石仏	甲山町大字宇津戸	九四	阿弥陀如来坐像か。風化が進んでいる。桃山期。
9	文栽寺墓地の石仏	甲山大字赤屋	五九外	二体(五九センチ。五三・五センチ)。阿弥陀如来坐像。
10	別迫砂田の石仏群	甲山町大字別迫	六〇外	地蔵菩薩(六二・五センチ。六〇センチ)の外は阿弥陀如来坐像の小石仏。
11	播磨福仙寺跡の石仏	甲山町大字別迫	五三	地蔵菩薩立像。
12	播磨赤羽根道上の石仏	甲山町大字別迫	六六	地蔵菩薩立像。
13	矢熊水が迫の石仏	甲山町大字宇津戸	四九	坐像。
14	別迫四つ辻堂内の石仏	甲山町大字別迫	六二・五	頭部の一部を欠失。立像。
15	永安寺址の石仏	世脇町大字中原	七五外	三尊仏(七五センチ)、二尊仏(二七センチ)。
16	万福寺址宮広家の石仏	世羅町大字堀越	三六	二尊仏。
17	東神崎坂壁の石仏	世羅町大字東神崎	六三	石灰岩製。地蔵菩薩立像。
18	今高野山護摩堂脇の石仏	甲山町大字甲山	五〇外	五〇センチ、四二センチ。
19	宗友荒神の石仏群	甲山町大字別迫	五五外	六基(五基に円光背あり)。
20	松葉屋横の辻堂内石仏	世羅町大字西神崎	六八	地蔵菩薩立像を蓮華座の上に刻出。
21	京蔵山の石仏	甲山町大字宇津戸	五〇	石仏を蓮華座の上に刻出。
22	黒川の石仏	世羅西町大字黒川	五三・五	円光背の地蔵菩薩立像。
23	歓喜寺跡付近の石仏	世羅西町大字黒川		
24	医王寺跡薬師堂の石仏	世羅町大字本郷	七〇	地蔵菩薩立像。他に小石仏五体あり。
25	康徳寺墓地参道脇の石仏	世羅町大字寺町	四七外	六体の小石仏。
26	今高野山護摩堂脇の石仏	甲山町大字甲山	一九五	元文三年。

27　徳慈院の地蔵菩薩立像　世羅町大字重永　一三九　蓮華座の上に月輪。

1　東上原大原の石仏

甲山町大字東上原

東上原と川尻との境、羽場崎の金光省荘家の裏手山林中に、石仏が四体ある。いずれも花崗岩製で石質良好である。

図二四七は全高一〇二センチの阿弥陀如来坐像である。各部の寸法は像高五九センチ、頭部の高さ二二センチ、肩幅三三センチ、膝張り四二・五センチである。下部に蓮華座があり、高さ一二センチ、幅四二センチ、中央の大弁の左右にそれぞれ三葉の弁を刻出している。光背は舟形で高さ六一センチ、幅は中央部で五〇センチある。像容は螺髪で、衲衣は偏袒右肩、印は弥陀の定印を結んでいる。時代は鎌倉時代末期から南北朝期にかけてのものであろう。

図二四八は全高八五・五センチの地蔵菩薩像である。黒雲母の多い花崗岩製で、像高五六センチ、頭部の高さ一六センチ、肩幅二六センチ、膝張り三七センチである。下部に蓮華座があり、高さ八センチ、幅三八センチ、中央の大弁の左右に、それぞれ三葉の弁を刻出している。光背は円光背で径二七センチである。右手に錫杖を、左手に宝珠を持った容姿で、衲衣は偏袒右肩である。南北朝から室町前期にかけての造像と思われる。

図二四九は全高六三センチ、笏風の物を手にもった坐像で、衲衣は偏袒右肩で、下部に蓮華座がある。像高四六センチ、肩幅二四センチ、膝幅三五センチ、蓮華座の高さ一〇・五センチ、幅三七センチで、図二四七と同様な蓮華座をもっている。尚、背面にも衣紋を

図247　東上原大原の石仏

図248　同

図249　同

刻出している。

他に、風化が進み、刻線も定かでない、腕の部分の欠損した石仏が一体ある。

2 上谷大池畔の石仏

甲山町大字東上原

東上原上谷の久代城下、大池畔の道路脇にある。花崗岩製で全高六〇センチ、下部の幅四一センチ、厚さ二〇センチである。蓮華座の上に弥陀定印を結んだ阿弥陀如来と思われる坐像があり、肩の幅一九センチ、膝張二五センチである。風化が進んでいるが古雅な石仏である。もとは四つ辻堂内に納められていたが、現在はコンクリート製の小堂に納置されており、傍には鎌倉時代のものと推定される五輪塔の地輪が二基ある。

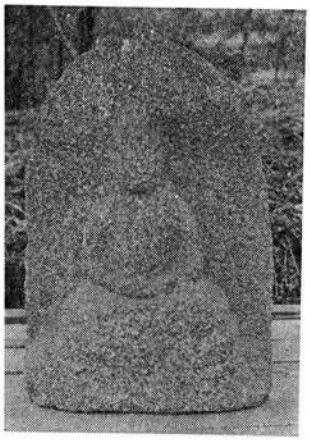

図250 上谷大池畔の石仏

3 西神崎、松葉屋横の辻堂にある地蔵菩薩

世羅町大字西神崎

西神崎の国道脇の辻堂に祭られているもので、高さ六八センチ、

図251 松葉屋横の辻堂の地蔵菩薩

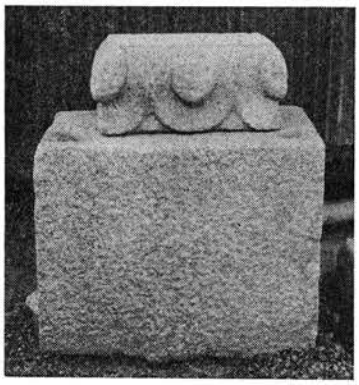

図252 同所の基壇と台座

幅三二〜三三センチの花崗岩製の石仏である。

像高は四六・五センチ、頭部の高さ一二センチ、幅八・五センチ、肩幅一八センチで、右手に錫杖、左手に宝珠を捧げ持っている。下部に高さ一〇センチの蓮華座を刻出している。造立の時代は南北朝から室町初期と推定される。

なお、辻堂の裏に図二五二のような基壇及び反花を刻出した台座があり、石質はよく似ている。

4　極楽寺の地蔵菩薩立像

甲山町大字西上原

西上原の極楽寺の境内に石仏数体が安置されているが、その中の一体に写真（図二五三・二五四）のような基礎に格狭間をもつ地蔵菩薩がある。基壇は上下二段から成り、下の基壇は高さ一五センチあまり、幅六六センチの二枚の石でつくり、その上に高さ三四センチ、幅四六センチの五輪塔の地輪のような上の基壇がある。上の基壇の上部には径九センチ、深さ三センチの穴がある。

石仏は基礎部から光背まで一石で彫成されており、全高九七センチ、菩薩の頭部から脚部まで、つまり像高は七〇センチである。基礎は高さ一四・五センチ、幅四六センチで、左右に格狭間を設けている。各格狭間は高さ九センチ、幅一七センチ、格狭間と格狭間の間は約三センチ幅ある。両格狭間は端部がわずかに欠損している。

地蔵菩薩は右手に錫杖、左手に宝珠を持っているが、宝珠部は僅

図253　極楽寺の地蔵菩薩立像（正面）

図254　同

かに欠損している。頭部は大きく彫られ、高さ一九・五センチ、幅一四・五センチで、光背部より鼻先まで九・五センチの厚さがある。光背は円光背で、直径四〇センチである。

背面は荒けずりで整形されていない。上の基壇及び基礎の格狭間端に刻銘の痕をとどめるが、文字は判読できない。室町時代の初期から中期にかけての造立と思われる。

5　宗友荒神脇の六地蔵

甲山町大字別迫

別迫砂田の河淵家前方の台地に宗友荒神の小祠があり、脇に六体の石仏がある。いずれも花崗岩製で、高さ五〇センチ余りの小像である。頭光までを一石で刻出した石仏は珍らしく、他には西上原極楽寺の地蔵菩薩（項前）と世羅西町大字黒川の石仏の例がある。

向って左から、高さは五五センチ、五六センチ、五〇・五センチ、五一・五センチ、三〇センチ（欠上）、三一センチ（欠下）、同じく下端の幅は、二七センチ、二九センチ、二八センチ、二六センチ、二八センチ、不明である。

頭光はやや風化しているが径二〇～二五センチで、円光背から三五～五・五センチ程像が前面にでている。下部（礎基）には蓮弁等はない。

図255　宗友荒神脇の六地蔵

なお、現状では右端の石仏の台座は、前方格狭間付の宝篋印塔の基礎で、高さ二一センチ、幅二八センチ、室町末期のものである。これらの石仏群は室町末期から近世初頭に六地蔵として造立されたものと推定される。

6　今高野山護摩堂脇の石仏

甲山町大字甲山

今高野山の護摩堂の脇に江戸時代の石仏等がたくさん集められている。中に二体のやや古い石仏がある。

図二五六の向って右の石仏は、高さ五〇センチの花崗岩製で、下端の幅二八センチ、下部に二つの格狭間が設けてある。格狭間は高さ六センチ、幅一〇センチの中に陰刻されているが、風化が進みはっきり残っていない。像は頭部を極端に大きく刻出しており、頭部の高さ一五センチ、最大幅一〇センチである。腕は弥陀の定印を結ぶごとく、膝の上で両手が合わされており、肘の張ったところの最大幅は二〇・五センチある。また肩から胸にかけて衣文状のものを刻出している。

左の石仏は高さ四二センチ、下端の幅二六・五センチで、下部に反花状のものを刻出している。頭部は右のと同じく大きく刻出しており、高さ一四センチ、最大幅一〇センチで、肩から腕にかけてこのつくりも右の石仏と同様な形式である。

仏像の種類は判然としないが、大日如来か阿弥陀如来と思われる。造立の時期は室町末期であろう。

尚、付近には、「元文三戊午仲夏吉日」の銘をもつ、基礎からの

図256　護摩堂脇の石仏

高さ一九センチの丸彫りの地蔵坐像がある。

7 福仙寺跡の石仏

甲山町大字別迫

福仙寺跡の墓地に他の石塔とまじってある。全高五四センチの花崗岩製で、像高三七センチ、肩幅一四センチの立像である。風化が進んでいるが、右手に錫杖状の物を持ち、左手に宝珠様のものをもっていることから地蔵菩薩と思われる。下端の幅は二九センチあり、下端から一一センチ上ったところ付近は前面に突き出ていて、ここに蓮華座が刻出されている。造立の時代は室町前期頃と思われる。

図257 福仙寺跡の石仏

8 別迫の大規模農道脇の辻堂の石仏

甲山町大字別迫

別迫の大規模農道の交差点近くの辻堂に、上部の左側を斜めに欠失した花崗岩製の石仏がある。

現高六二・五センチ、下端の幅二七センチで、下端から八・五センチの部分が一番前に突き出ている。石仏は像高四九センチで、頭部は高さ一二センチ、幅八・五センチ、肩幅は一七センチ、裾幅は一六センチである。像は光背の面より約四センチ前面にでている。

図259 同（側面）

図258 別迫辻堂の石仏（正面）

室町時代の造立であろう。

9　永安寺跡の石仏

世羅町大字中原

中原の永安寺跡の墓地に、多数の五輪塔や宝篋印塔に混って、三尊仏の石仏がある。花崗岩製で高さ七五センチ、最大幅三八センチである。やや舟型の石に中尊及び脇仏の三体とも合掌した像を刻み、弥陀三尊と思われる。腕より下部は風化のため不鮮明で、下方に字の痕のようなものも見られるがはっきりしない。三尊仏は郡内では珍らしく、今のところ他に発見例がない。

なお、付近にある図二六一の二尊石仏は、全高二七センチで、稚拙な仏体を線刻しており、石質も赤味の多い軟質な石である。

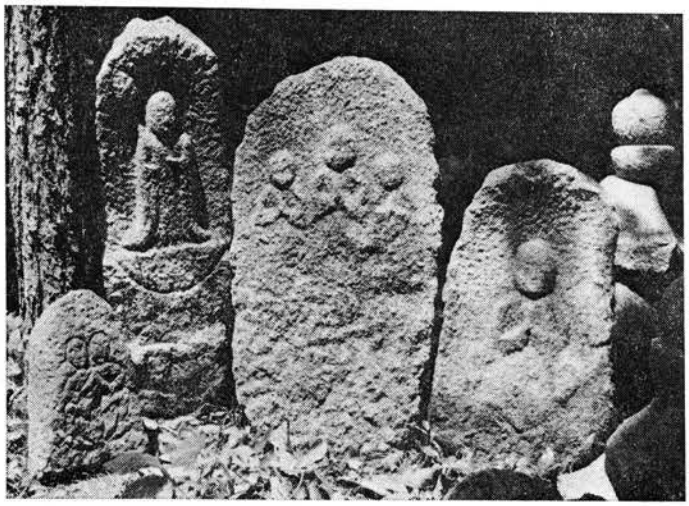

図260　永安寺跡の三尊石仏

図261　同所の二尊石仏

10　万福寺跡宮広家脇の二尊石仏

世羅町大字堀越

堀越万福寺跡、宮広家の脇に板碑形の石仏（前述、一六〇頁）と並んで立

図262 万福寺跡，宮広家脇の二尊石仏

っている二尊石仏で、高さ約四〇センチ、花崗岩製である。二尊は阿弥陀如来と大日如来と思われる珍らしい組合せの石仏である。

11 播磨赤羽根道脇の石仏

甲山町大字別迫

別迫播磨の赤羽根道上に墓地があり、その脇に石仏がある。高さ六六センチの花崗岩製で、全体を舟形に彫成し、下部に蓮華座状のものを刻出している。下端の幅二七センチ、中央部の幅三〇センチ、頭部辺の幅一二センチである。厚さは下部が厚くて安定しており、中央部辺りで一二センチある。

図263 播磨赤羽根道脇の石仏

石仏は舟形の先端から一二センチ下に頭頂部が位置しており、像高三四センチ、肩幅一二・五センチ、裾幅二〇センチで、右手に錫杖を、左手に宝珠を持っている。石仏の下部に高さ九センチの半円形の蓮台を刻出している。なお、本塔の上手には室町時代初期の宝篋印塔が一基立っている（図八六）。

12 医王寺跡、薬師堂脇の石仏

世羅町大字本郷

本郷の平城、医王寺跡の薬師堂裏に宝篋印塔や五輪塔の残欠に混って石仏が数体ある。

写真（図二六四）の石仏は花崗岩製で、高さ七〇センチ、幅は下

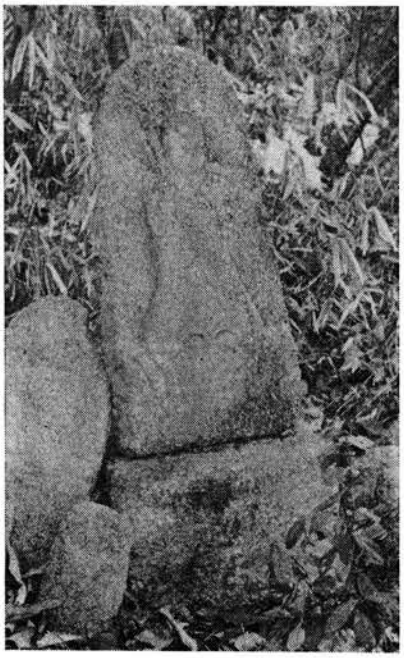

図264　医王寺跡薬師堂脇の石仏

端で三八センチ、肩の辺りで二九センチ、下の台石は高さ二八センチ、幅三八センチであり、当初からのものと思われる。台石は各面切り放しの素面で刻銘の痕が見られるが、石質がやや不良で風化が進み文字は読み取れない。

像は地蔵菩薩の立像で、像高四〇センチ、肩幅一五センチ、像の下部に高さ一二センチ、幅三二センチの蓮華座を刻出している。蓮華座の形式等から室町末期の造立と思われる。他に五体ばかりの石仏があるが、いずれも室町末期から近世初頭のものと推定される。

13　金光家裏の石仏

甲山町大字川尻

川尻の松岡城跡の下方、土居の地名の残る辻堂跡にある。花崗岩製で、全高九〇センチ、中央幅四一センチ、下部の幅四三センチ、石の厚さ二〇センチである。像高四六センチ、頭部の高さ一七センチ、肩幅二一センチ、膝張三〇・五センチ、蓮華座の高さ一六センチ、幅三〇・五センチある。径三五センチの円光背を刻出しており、頭部が大きい。簡単な彫刻の仏像で阿弥陀如来、或は薬師如来であろうか。蓮華座の形式から見て、近世初頭のものと思われる。

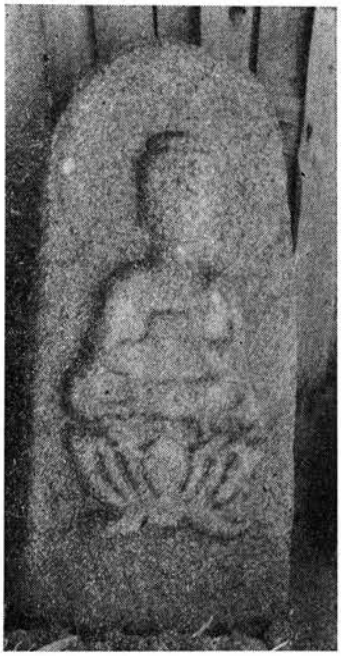

図265　金光家裏の石仏

14 月ケ平の地蔵菩薩坐像

世羅町大字田打

田打の月ヶ平薬師堂上の茶園の中に、長さ二〇二センチ、高さ七〇センチの石積の基壇があり、この中に花崗岩製の石仏がある。

高さは、地上高一〇二センチで、下部はまだどのくらい埋っているか不明である。幅は、地表面で六〇センチ、首部で五六センチ、厚さは二〇センチである。

図266 月ケ平の地蔵菩薩坐像（慶長二年銘）

図267 同（側面）

直径二〇センチの頭光をもち、像高四〇センチ、肩幅二四・五センチ、膝張り四七センチ、頭部の長さ一五・五センチ、蓮華座の中心の高さは一四・五センチある。像は少し浮き上るように刻出されており、右手に錫杖、左手に宝珠を持った地蔵菩薩の坐像で、蓮華座は中央大弁が縦長になり、左右の弁も線刻で隆起が少ない。像の左右及び下部に、次のような文字が刻まれている。

高野山　小田原實相院

（像）　（蓮華座）　慶長二丁酉年七月六日

福壽坊　□福阿弥陀佛

誰が、何のために建てたか伝承がないが、銘文の判読できる石仏として貴重である。尚、近くの薬師堂境内には、室町期の五輪塔が十数基残存している。

15 康徳寺の石仏群

世羅町大字寺町

康徳寺の歴代僧侶墓碑に近い参道の脇に六基の小石仏がある。いずれも花崗岩製で、五体は下部に蓮華座を設けている。

図二六八の写真、向って左から、高さは、四二、四五、四七、四

七・五、四五、四一センチ、幅は下端部で二六、二六、二六、二六、二八、二五センチ、像高は二六、三一、三二・五、三四、三二、二六センチである。室町末期から近世初頭の造立であろう。

図268　康徳寺の石仏群

16　別迫砂田の石仏群

甲山町大字別迫

図269　別迫砂田の石仏群

別迫砂田の東グランド近くの小池堅三家裏山にある墓地に、六体の花崗岩製の小型石仏がある。寸法は図二六九の写真の向って左から、高さは、三五、四四、六〇、四六、四三、四三センチ、幅は下端部で、それぞれ二一、二三、三〇、二五、二六、三〇センチである。像を半肉彫りしたものが四体、周囲を彫りくぼめて像を浮彫りにしたものが二体で、いずれも室町末期から近世初頭頃の造立であろう。

17 東神崎坂壁の石仏

世羅町大字東神崎

東神崎の坂壁の山林中に、全高六三センチ、幅三〇センチの石灰岩製の石仏がある。右手に錫杖、左手に宝珠をもった地蔵菩薩を浮き彫りしたもので、当地方では石灰岩製の石仏は数が少ない。近くには、花崗岩製の五輪塔数体（地輪六、水輪六、火輪三、風空輪五）、石灰岩製の五輪塔の地輪一一、水輪一三、火輪七、空風輪七がある。石仏も石塔も室町末から江戸初期にかけてのものと思われる。

図270 東神崎坂壁の石仏・石塔

18 文栽寺墓地の石仏

甲山町大字赤屋

赤屋の文栽寺墓地に室町後期の宝篋印塔と共にある。図二七一の向って右の石仏は、高さ五三・五センチ、幅は下端部で二八・五センチ、頭部辺りで二四センチである。像高二五センチの石仏を陽刻し、像の下部に高さ一〇センチの蓮華座を刻出している。

図271　文裁寺墓地の石仏

左の石仏は、高さ五九センチ、幅は下端部で二八センチ、頭部辺りで三一センチである。像高三一センチの合掌する石仏を陽刻し、下部に高さ六センチの略式の蓮華座を刻出している。共に坐像で、室町後期〜末期の造立であろう。

(十) その他の石造物

その他の石造遺物としては、結界石・鳥居・笠塔婆・自然石墓碑・燈籠・道標などがある。いずれも数は多くないが、それぞれに特殊なもので、その造立の趣旨はよく考える必要がある。中でも今高野山に残る建武五年銘の結界石は大変興味深いもので、近くでは尾道の浄土寺にも結界石が残存している。石鳥居は、一応中世のもの三基を数えるが、高さはいずれも二メートルほどで小型のものである。かつてあったであろう神社の数に比し、石鳥居の残存例は少ない。

中世末には、自然石の一面を整形して、そこに銘文を記した碑があらわれる。僧侶の墓碑・大乗妙典塔などであるが、今回検出したものは数例にすぎない。中世末に一時期流行した石造物と思われるが、今後の検討にまちたい。この項でも更に近世のものも数例挙げておいた。近世のものは、今後の調査で更に更に数が増すことが予想されるが、取りあえず、当地の石造物の流れを理解する上で、代表的なもの、気の付いたものを参考のためにかかげておいた。

表9 郡内のその他の主要な石造遺物一覧表

No.	名称	所在地	高さ(センチ)	時代	備考
1	今高野山結界石	甲山町大字甲山	一〇八	南北朝時代	建武五年九月八日（県重文）。三基。
2	粟島神社石鳥居	甲山町大字甲山	二〇九・五	南北朝時代	康暦二年二月十三日（県重文）。
3	野原の石鳥居残欠	世羅町大字津田	二〇五	鎌倉時代	「文永十酉九月日　大旦那小森」後銘か。
4	水が迫の石鳥居残欠	甲山町大字宇津戸	四九	鎌倉～室町	残欠。
5	観音寺の笠塔婆残欠	甲山町大字宇津戸	八〇	南北朝時代	「延文五年庚子」
6	万福寺跡大乗妙典塔	世羅町大字堀越	一二五	室町時代	天文二十四年。
7	万年寺僧侶墓碑	甲山町大字川尻	一一二外	室町時代	永禄四年外一基。
8	塔の岡の宥恵逆修塔	甲山町大字甲山	七〇	室町時代	
9	中原の庚辛供養塔	世羅町大字中原	七〇	室町時代	天正十一年。
10	鳳林寺の自然石墓石	甲山町大字伊尾	九三	室町時代	天正十三年と銘あり。
11	法泉坊僧侶墓碑	世羅町大字津口	一三七外	室町・江戸	「天正九年辛巳九月廿七日」「寛永五年三月二十三日」

12	丹治家の南無妙法蓮華経塔	上下町大字松崎	一五〇・五外	江戸時代	寛永二年。
13	乙丸の墓石	甲山町大字青近	一三五	江戸時代	貞享元年。
14	今高野山　観音堂脇の石燈籠	甲山町大字甲山	一八〇	江戸時代	天和三年。
15	今高野山　護摩堂脇法界塔	甲山町大字甲山	三〇〇	江戸時代	宝暦五年。
16	川角橋の石橋供養塔	甲山町大字青近	一五五	江戸時代	正徳六年。
17	青近の種子道標	甲山町大字青近	七〇	江戸時代	明和七年。
18	今高野山石鳥居	甲山町大字南山		江戸時代	延宝五年。
付	寺町廃寺跡の礎石	世羅町大字寺町		奈良時代	

1　今高野山の結界石

甲山町大字甲山

今高野山境内の片端に三基の花崗岩製の結界石が集められている。向って右のものは、高さ一〇八センチ、上端の幅二八センチ、下端の幅二七・五センチ、上端から頂点までの高さ一〇センチで、正面に「大界外相北方」と陰刻されている。

中央のものは、石柱の上半分を欠失しており、高さ五八・五センチ、上端の幅二六・五センチ、下端の幅二八センチで、上部に「□方」の陰刻が見られる。

左のものは、高さ一〇五センチ、上端の幅二七・五センチ、下端の幅二八センチ、上端から頂点まで高さ一一・五センチである。正面に「大界外相西方」、左側面に「建武五年九月八日」と陰刻されている。

これらの石柱は、今高野山の寺域の四囲に建立されていたもので一基は現在所在が不明である。

2　今高野山粟島神社の石鳥居

甲山町大字甲山

今高野山の子院の一つ、安楽院の山門脇に建っていたもので、数十年前に少し上方の現在地に移転したものである。高さ二〇九・五センチの花崗岩製である。

笠木と島木を一石で刻出しており、長さ一七三センチ、両端でわずかに反っている。貫は高さ一四センチ、幅一二センチの切り石であり、中央部で折れている。額束は高さ二一・五センチ、幅一二・三センチで、ほぼ正面いっぱいに胎蔵界金剛界の大日如来の種字

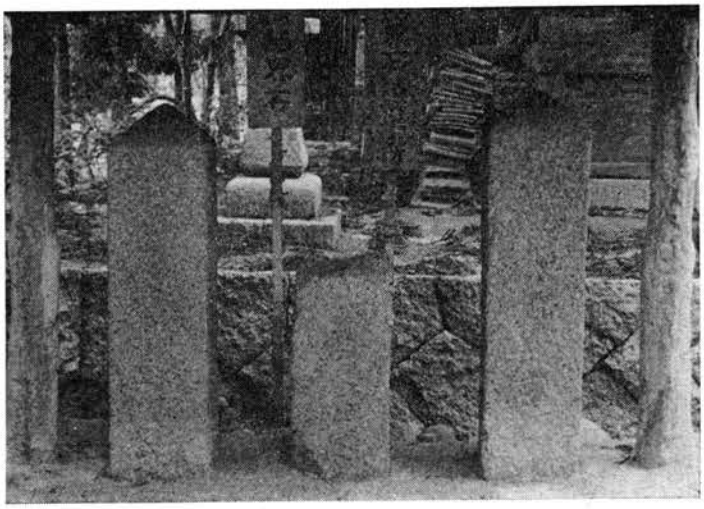

図272　今高野山の結界石

「ᠠᠪᠤᠨ」の二字を刻んでいる。龍華寺境内にある図二九一の法界塔も同じ二字を刻んでである。

柱はころびのないもので、高さ一五〇・五センチ、径二三センチ

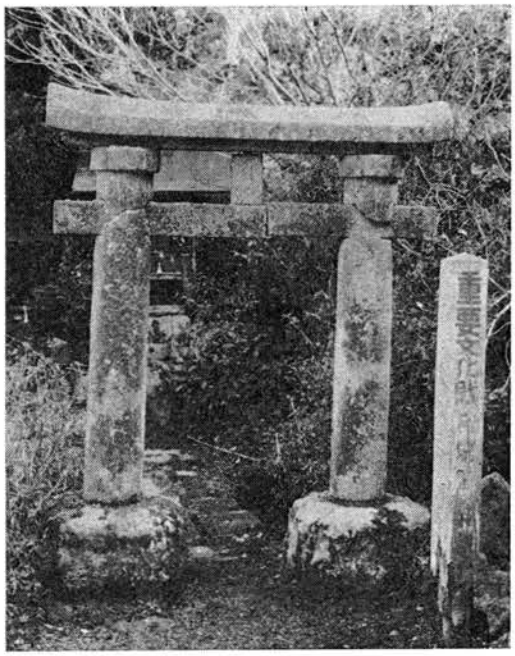

図273　今高野山粟島神社の石鳥居

左右の柱と柱の間の距離は地表面で八四センチである。亀腹は高さ三九センチ、径六三センチで、上端に複弁の反花を刻出している。右の柱に「康暦二年庚申二月十三日」の銘があり、在銘完存の古鳥居として貴重であり、広島県指定の重要文化財になっている。

3　津口野原の鳥居残欠

世羅町大字津口

津口野原の山林中に、図二七四のような古式の鳥居の残欠がある。この鳥居の左右の柱には次のような銘文がある。

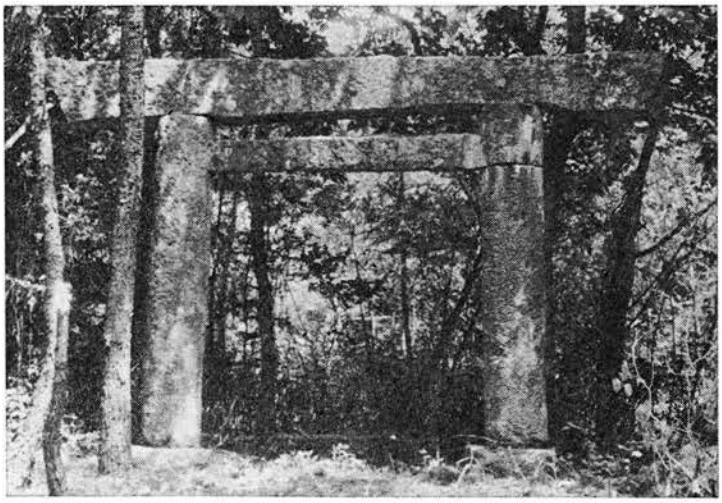

図274　津口野原の鳥居残欠

図275　同（右側柱）

（向右側柱）

神主左近大夫

文永十酉九月大旦郡（那）小森

野原八幡宮

（向左側柱）

延享四丁卯九月崩ル

明治三十年九月再建ス

柱は現高二〇五センチ、径は左右三一センチ、前後三五センチで、前項で触れた粟島神社の鳥居と同じくころびのない古式のものである。貫や笠木などはいずれも明治の再建の折のものと思われる。

4 水が迫の石鳥居残欠

甲山町大字宇津戸

甲山町大字宇津戸の矢熊谷、水が迫の一本松の根元に宝篋印塔や五輪塔にまじって鳥居の残欠がある。残欠は亀腹二、左右の柱の一部及び笠木の一部である。

亀腹の上部に径二四・五センチの円形柱受けが刻印され、中心に径一一センチの枘穴がある。亀腹は風化しているが複弁の反花が刻出されている。柱は残欠の長さ五六センチ、長径一九・八センチ、短径一七・五センチの円形に近いもので、下部に枘があり亀腹にさし込むようになっている。他の柱の残欠は長さ九八・五センチで、上部に貫を通すための長方形の穴がある。穴の大きさから見て、幅一一・五センチ、厚さ七センチの貫であったことがわかる。

笠木は柱の上部辺から端にかけての部分が残存し、長さ三四センチ、高さ一八センチ、下部に径七センチの枘穴がある。

この鳥居は今高野山の康暦二年銘の石鳥居を更に小型化した古い様式のもので、造立はそれに近い時期のものと思われる。大きさは各所の寸法からみて、恐らく高さ二メートルに満たないものであったと思われる。

因に、ここより二〇〇メートル離れた位置に建つ地頭八幡神社の棟札に、「當所御垂跡元享(ママ)二年　其後再興両度　今當永享十二庚申年」とあり、或は本鳥居は、元亨二年（一三二二）創建当初に建て

図276　水が迫の石鳥居残欠ほか

られたものであったかも知れない。

5　観音寺の笠塔婆残欠

甲山町大字宇津戸

宇津戸地区は昭和三十年町村合併により、御調郡から甲山町に編入されたところで、古くは「海裏荘」と呼ばれ、太田荘と隣接するところである。

本塔は下部を欠損しているが、現高八〇センチ、幅二一・五センチ、厚さ一八センチの角柱状のものである。上端には径六センチ、高さ一・五センチの枘があり、元来はこの上に宝珠と笠、または空風火水輪を一石で造ったものが乗せられていたものであろう。

上端から二二センチほど下の辺り四面に径一七センチの月輪を刻み、中に金剛界四仏を薬研彫で陰刻している。キリークの彫られた面には、「延文五年庚子（下欠）」の銘が見える。

図277　観音寺の笠塔婆残欠

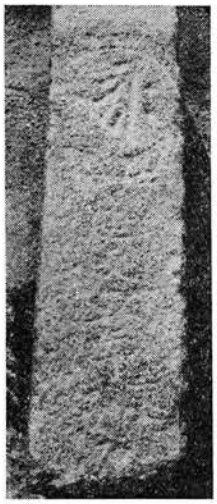

図278　同（拓影）

6　万福寺跡の大乗妙典塔

世羅町大字堀越

万福寺跡の入口近く旧片山家の屋敷裏に、高さ一二五センチ、下端の幅三四センチ、中央部の幅三〇センチの図二七九のような石碑が立っている。花崗岩製の自然石の正面に銘文が刻まれている。

五千部□□（久カ）道永禅定門　宝智妙□禅定尼

図279　万福寺跡の大乗妙典塔

バク　奉讀誦大乗妙典五千部為□(預カ)修善根
天文二十八□(一カ)月吉日

尚、天文十五年（一五四六）頃、堀越及び周辺に所領を有する小寺氏は、林・重安・井上・永末ら国人衆とともに毛利氏の配下となって活躍している。また天文十六年には毛利元就から万福寺の寺堂供養として具足が送られ、堀越城主小寺若狭守敬秀の追善供養料として俵物四〇俵が寄進されている（「萩藩閥閲」録四六）。これらのことから、本塔は或は小寺氏に係わる石塔かも知れない。

7　万年寺跡の自然石僧侶墓碑

甲山町大字川尻

川尻の久恵、三川ダムの小島に万年寺の僧侶墓碑が七基ある。ここに紹介するのはその中の二基で、一基は高さ一一二センチ、中央部の幅四〇センチの花崗岩質のものである。この墓碑正面に三行に分けて次の陰刻がある。

永禄四年酉
前住佛通鳳庵禅師
閏三月十二日

他の一基は高さ約一一〇センチ、中央部の幅四八センチの花崗岩製の自然石で、表面に

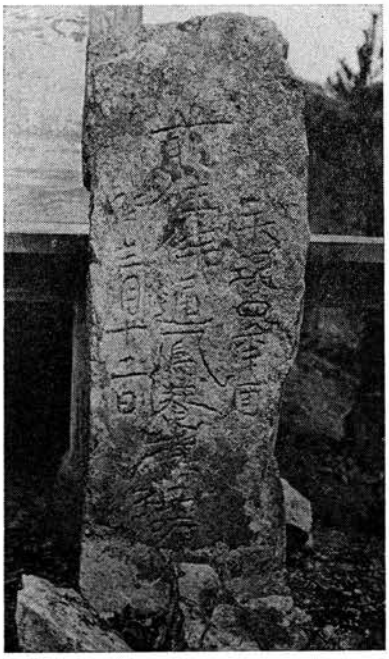

図280　万年寺の自然石僧侶墓碑（永禄四年銘）

図281　同

佛　　逆

前住平翁均禅師　　權大僧都法印宥恵

通　　修

と陰刻がある。

8　今高野山塔の岡の自然石逆修塔

甲山町大字甲山

今高野山の塔の岡の愛宕神社の下辺りに、図二八二のように露出した花崗岩の一面を舟形に整形した宥恵上人の逆修塔がある。整形した部分は高さ約七〇センチ、下端の幅約三〇センチで、これに次のような銘文が陰刻されている。

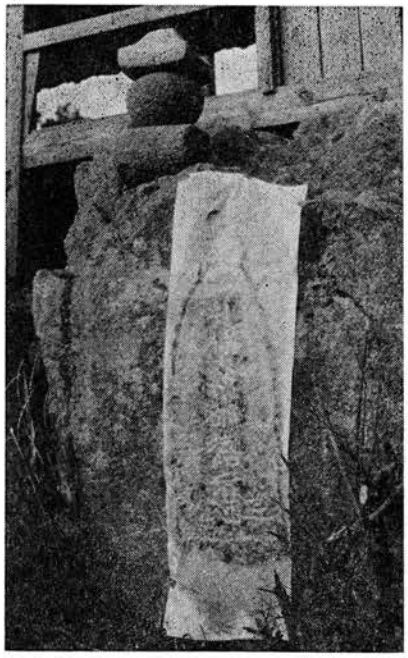

図282　今高野山の宥恵逆修碑

銘文の下部に蓮華座の痕跡のようなものが残っているが、下部は剝落していて定かでない。因に宥恵は、金剛寺の住職で文禄三年(一五九四)三月六日に没している人物と、福智院に住し宝暦十三年(一七六三)六月一日に没した人物の二人がいる。

9　中原の庚申供養碑

世羅町大字中原

京丸より橋を渡り、中原側へ入るとすぐ道路脇に一基の庚辛(申カ)塔が

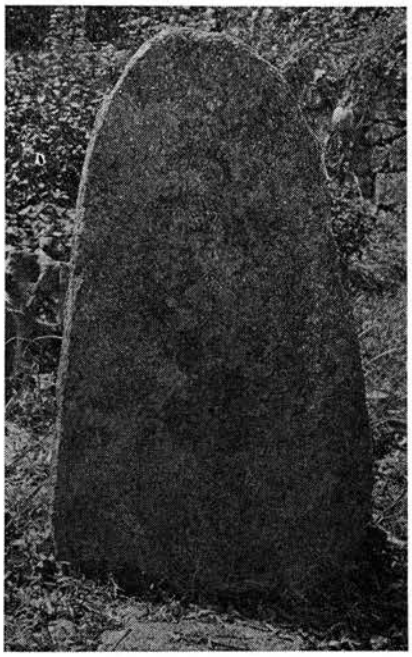

図283　中原の庚申供養碑

立っている。地表の高さ一二〇センチの自然石で、下端の幅は約七〇センチ、上部に月輪と阿弥陀三尊の種字を、その下方に銘文を三行に陰刻している。

天正十一未(羊)年八月十一日

○ 這石塔者奉為庚辛(申カ)供養者現世安全後世（以下土中）

重永在片山三郎左衛門敬白

天正期の庚申供養の石塔は荘内では他には発見されていない珍らしいものである。因に三原市では現在七ヵ所に計一〇基が発見されているが、造立年代はいずれも若く、享保年間から明治にかけてのものである。なお、本塔は近くの重永に住む片山家（屋号をしょうじゃくという）が管理・供養している。

10 鳳林寺墓地の自然石墓石

甲山町大字伊尾

鳳林寺の伝湯浅氏墓地の脇に、図二八四のような自然石を利用した墓石がある。花崗岩で、高さ九三センチ、最大幅四四センチである。正面はある程度整形し、そこに銘文三行を陰刻している。

天正十三年乙酉
岩秀浄井禅定門
九月廿日死去

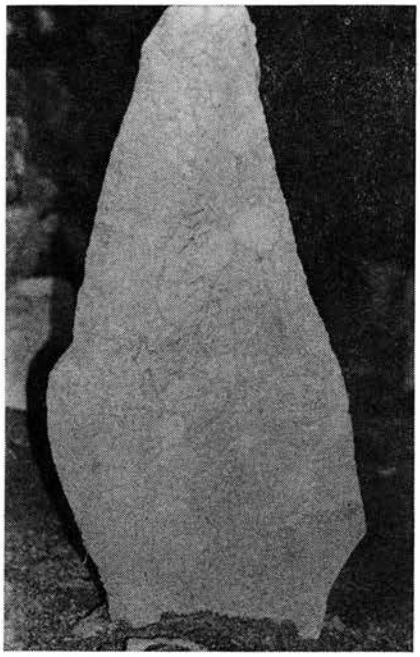

図284 鳳林寺の自然石墓石

11 津口法泉坊僧侶墓碑

世羅町大字津口

津口の法泉坊の向いにある墓地の中に写真のような墓碑がある。図二八五は開山の墓碑で、花崗岩、高さ一三七センチである。正面に法名「釋崇圓」と、裏面に「天正九辛巳九月廿七日」と陰刻している。台石は高さ二五センチ、幅一一〇センチの自然石のままの石である。

図二八六は、高さ八七センチ、下端の幅三七センチ、正面を舟形に彫り下げ、上部に阿弥陀如来坐像を刻出し、その下に、「釋祐西

図286　津口法泉坊の祐西墓碑

図285　津口法泉坊の崇圓墓碑

寛永五年　三月二十三日」と陰刻している。

12　丹治家の南無妙法蓮華経塔

上下町大字松崎

松崎の奥原家脇に花崗岩製の二基の塔婆がある。図二八七の塔は基壇からの高さ一五〇・五センチで、基壇は切り石を並べている。

図287　丹治家の南無妙法蓮華経塔

図288　同（寛永二年銘）

基壇は高さ二一センチ、幅九一センチ、基礎は高さ三五センチ、幅五九センチで四方切り放しの素面である。塔身は高さ九四・五センチ、下端の幅三七センチ、上部の幅三六センチで、中をくり抜き下げて銘文を陰刻している。銘は正面中央部に「南無妙法蓮華経　鶴寿院宗忠」とあり、左側面に「丹治忠右衛門」とある。

図二八八の塔は、基壇からの高さ一四一センチである。基壇は二枚の切り石を使い、高さ二六センチ、幅八七・五センチである。基礎は高さ二三センチ、幅五六・五センチで、四面切り放しの素面である。塔身は高さ九二センチ、下端の幅三六・五センチ、上部の幅三六・八センチである。銘は、正面に「南無妙法蓮華経　月照院妙忠　寛永二乙丑年　八月十三日」と、右側面に「母生歳六十二果」とある。なお、両塔とも正面下部に蓮華座を刻出している。

13　乙丸の墓石

甲山町青近

乙丸の墓地の中に写真のような墓石がある。台座からの高さ一三五センチの花崗岩製である。台座は高さ二五センチ、幅五一センチである。

全体を舟形につくり、先端から三一・五センチ下のところに水平線があり、上方に写真のような石仏を刻出している。下端の幅三七・五センチ、上部の幅四〇センチ、下端から水平線までの高さ七〇センチで、中を板碑形に彫り下げ銘文を刻んでいる。

図289　乙丸の墓石（貞享元年銘）

貞享元年申子
八月五日

（像）（蓮華座）皈宝□叟了閑禅定門灵位

14　今高野山の石燈籠

甲山町大字甲山

今高野山の観音堂脇に庭があり、池に面して一基の燈籠が建っている。花崗岩製で高さ一八〇センチである。基礎は高さ二〇センチの六角形で、上部に複弁蓮弁があり、弁と弁との間に小花を刻出し

ている。側面は切り放しの素面である。

竿は高さ六一センチ、直径二四センチで、中央部に二重の節があり、上端と下端には一重の節がある。中台は高さ一三センチ、六角形で下端に単弁の六葉、間に小花を刻出している。側面は切り放しの素面である。

火袋は六角形で、高さ三二・六センチ、一面の幅一七・五センチで、中央部の四面に日月と方形の穴がくり抜かれている。笠は高さ二二センチの六角形で、一辺約三二センチであるが欠損箇所が多い。軒は水平に切っている。

請花は高さ一一センチあり、八弁を刻出しており、宝珠は高さ一四・五センチである。竿部に次の銘がある。

「寄進　□衛門重政」

図290　今高野山の石燈籠

15　今高野山の法界塔

甲山町大字甲山

今高野山の護摩堂脇にある。基礎からの高さ約三メートルで花崗岩製である。

塔身の正面に「バン」「アー」の種字を刻み、他の面に「諸法本不生　自性離言説　清浄無垢染　因業等虚空」、「本寂無有上　説法無等比　号名世所依　我一切本初」「宝暦五年乙亥　十二月二日　[illegible]　當山安樂院　苾芻常操造立」とある。

基礎には、「石工　泉州信達郷　大連藤原信應」「助工　近在」の

図291　今高野山の法界塔

銘を陰刻している。

16 川角の石橋供養塔

甲山町大字青近

青近の川角橋は現在はコンクリート製であるが、この橋の近くに石橋供養塔が立っている。

花崗岩製で、地表部の高さ一五五センチ、幅三二センチ、上端の山形の一辺は一八センチである。現在塔身は三ケ所で折れており、下部は土中に埋もれている。

正徳六丙申天　施主助右衛門□□

表　石橋供養為六親眷属乃至法界平等利益

二月吉日　敬白

の銘があり、正徳六年（一七一六）の造立であることが分る。

図292　川角の石橋供養塔

17 青近の種子道標

甲山町大字青近

青近乙丸の旧道三叉路に写真のような道標が立っている。上部と下部の一部を欠損しているが、花崗岩製で高さ七〇センチのものである。

正面の上部に月輪で囲んだ無量寿如来の種子を配し、その下に「弘法大師　右やま　左上下」、側面に「明和七寅天」の銘を陰刻している。

この道標に「右やま」とあるのは、近くの山の尾根を「行者が原」と呼んでいるので、その山を指すものと思われる。尚、行者が原にも結晶石灰岩製の宝篋印塔がある（図二二三、）。

図293　青近の種子道標

付　寺町廃寺の礎石

世羅町大字寺町

寺町の箕口には、広島県指定の史跡康徳寺古墳がある。古墳の石室には多数の石が使われている。そしてこの古墳の東側一帯に、水切り突起のついた蓮華文軒丸瓦などの古瓦が出土するところがある。ここは寺町廃寺と呼ばれ、これまでに円形造り出しのある礎石が数個発見されている。

平安末期の太田荘立券のはるか以前、世羅の地は相当に開かれていた。右の礎石は当地に於ける石造文化財の創始を語るものといえよう。

図294　寺町廃寺の礎石

補記

(1)第一章「太田荘の石造遺物」では、主に中世のものを記したが、まゝ近世のものも記した。

(2)造立年代の表現については、一応左記の時代を目安とした。

室町初期――一五世紀前半
室町中期――一五世紀後半
室町後期――一六世紀前半（一五六〇頃まで）
室町末期――一六世紀後半（一五六〇頃から）
近世初期――一七世紀前半

石造物の造立年代の判定については、まだまだ検討を要することが多い。後考をまつとともに、大方のご教示を得たい。